

坑 夫

夏目漱石



一冊堂青空文庫

坑夫

夏目漱石

さつきから松原を通ってるんだが、松原と云うものは絵で見たよりもよっぽど長いもんだ。いつまで行っても松ばかり生えていていっこう要領を得ない。こっちがいくら歩行たって松の方で発展してくれなければ駄目な事だ。いっそ始めから突っ立ったまま松と睨めっ子こをしている方が増した。

東京を立ったのは昨夕ゆうべの九時頃で、夜通しむちゃくちやに北の方へ歩いて来たら草臥くたびれて眠くなった。泊る宿もなし金もないか

ら暗闇くらやみの神樂堂かぐらどうへ上あってちよつと寝た。何でも八幡様らしい。寒くて目が覚めたら、まだ夜は明け離れていなかった。それからなべつ平押ひらおしにここまでやって来たようなものの、こうやたらに松ばかり並んでいては歩く精せいがない。

足はだいぶ重くなっている。膨ふくら脛はぎに小さい鉄の才さい槌づちを縛しばり附けたように足搔あがきに骨が折れる。裕あわせの尻は無論端折はしおつてある。その上洋袴ズボン下さえ穿はいていないのだから不断なら競走でもできる。が、こう松ばかりじゃ所詮敵しょせんわない。

掛茶屋がある。葭簀よしずの影から見ると粘土ねばつちのへっついに、錆さびた茶ちや釜がまが掛かっている。床几しょうぎが二尺ばかり往来へ食はみ出した上から、

二三足草鞋わらじがぶら下がって、絆天はんてんだか、どてらどてらだか分らない着物を着た男が背中をこちらへ向けて腰を掛けている。

休もうかな、廃よそうかなと、通り掛りに横目で覗のぞき込んで見たら、例の絆天とどてらどてらの中ちゆうを行く男が突然こつちを向いた。煙草たばこの脂やにで黒くなった齒を、厚い唇くちびるの間から出して笑っている。これはと少し気味が悪くなり掛ける途端とたんに、向うの顔は急に真面目まじめになった。今まで茶店の婆さんとさる面白い話をしていて、何の気もつかずに、ついそのままの顔を往来へ向けた時に、ふと自分の面相でに出でっ喰くわしたものと見える。ともかく向うが真面目になったのでようやく安心した。安心したと思う間まもなくまた気味が悪く

なつた。男は真面目になつた顔を真面目な場所に据^すえたまま、白^{しろ}眼^めの運動が気に掛かるほどの勢いで自分の口から鼻、鼻から額^{ひたい}とじりじり頭の上へ登って行く。烏打帽の廂^{ひさし}を跨^{また}いで、脳天まで届いたと思う頃また白眼がじりじり下へ降^{さが}って来た。今度は顔を素通りにして胸から臍^{へそ}のあたりまで来るとちよつと留^{とど}まつた。臍の所には墓^{がまぐち}口がある。三十二銭這^{はい}入っている。白い眼は久留米^{くるめがすり}緋の^は上からこの墓口を覗^{ねら}つたまま、木綿^{もめん}の兵児帯^{へこおび}を乗り越してやつと股倉^{またぐら}へ出た。股倉から下にあるものは空脛^{からすね}ばかりだ。いくら見たって、見られるようなものは食^くツ附^ついぢやいない。ただ不断より少々重たくなっている。白い眼はその重たくなっている所を、

わざつと、じりじり見て、とうとう親指の痕が黒くついた俎下駄あともないたげたの台まで降くだって行つた。

こう書くと、何だか、長く一所ひやうしうに立っていて、さあ御覧下さいと云わないばかりに振舞つたように思われるがそうじゃない。実は白い眼の運動が始まるや否いなや急に茶店へ休むのが厭いやになつたから、すたすた歩き出したつもりである。にもかかわらず、このつもりが少々覚束おぼつかなかつたと見えて、自分が親指にまむしを拵うけえて、俎下駄ねじを振まぎわる間際には、もう白い眼の運動は済んでいた。残念ながら向うは早いものである。じりじり見るんだから定めし手間が掛かるだろうと思つたら大間違い。じりじりには相違ない、

どこまでも落ちついている。がそれで滅法^{めっぼう}早い。茶屋の前を通り越しながら、世の中には、妙な作用を持つてゐる眼があるものだと思つたくらいである。それにしても、ああ緩^{ゆっ}くり見られないうちに、早く向き直る工夫はなかつたもんだろうか。さんざつ腹冷^{はらひや}かされて、さあ御歸り、用はないからと云う段になつて、もう御免^{ごめんこ}蒙^{うづ}りますと立ち上つたようなものだ。こつちは馬鹿^{ばか}氣^けている。あつちは得意である。

歩き出してから五六間の間は変に腹が立つた。しかし不愉快は五六間ですぐ消えてしまった。と思うとまた足が重くなつた。――この足だもの。何しろ鉄の才槌^{さいづち}を双方の足へ縛^{しば}り附けて歩いて

るんだから、敏活の行動は出来ないはずだ。あの白い眼にじりじりやられたのも、満更持前の半間まんざらはんまからばかり来たとも云えまい。こう思い直して見ると下らない。

その上こんな事を気にしていられる身分じゃない。いったん飛び出したからは、もうどうあっても家へ戻る了簡りようけんはない。東京にさえ居り切れない身体からだだ。たとい田舎いなかでも落ちつく気はない。休むと後うしろから追っ掛けられる。昨日きのうまでのいさくさが頭の中を切つて廻った日にはどんな田舎だつてやり切れない。だからただ歩くのである。けれども別段に目的めあてもない歩き方だから、顔の先一間四方がぼうとして何だか焼き損そくなつた写真のように曇っている。

しかもこの曇ったものが、いつ晴れると云う的あてもなく、ただ漠然ばくぜんと際限もなく行手に広がっている。いやしくも自分が生きている間は五十年でも六十年でも、いくら歩いても走かけても依然として広がっているに違いない。ああ、つまらない。歩くのはいたたまれないから歩くので、このぼんやりした前途を抜出すために歩くのではない。抜け出そうとしたって抜け出せないのは知れ切っている。

東京を立った昨夜ゆうべの九時から、こう諦あきらめはつけてはいるが、さて歩き出して見ると、歩きながら気が気でない。足も重い、松が厭あきるほど行列している。しかし足よりも松よりも腹の中が一番苦

しい。何のために歩いているんだか分らなくって、しかも歩かなくっては一刻も生きていられないほどの苦痛は滅多にない。

のみならず歩けば歩くほどとうてい抜ける事のできない曇った世界の中へだんだん深く潜り込んで行くような気がする。振り返ると日の照っている東京はもう代が違っている。手を出しても足を伸ばしても、この世では届かない。まるで娑婆が違う。そのくせ暖かな朗かな東京は、依然として眼先にありありと写っている。おういと日蔭から呼びなくなるくらい明かに見える。と同時に足の向いてる先は漠々たるものだ。この漠々のうちへ——命のあらん限り広がっているこの漠々のうちへ——自分はふらふら迷

い込むのだから心細い。

この曇った世界が曇ったなりはびこって、定業じやうごうの尽きるまで行く手を塞ふさいでいてはたまらない。留まった片足を不安の念に駆かられて一步前へ出すと、一步不安の中へ踏み込んだ訳わけになる。不安に追い懸けられ、不安に引っ張られて、やむを得ず動いては、いくら歩いてもいくら歩いても埒らちが明くはずがない。生涯しょうがい片づかない不安の中を歩いて行くんだ。とても事に曇ったものが、いつそだんだん暗くなってくればいい。暗くなった所をまた暗い方へと踏み出して行ったら、遠からず世界が闇やみになって、自分の眼で自分の身体が見えなくなるだろう。そうなれば気楽なものだ。

意地の悪い事に自分の行く路は明るくもなつてくれず、と云つて暗くもなつてくれない。どこまでも半陰半晴の姿で、どこまでも片づかぬ不安が立て罩こめている。これでは生甲斐いきがいがない、さればと云つて死に切れない。何でも人のいない所へ行つて、たった一人で住んでいたい。それが出来なければいつその事……

不思議な事にいつその事と観念して見たが別にどきんともしなかつた。今まで東京にいた時分いつその事と無分別を起しかけた事もたびたびあるが、そのたびたびにどきんとしない事はなかつた。後あとからぞつとして、まあ善かつたと思わない事もなかつた。ところが今度は天からどきんともしない。どきんとでも

ぞつとでも勝手にするが善いと云うくらいに、不安の念が胸一杯に広がっていたんだろう。その上いつその事を断行するのが今が今ではないと云う安心がどこかにあるらしい。明日になるか明後日になるか、ことに由ったら一週間も掛るか、まかり間違えば無期限に延ばしても差支ないと高を括っていたせいかも知れない。華嚴の瀑にしても浅間の噴火口にしても道程はまだだいぶあるくらいは知らぬ間に感じていたんだろう。行き着いていよいよとならなければ誰がどきんとするものじゃない。したがっていつその事を断行して見ようと云う気にもなる。この一面に曇った世界が苦痛であって、この苦痛をどきんとしない程度において免れる望

があると思えば重い足も前に出し甲斐がある。まずこのくらいの決心であつたらしい。しかしこれはあとから考えた心理状態の解剖である。その当時はただ暗い所へ出ればいい。何でも暗い所へ行かなければならないと、ひたすら暗い所を目的に歩き出したばかりである。今考えると馬鹿馬鹿しいが、ある場合になると吾々は死を目的にして進むのを責^{せめ}ても慰^い藉^{しゃ}と心得るようになって来る。ただし目指す死は必ず遠方になければならないと云う事も事実だろうと思う。少くとも自分はそう考える。あまり近過ぎると慰藉になりかねるのは死と云う因果である。

ただ暗い所へ行きたい、行かなくっちゃならないと思ひなが

ら、雲を攫^{つか}むような料簡^{りょうけん}で歩いて来ると、後^{うしろ}からおいおい呼ぶものがある。どんなに魂^{たま}がうろついてる時でも呼ばれて見ると性根^{しょうね}があるのは不思議なものだ。自分は何の気もなく振り向いた。応ずるためと云う意識さえ持たなかったのは事実である。しかし振り向いて見て始めて気がついた。自分はさっきの茶店からまだ二十間とは離れていない。その茶店の前の往来へ、例の絆天^{はんてん}とどてらの合^{あい}の子^こが出て、脂^{やに}だらけの齒^はをあらわに曝^{さら}しながらしきりに自分を呼んでいる。

昨^{ゆうべ}夕^ゆ東京を立てってから、まだ人間に口^きを利いた事がない。人から言葉を掛けられようなどとは夢にも予期していなかった。言葉

を掛けられる資格などはまるで無いものと自信し切っていた。ところへ突然呼び懸^かけられたのだから——粗末な齒^は並びだが向き出しに笑顔を見せてしきりに手招きをしているのだから、ぼんやり振り返った時の心持が、自然と判然^{はつきり}すると共に、自分の足はいつの間にか、その男の方へ動き出した。

実を云うとこの男の顔も服装^{なり}も動作もあんまり気に入っちゃいない。ことにさつき白い眼でじろじろやられた時などは、何となく嫌悪^{けんお}の念が胸^{うち}の裡^{きざ}に萌し掛けたくらいである。それがものの二十間とも歩かないうちに以前の感情はどこかへ消えてしまつて、打って変つた一種の温味^{あたたかみ}を帯びた心持^{あとがえ}で後歸りをしたのはなぜだ

か分らない。自分は暗い所へ行かなければならないと思つて
た。だから茶店の方へ逆戻りをし始めると自分の目的とは反対の
見当^{けんとう}に取つて返す事になる。暗い所から一歩^{ひとあし}立ち退^のいた意味にな
る。ところがこの立退^{たちのか}が何となく嬉^{うれ}しかった。その後^{のち}いろいろ経
験をして見たが、こんな矛盾は到^{いた}る所に転^{ころ}がつている。けつして
自分ばかりじゃあるまいと思う。近頃ではてんで性格なんてもの
はないものだと考えている。よく小説家がこんな性格を書くの、
あんな性格をこしらえるのと云つて得意がつている。読者もあの
性格がこうだの、ああだのと分つたような事を云つてゐるが、あ
りや、みんな嘘^{うそ}をかいて楽しんだり、嘘を読んで嬉しがつてゐるん

だろう。本当の事を云うと性格なんて纏まとまったものはありません。本当の事が小説家などにかけるものじゃなし、書いたって、小説になる気づかいはあるまい。本当の人間は妙に纏めにくいものだ。神さまでも手古てこずるくらい纏まらない物体だ。しかし自分だけがどうあっても纏まらなく出来上ってるから、他人ひとも自分同様しま締りのない人間に違ないと早合点はやがてんをしているのかも知れない。それでは失礼に当る。

とにかく引き返して目倉縞めくらしまの傍そばまで行くと、どてらはさも馴なれ馴れしい声で

「若い衆しゅさん」

と云いながら、大きな顎あごを心持襟えりの中へ引きながら自分の額のあたりを見詰めている。自分は好加減いかげんなところで、茶色の足を二本立てたまま、

「何か用ですか」

と叮嚀ていねいに聞いた。これが平生へいぜいならこんなどてらから若い衆さんなんて云われて快よく返辞をする自分じゃない。返辞をするにしてみうんとか何だとかで済したろうと思う。ところがこの時に限って、人相のよくないどてらと自分とは全く同等の人間のような氣持がした。別に利害の關係からしてわざと腰を低く出たんじゃ、けっしてない。するとどてらの方でも自分を同程度の人間と見倣みな

したような語気で、

「御前さん、働く了簡りようけんはないかね」

と云った。自分は今が今まで暗い所へ行くよりほかに用のない身と覚悟していたんだから、藪やぶから棒ぼうに働く了簡はないかねと聞かれた時には、何と答えて善いいか、さっぱり訳わけが分らずに、空脛からすねを突っ張ったまま、馬鹿見たような口を開けて、ぼんやり相手を眺ながめていた。

「御前さん、働く了簡はないかね。どうせ働かなくっちゃならないんだろう」

とどてらがまた問い返した。問い返された時分にはこっちの腹

も、どうか、こうか、受け答の出来るくらいに眼前の事況じきようを会得えとくするようになった。

「働いても善いいですが」

これは自分の答である。しかしこの答がいやしくも口に出て来るほどに、自分の頭が間に合せの工面にせよ、やっと片づいたと云うものは、単純ながら一順の過程を通っておる。

自分はどこへ行くんだか分らないが、なにしろ人のいないところへ行く気でいた。のに振り向いてどてらの方へあるき出したのだから、歩き出しながら何となく自分に対して憫然びんぜんな感がある。

と云うものはいくらどてらでも人間である。人間のいない方へ行

くべきものが、人間の方へ引き戻されたんだから、ことほどさように人間の引力が強いと云う事を証拠立てると同時に、自分の所志にもう背かねばならぬほどに自分は薄弱なものであったと云う事をも証拠立てている。手短に云うと、自分は暗い所へ行く気でいるんだが、実のところはやむを得ず行くんで、何か引っかかりが出来れば、得たり賢しと普通の娑婆に留まる了簡なんだろうと思われる。幸いに、どてらが向うから引っかかってくれたんで、何の気なしに足が後向きに歩き出してしまったのだ。云わば自分の大目的に申し訳のない裏切りをちよっとして見た訳になる。だからどてらが働く気はないかねと出てくれずに、御前さん野にす

るかね、それとも山にするかねとでも切り出したら、しばらく安心して忘れかけた目的を、ぎよつと思ひ出させられて、急に暗い所や、人のいない所が怖こわくなつてぞつとしたに違ない。それほどの娑婆しやば氣が、戻り掛ける途端とたんにもう萌きざしていたのである。そうしてどてらに呼ばれば呼ばれるほど、どてらの方へ近寄れば近寄るほど、この娑婆氣は一步ごとに増長したものと見える。最後に空脛からすねを二本、棒のようにどてらの真向うに突っ立てた時は、この娑婆氣が最高潮に達した瞬間である。その瞬間に働く氣はないかねと来た。御粗末などてらだが非常に旨うまく自分の心理状態を利用した勧誘である。だし抜けの質問に一時はぼんやりしたようなも

の、ぼんやりから覚^さめて見れば、自分はいつか娑婆の人間になっっている。娑婆の人間である以上は食わなければならない。食うには働かなくっちゃ駄目だ。

「働いても、いいですが」

答は何の苦もなく自分の口から滑^{すべ}り出してしまった。するとどてらはそうだろうそのはずさと云うような顔つきをした。自分は不思議にもこの顔つきをもっともだと首肯^{しゅこん}した。

「働いても、いいですが、全体どんな事をするんですか」と自分はここで再び聞き直して見た。

「大変儲^{もう}かるんだが、やって見る気はあるかい。儲^{うけあい}かる事は受合

なんだ」

どてらは上機嫌の体^{てい}で、にこにこ笑いながら、自分の返事を待っている。どうせどてらの笑うんだから、愛嬌^{あいきょう}にもなんにもなっちゃいない。元来^{がんらい}笑うだけ損になるようにでき上がってる顔だ。ところがその笑い方が妙になつかしく思われて

「ええやって見ましょう」

と受けてしまった。

「やって見る？ そいつあ結構だ。君^{もう}儲かるよ」

「そんなに儲けなくっても、いいですが……」

「え？」

どてらはこの時妙な声を出した。

「全体どんな仕事なんですか」

「やるなら話すが、やるだろうね、お前さん。話した後で厭いやだな
んて云われちゃ困るが。きつとやるだろうね」

どてらはむやみに念を押す。自分はそこで、

「やる気です」

と答えた。しかしこの答は前のように自然天然には出なかった。

云わばいきみ出した答である。大抵の事ならやって退のけるが、万
一の場合には逃げを張る気と見えた。だからやりますと云わずに
やる気ですと云ったんだろう。——こう自分の事を人の事のように

に書くのは何となく変だが、元来人間は締りのないものだから、はつきりした事はいくら自分の身の上だって、こうだとは云い切れない。まして過去の事になると自分も人も区別はありやしない。すべてがだろ・うに变化してしまう。無責任だと云われるかも知れないが本当だから仕方がない。これからさきも危^{あや}しいところはいつでもこの式で行くつもりだ。

そこでどてらは略^{ほぼ}話^まが纏^{まと}ったものと呑^のみ込んで

「じゃ、まあ御^お這^{はい}入り。緩^{ゆっ}くり御茶でも呑^のんで話すから」

と云う。別に異存もないから、茶店に這^{はい}入ってどてらの隣りに腰をおろしたら、口のゆがんだ四十ばかりの神^{かみ}さんが妙な臭^{にお}いのす

る茶を汲んで出した。茶を飲んだら、急に思い出したように腹が減って来た。減って来たのか、減っていたのに気がついたのか分らない。墓口^{がまぐち}には三十二銭這入っている、何か食おうかしらと考えていると

「君、煙草^{たばこ}を呑むかい」

と、どてらが「朝日」の袋を横から差し出した。なかなか御世辞がいい。袋の角^{かど}が裂けてるのは仕方がないが、何だか薄穢^{うすぎた}なく垢^{あか}づいた上に、びしゃりと押し潰^{つぶ}されて、中にある煙草がかたまつて、一本になつてるように思われる。袖^{そで}のないどてらだから、入れ所に窮^{はら}して腹掛^{はらがけ}の隠しへでも搦^ねじ込んで置くものと見える。

「ありがとうございます、たくさんです」

と断ると、どてらは別に失望の体もなく、自分でかたまったうちの一本を、爪垢のたまった指先で引っ張り出した。はたせるかな煙草は皺だらけになって、太刀のように反っている。それでも破けた所もないと見えて、すばすば吸うと鼻から煙が出る。際どいところで煙草の用を足しているから不思議だ。

「御前さん、幾年になんなさる」

どてらは自分の事を御前さんと云ったり君と云ったりするようだが、何で区別するんだか要領を得ない。今までのところで察して見ると、儲かるときには君になって、不断の時には御前さんに

復するようにも見える。何でも儲かる事がだいぶん気になってい
るらしい。

「十九です」

と答えた。実際その時は十九に違なかったのである。

「まだ若いんだね」

と口のゆがんだ神さんが、後向うしろむきになって盆を拭ふきながら云った。

後向きだから、どんな顔つきをしているか見えない。独ひとり言ことだか
どてらに話しかけてるんだか、それとも自分を相手にする気なん
だか分らなかった。するとどてらは、さも調子づいた様子で、

「そうさ、十九じゃ若いもんだ。働き盛りだ」

と、どうしても働かなくっちゃならないような語気である。自分はだまって床几しょうぎを離れた。

正面に駄菓子だがしを載のせる台があつて、縁ふちの毀とれた菓子箱の傍そばに、大きな皿がある。上に青い布巾ふきんがかかっている下から、丸い揚饅あげまんじ頭ゆうが食はみ出している。自分はこの饅頭が喰くいたくなつたから、腰を浮かして菓子台の前まで来たのだが、傍そばへ来て、つらつら饅頭まんじゅうの皿を覗のぞき込んで見ると、恐ろしい蠅だ。しかもそれが皿の前で自分が留いまるや否いなや足音にパツと四方に散つたんで、おやと思ひながら、気を落ちつけて少しく揚饅頭を物色していると、散らばつた蠅は、もう大風が通り越したから大丈夫だよと申し合せた

ように、再びぱつと饅頭の上へ飛び着いて来た。黄色い油切った皮の上に、黒いぽちぽちが出鱈目にできる。手を出そうかなと思う矢先へもって来て、急に黒い斑点が、晴夜の星宿のごとく、縦横に行列するんだから、少し辟易してしまつて、ぼんやり皿を見下ろしていた。

「御饅頭を上がんなさるかね。まだ新しい。一昨日揚げたばかりだから」

かみさんは、いつの間にか盆を拭いてしまつて、菓子台の向側に立っている。自分は不意と眼を上げて神さんを見た。すると神さんは何と思ったか、いきなり、節太の手を皿の上に翳して、

「まあ、大変な蠅だ事」

と云いながら、翳した手をたて豎に切つて、二三度左右へ振つた。

「上がるんなら取つて上げよう」

神さんはたちまち棚の上から木皿を一枚おろして、長い竹の箸はしで、饅頭をぽんぽんと七つほど挟み込んで、

「こつちがいいでしょう」

と木皿を、自分の腰を掛けていた床几しょうぎの上へ持つて行つた。自分は仕方がないからまたもとの席へ歸つて、木皿の隣へ腰を掛けた。見ると、もう蠅が飛んで来ている。自分は蠅と饅頭と木皿を眺めながら、どてらに向つて

「一つどうです」

と云って見た。これはあながち「朝日」の御礼のためばかりではない。幾分かはどてらが一昨日揚げた蠅だらけの饅頭を食うだらうか食わないだらうか試して見る腹もあつたらしい。するとどてらは

「や、すまない」

と云いながら、何の苦もなく一番上の奴を取って頬張つちまつた。唇の厚い口をもごつかせているところを観察すると、満更でもなさそうに見えた。そこで自分も思い切つて、こちら側の下から、比較的奇麗なものを摘み出して、あんぐりやった。油の味が舌

の上へ流れ出したと思う間もなく、その中から苦^{にが}い餡^{あん}が卒然として味覚を冒^{おか}して来た。しかしこの際だから別にしまったとも思わなかった。難なく餡も皮も油もぐいと胃の腑^ふへ呑^のみ下^{くだ}してしまつたら、自然と手がまた木皿の方へ出たから不思議なものだ。どてらはこの時もう第二の饅頭を平らげて、第三に移っている。自分に比較すると大変速力が早い。そうして食ってる間は口を利^きかない。働く事も儲^{もつ}かる事もまるで忘れていらしい。したがって七つの饅頭は呼吸^{いき}を二三度するうちに無くなってしまった。しかも自分はたった二つしか食わない。残る五つは瞬^{またた}く間^まにどてらのためにしてやられたのである。

いかに逡巡^{しりごみ}をするほどの汚^{きた}ならしいものでも、一度皮切りをやると、あとはそれほど神経に障^{さわ}らずに食えるものだ。これはあとで山へ行つてしみじみ経験した事で、今では何でもない陳腐^{ちんぷ}の真理になつてしまつたが、その時は饅頭^{まんじゅう}を食いながら少々呆^{あき}れたくらい後^{あと}が食いたくなつた。それに腹は減っている。その上相手がどてらである。このどてらが事もなげに、砂のついた饅頭をばくつくところを見ると、多少は競争の気味にもなつて、神経などには有つても役に立たない、起すだけが損だと云う心持になる。そこで自分はとうとう神さんにたのんで饅頭^{まんじゅう}の御代^{おかわ}りを貰^{もら}つた。

今度は「一つ、どうです」とも何とも云わずに、木皿^{しやうぎ}が床几^{しやうぎ}の

上に乗るや否や、自分の方でまず一つ頬張ほおばった。するとどてらも、「や、すまない」とも何とも云わずに、だまって一つ頬張った。次に自分がまた一つ頬張る。次にどてらがまた一つ頬張る。互違たがいちがいに頬張りっ子をして六つ目まで来た時、たった一つ残った。これが幸い自分の番に当たっているので、どてらが手を出さないうちに、自分が頬張ってしまった。それからまた御代りを貰った。

「君だ**いぶ**やるね」

とどてらが云った。自分は**だいぶ**やる気も何もなかったが、云われて見ると**だいぶ**やるに違ない。しかしこれは初手しよてにどてらの方で自分の食いたくないものを、むしゃむしゃ食って見せて、自分

の食慾を誘致した結果が与^{あずか}つて力あるようだ。ところがどてらの方では全然こっちの責任でだいぶやってるような口^{こう}氣であつた。だから自分は何だかどてらに対して弁解して見たい氣がしたが、弁解する言葉がちよつと出て来なかつた。ただ雲を攫^{つか}むようにどてらにも責任があるんだろうと思うだけで、どこが責任なんだか分らなかつたから黙っていた。すると

「君、揚饅頭がよつぽど好きと見えるね」

と今度は云つた。饅頭にも寄り切りで、一^{おととい}昨日揚げた砂だらけの蠅だらけの饅頭が好きな訳はない。と云つて現に三皿まで代えて食うものを嫌^{きら}だとは無論云われない。だから今度も黙っていた。

そこへ茶店の神さんが突然口を出した。――

「うちの御饅おまんは名代の御饅だから、みんなが旨うまがつて食べるだよ」

神さんの言葉を聞いた時自分は何だか馬鹿にされてるような気がした。そこでますます黙ってしまった。黙って聞いていると、

「旨い事この上なしだ」

とどてらが云ってる。本当なんだか御世辞なんだかちよつと見当けんとうがつかなかった。とにかく饅頭はどうでも構わないから、肝心かんじんの労働問題を聞糾ききただして見ようと思って、

「先刻さつきの御話ですがね。実は僕もいろいろの事情があつて、働い

て飯を食わなくっちゃならない身分なんですが、いったいどんな事をやるんですか」

とこっちから口を切って見た。どてらは正面の菓子台を眺めていたが、この時急に顔だけ自分の方へ向けて

「君、儲かるんだぜ。嘘じゃない、本当に儲かる話なんだから是非やりたまえ」

と、またぞろ自分を君呼わりにして、しきりに儲けさせたがっている。こっちへ向き直って、自分を誘い出そうと力める顔つきを見ると、頬骨の下が自然と落ち込んで、落ち込んだ肉が再び顎の枠で角張っている。そこへ表から射し込む日の加減で、小鼻の下

から弓形^{ゆみなり}にでき上った皺^{しわ}が深く映っている。この様子を見た自分は何となく儲^{もう}けるのが恐ろしくなった。

「僕はそんなに儲けなくっても、いいです。しかし働く事は働くです。神聖な労働なら何でもやるです」

どてらの頬^{あた}の辺^りには、はてなと云う景色^{けしき}がちよつと見えたが、やがて、かの弓形^{ゆみなり}の皺^{しわ}を左右に開いて、脂^{やに}だらけの齒^はを遠慮なく剥^むき出して、そうして一種特別な笑い方をした。あとから考えるどてらには神聖な労働と云う意味が通じなかったらしい。いやしくも人間たるものが金儲^{かねもうけ}の意味さえ知らないで、こむずかしい口巧^{くちこうしや}者な事を云うから、気の毒だと云うのでどてらは笑ったので

ある。自分は今は今まで死ぬ気でいた。死なないまでも人間のいない所へ行く気でいた。それができ損^{そこな}ったから、生きるために働く気になったまでである。儲^{もう}かるとか儲からないとか云う問題は、てんで頭の中にはない。今ないばかりじゃない、東京にいて親の厄^{やっかい}介^{かい}になってる時分からなかった。どころじゃない儲^{もう}主^{けし}義^{ゆぎ}は大いに輕^{けい}蔑^{べつ}していた。日本中どこへ行ってもそのくらいな考えは誰にもあるだろうくらいに信じていた。だからどて^どら^らがさつきから儲かる儲かると云うのを聞きたんびに何のためだろうと不思議に思っていた。無論癩^{しやく}には障^{さわ}らない。癩^{しやく}に障るような身分でもなし、境遇でもないから、いっこう平気ではいたが、これが人間に

対する至大の甘言で、勧誘の方法として、もっとも利目ききめのあるものだとは夢にも想いおも至らなかつた。そこで、どてらから笑われちまつた。笑われてさえいっこう通じなかつた。今考えると馬鹿馬鹿しい。

一種特別な笑い方をしたどてらは、その笑いの収まりかけに、

「お前さん、全体今まで働いた事があんなさるのかね」

と少し真面目な調子で聞いた。働くにも働かないにも、昨日きのう自宅を逃げ出したばかりである。自分の経験で働いた試しは撃剣げっけんの稽けい古こと野球の練習ぐらいなもので、稼かせいで食った事はまだ一日もない。

「働いた事はないです。しかしこれから働かなくっちゃあならない身分です」

「そうだろう。働いた事がなくっちゃ……じゃ、君、まだ儲けた事もないんだね」

と当り前の事を聞いた。自分は返事をする必要がないから、黙つてると、茶店のかみさんが、菓子台の後から、

「働くからにや、儲けなくっちゃあね」

と云いながら、立ち上がった。どてらが、

「全くだ。儲けようったって、今時そう儲け口が転がってるもんじゃない」

と幾分か自分に対して恩に被^きせるように答えるのを、

「そうさ」

と幾分かさげすむように聞き流して、裏へ出て行った。このそうさが妙に気になって、ことによると、まだその後^{あと}があるかも知れないと思ったせい^{うしろかげ}か、何気なく後姿を見送っていると、大きな黒松の根方^{ねがた}のところへ行^いって、立小便^{たちしょうべん}をし始めたから、急に顔を背^{そむ}けて、どてらの方を向いた。どてらはすぐ、

「私^{わたし}だから、お前さん、見^みず知らずの他人にこんな旨^{うま}い話をするんだ。これがほかのものだったら、受合^{うあ}ってただじゃ話^わしつこない旨^{うま}い口なんだからね」

とまた恩に被^きせる。自分は、面倒くさいからおとなしく、

「ありがたいです」

と四角張って答えて置いた。

「実はこう云う口なんだがね」

と、どてらが、すぐに云う。自分は黙って聞いていた。

「実はこう云う口なんだがね。銅山^{やま}へ行って仕事をするんだが、

私が周旋さえすれば、すぐ坑夫になれる。すぐ坑夫になれりや大したもんじゃないか」

自分は何か返事を促^{うなが}されるような気がしたけれども、どうもどてらの調子に載^のせられて、そうですとは答える訳に行かなかつ

た。坑夫と云えば鉋山の穴の中で働く労働者に違ない。世の中に労働者の種類はだいぶんあるだろうが、そのうちでもっとも苦しくって、もっとも下等なものが坑夫だとばかり考えていた矢先へ、すぐ坑夫になれりや大したものだと云われたのだから、調子を合すどころの騒ぎじゃない、おやと思うくらい内心では少からず驚いた。坑夫の下にはまだまだ坑夫より下等な種属があると云うのは、大晦日おおみそかのあとにまだたくさん日が余ってると云うのと同じ事で、自分にはほとんど想像がつかなかった。実を云うとどてらがこんな事を饒舌しゃべるのは、自分を若年じゃくねんと侮あなどって、好い加減に人を瞞だますのではないかと考えた。ところが相手は存外真面目である。

「何しろ、取附とつつけからすぐに坑夫なんだからね。坑夫なら楽なもんさ。たちまちのうちに金がうんと溜たまっちゃまって、好きな事が出来らあね。なに銀行もあるんだから、預けようと思やあ、いつでも預けられるしさ。ねえ、御かみさん、初めっから坑夫になれりや、結構なもんだね」

とかみさんの方へ話の向むきを持って行くとかみさんは、さつき裏で、立ちながら用を足したままの顔をして、

「そうとも、今からすぐ坑夫になつて置きやあ四五年立つうちにや、唸うなるほど溜るばかりだ。——何しろ十九だ。——働き盛りだ。——今のうち儲けなくっちゃ損だ」

と一句、一句間あいだを置いて独り言ひとりごとのように述べている。

要するにこのかみさんも是非坑夫になれと云わぬばかりの口占くちうらで、全然どてらと同意見を持つているように思われた。無論それでよろしい。またそれでもいっこう構わない。妙な事にこの時ほどおとなしい気分になれた事は自分が生れて以来始めてであった。相手がどんな間違を主張しても自分はただはいはいと云って聞いていたろうと思う。実を云うと過去一年間において仕出でかした不都合やら義理やら人情やら煩悶はんもんやらが破裂して大衝突を引き起した結果、あてどもなくここまで落ちて来たのだから、昨日きのうまでの自分の事を考えると、どうしたって、こんなに温和おとなし

くなれる訳がないのだが、実際この時は人に逆うさからような気分は薬にいたくつても出て来なかった。そうしてまたそれを矛盾とも不思議とも考えなかった。おそらく考える余裕がなかったんだろ
う。人間のうちで纏まとったものは身体からだだけである。身体が纏まとってる
もんだから、心も同様に片づいたものだと思って、昨日と今日きょうと
まるで反対の事をしながらも、やはりもとの通りの自分だと平気で済ましているものがだいぶある。のみならずいったん責任問題が持ち上がって、自分の反覆はんぷくを詰なじられた時ですら、いや私の心は記憶があるばかりで、実はばらばらなんですからと答えるものがないのはなぜだろう。こう云う矛盾をしばしば経験した自分です

ら、無理と思いながらも、いささか責任を感じようだ。して見ると人間はなかなか重宝ちゆうほうに社会の犠牲になるように出来上ったものだ。

同時に自分のばらばらな魂がふらふら不規則に活動する現状を目撃して、自分を他人扱いに観察した鼻屑ひいきめなしの真相から割り出して考えると、人間ほどのあてにならないものはない。約束とか契ちかいとか云うものは自分の魂を自覚した人にはとても出来ない話だ。またその約束を楯たてにとって相手をぎゅぎゅ押しつけるなんて蛮行は野暮やぼの至りである。大抵の約束を実行する場合を、よく注意して調べて見ると、どこかに無理があるにもかかわらず、その無理

を強^{しい}て圧^おしかくして、知らぬ顔でやって退^のけるまでである。決して魂の自由行動じゃない。はやくから、ここに気がついたなら、むやみに人を恨^{うら}んだり、悶^{もだ}えたり、苦しまぎれに自宅^{うち}を飛び出したりしなくっても済んだかも知れない。たとい飛び出してもこの茶店まで来て、どてらと神さんに対する自分の態度が、昨日までの自分とは打って変ったところを、他人扱いに落ち着き払って比較するだけの余裕があったら、少しは悟れたろう。

惜しい事に当時の自分には自分に対する研究心と云うものがまるでなかった。ただ口惜^{くや}しくって、苦しくって、悲しくって、腹立たしくって、そうして気の毒で、済^すまなくって、世の中が厭^{いや}に

なつて、人間が棄^すて切れないで、いても立っても、いたたまれないで、むちゃくちゃに歩いて、どてらに引つ掛つて、揚げ饅頭^{あげまんじゅう}を喰ったばかりである。昨日は昨日、今日は今日、一時間前は一時間前、三十分後は三十分後、ただ眼前の心よりほかに心と云うものがまるでなくなつちまつて、平生から繫^つ続^なぎの取れない魂がいとどふわつき出して、實際あるんだか、ないんだかすこぶる明瞭^{めいりょう}でない上に、過去一年間の大きな記憶が、悲劇の夢のように、朦朧^{もうろう}と一団の妖氛^{ようふん}となつて、虚空^{こくう}遙^{はるか}に際限もなく立て罩^こめてるような心持ちであつた。

そこで平生の自分なら、なぜ坑夫になれば結構なんだとか、ど

うして坑夫より下等なものがあつたとか、自分は儲ける事ばかりを目的に働く人間じゃないとか、儲けさえすりゃどこがいいんだとか、何とかかとか理窟を捏ねて、出来るだけ自己を主張しなければ勘弁しないところを、ただおとなしく控えていた。口だけおとなしいのではない、腹の中からまるで抵抗する気が出なかつたのである。

何でもこの時の自分は、単に働けばいいと云う事だけを考えていたらしい。いやしくも働きさえすれば、——いやしくもこのふわふわの魂が五体のうちに、うろつきながらもいられさえすれば、——要するに死に切れないものを、強て殺してしまうほどの

無理を冒おかさない以上は、坑夫以上だろうが、坑夫以下だろうが、儲たかかろうが、儲たかかるまいが、とんと問題にならなかったものと見える。ただ働く口さえ出来ればそれで結構であるから、働き方の等級や、性質や、結果について、いかに自分の意見と相あ容いれぬ法ほ螺らを吹かれても、またその法螺が、単に自分を誘致するためにする打算的の法螺であつても、またその法螺に乗る以上は理知の間として自分の人格に尠すくなからぬ汚点を貽のこす恐れがあつても、まるで気にならなかつたんだろう。こんな時には複雑な人間が非情に単純になるもんだ。

その上坑夫と聞いた時、何となく嬉うれしい心持がした。自分は第

一に死ぬかも知れないと云う決心で自宅を飛出したのである。それが第二には死ななくっても好いから人のいない所へ行きたいと移って来た。それがまたいつの間にか移って、第三にはともかくも働こうと変化しちまった。ところで、さて働くとなると、並の働き方よりも第二に近い方がいい、一歩進めて云えば第一に縁故のある方が望ましい。第一、第二、第三と知らぬ間に心変りがしたようなものの、変りつつ進んで来た、心の状態は、うやむやの間に縁を引いて、擦れ落ちながらも、振り返って、もとの所を慕いつつ押されて行くのである。単に働くと云う決心が、第二を振り切るほど突飛でもなかったし、第一と交渉を絶つほど遠くにも

いなかったと見える。働きながら、人のいない所にいて、もつとも死に近い状態で作業が出来れば、最後の決心は意のごとくに運びながら、幾分か当初の目的にも叶^{かな}う訳になる。坑夫と云えば名前の示すごとく、坑^{あな}の中で、日の目を見ない家業^{かぎよう}である。娑婆^{しゃば}にいなながら、娑婆から下へ潜^{もぐ}り込んで、暗い所で、鉤^{あらがね}塊^{つちくれ}土塊を相手に、浮世の声を聞かないで済む。定めて陰気だろう。そこが今の自分には何よりだ。世の中に人間はごてごているが、自分ほど坑夫に適したものはけっしてないに違ない。坑夫は自分に取って天職である。——とここまで明瞭^{めいりょう}には無論考えなかったが、ただ坑夫と聞いた時、何となく陰気な心持ちがして、その陰気がまた何

となく嬉しかった。今思い出して見ると、やっぱりどうあっても他人ひとの事としか受け取れない。

そこで自分はどてらに向ってこう云った。

「僕は一生懸命に働くつもりですが、坑夫にしてくれるでしょう
か」

するとどてらはなかなか鷹揚おうような態度で、

「すぐ坑夫になるのはなかなかむずかしいんだが、私わたしが周旋さえ
すりゃきつとできる」

と云うから自分もそんなものかなと考えて、しばらく黙っている
と、茶店のかみさんがまた口を出した。

「長蔵^{ちやうぞう}さんが口^{くち}を利^ききさえすりや、坑夫^{こうふ}は受合^{うけあい}だ」

自分はこの時始めてどてらの名前が長蔵だと云う事を知った。それからいっしょに汽車に乗ったり、下りたりする時に、自分もこの男を捕^つえて二三度長蔵さんと呼んだ事がある。しかし長蔵とはどう書くのか今もって知らない。ここに書いたのはもちろん当^{あて}字^じである。始めて家庭を飛出した鼻をいきなり引っ張って、思いも寄らない見当^{けんとう}に向けた、云わば自分の生活状態に一転化を与えた人の名前を口で覚えていながら、筆に書けないのは異^いな事だ。さてこの長蔵さんと、茶店のかみさんがきつと坑夫になれると受合^{うけあい}うから、自分もなれるんだろうと思つて、

「じゃ、どうか何分願います」

と頼んだ。しかしこの茶店に腰を掛けているものが、どうして、どこへ行つて、どんな手続で坑夫になるんだかその辺はさっぱり分らなかった。

何しろ先方でこのくらい勧めるものだから、何分願いますと云つたら、長蔵さんがどうかするに違ないと思つて、あとは聞かずに黙っていた。すると長蔵さんは、勢いよくどてらの尻を床几しょうぎから立てて、

「それじゃこれから、すぐに出掛けよう。御前さん、支度したくはいいかい。忘れものがないようによく気をつけて」

と云った。自分はうちを出る時、着のみ着のままで出たのだから、身体からだよりほかに忘れ物のあるはずがない。そこで、

「何にも無いです」

と立ち上がったが、神さんと顔を見合せて気がついた。肝心かんじんの揚あげ饅頭まんじゅうの代を忘れている。長蔵さんは平気な面つらをして、もう半分ほど葭簀よしずの外に出て往来を眺ながめていた。自分は懷中から三十二銭入りの墓口がまぐちを出して饅頭三皿の代を払って、ついだから茶代として五銭やった。饅頭の代はとうとう忘れちまって思い出せない。ただその時かみさんが、

「坑夫になって、うんと溜めて歸りにまた御寄おより」

と云ったのを記憶している。その後坑夫はやめたが、ついにこの茶店へは寄る機会がなかった。それから長蔵さんに尾いて、例の飽き飽きした松原へ出て、一本筋を足の甲まで埃ほじりを上げて、やって来ると、さっきの長たらしいのに引き易かえて今度は存外早く片づいちまった。いつの間まにやら松がなくなったら、板橋街道のような希知けちな宿しゆくの入口に出て来た。やっぱり板橋街道のように我多がたば馬車しやが通る。一足先へ出た長蔵さんが、振り返って、

「御前さん馬車へ乗るかい」

と聞くから、

「乗っても好いです」

と答えた。そうしたら今度は

「乗らなくってもいいかい」

と反対の事を尋ねた。自分は

「乗らなくってもいいです」

と答えた。長蔵さんは三度目に

「どうするね」

と云ったから、

「どうでもいいです」

と答えた。その内に馬車は遠くへ行ってしまった。

「じゃ、歩く事にしよう」

と長蔵さんは歩き出した。自分も歩き出した。向うを見ると、今通った馬車の埃が日光にまぶれて、往来が濁ったように黄色く見える。そのうちに人通りがだんだん多くなる。町並がしだいに立派になる。しまいには牛込の神楽坂かぐらざかくらいな繁昌はんじょうする所へ出た。ここいらの店付みせつきや人の様子や、衣服は全く東京と同じ事であった。長蔵さんのようなのはほとんど見当らない。自分は長蔵さんに、

「ここは何と云う所です」

と聞いたら、長蔵さんは、

「ここ？　ここを知らないのかい」

と驚いた様子であつたが、笑いもせずすぐ教えてくれた。それで所の名は分つたがここにはわざと云わない。自分がこの繁華な町の名を知らなかったのをよほど不思議に感じたと見えて、長蔵さんは、

「お前さん、いったい生れはどこだい」

と聞き出した。考えると、今まで長蔵さんが自分の過去や経歴について、ついぞ一と口も自分に聞いた事がなかったのは、人を周旋する男の所為しよゐとしては、少しく無頓着むとんじゃく過ぎるようにも思われたが、この男は全くそんな事に冷淡な性たちであつた事が後あとで分つた。

この時の質問は全く自分の無知に驚いた結果から出た好奇心に過

ぎなかつた。その証拠には自分が、

「東京です」

と答えたら、

「そうかい」

と云つたなり、あとは何にも聞かずに、自分を引つ張るようになつて、ある横町を曲つた。

実を云うと自分は相当の地位を有つたものの子である。込み入つた事情があつて、耐え切れずに生家を飛び出したようなものの、あながち親に対する不平や面当ばかりの無分別じゃない。何となく世間が厭になつた結果として、わが生家まで面白くなく

なつたと思つたら、もう親の顔も親類の顔も我慢にも見ていられなくなつていた。これは大変だと気がついて、根氣に心を取り直そうとしたが、遅かつた。踏み答えて見ようと百方に焦慮^{あせ}れば焦慮^{あせ}るほど厭になる。揚句^{あげく}の果は踏張^{ふんばり}の栓^{せん}が一度にどつと抜けて、堪忍^{かんにん}の陣立^{そうくず}が総崩れとなつた。その晩にとうとう生家を飛び出してしまつたのである。

事の起りを調べて見ると、中心には一人の少女がいる。そうしてその少女の傍^{そば}にまた一人の少女がいる。この二人の少女の周囲^{まわり}に親がある。親類がある。世間が万遍なく取り捲^まいている。ところが第一の少女が自分に対して丸くなつたり、四角になつたりす

る。すると何かの因縁^{いんねん}で自分も丸くなったり四角になったりしなくっちゃならなくなる。しかし自分はそう丸くなったり四角になったりしては、第二の少女に対して済まない約束をもつて生れて来た人間である。自分は年の若い割には自分の立場をよく弁別^{わきま}えていた。が済まないと思えば思うほど丸くなったり四角になったりする。しまいには形態ばかりじゃない組織まで変るようになって来た。それを第二の少女が恨め^{うら}しそうに見ている。親も親類も見ている。世間も見ている。自分は自分の心が伸びたり縮んだり、曲ったりくねったりするところを、どうかして隠そうと力^{つと}めたが、何しろ第一の少女の方で少しもやめてくれないで、むや

みに伸びて見せたり、縮んで見せたりするもんだから、隠し終せ^{おお}る段じゃない。親にも親類にも目^めつかってしまった。怪^けしからんと云う事になった。怪しかるとは自分でも思っていなかったが、だんだん聞き糾^{ただ}して見ると、怪しからん意味がだいぶ違ってる。そこでいろいろ弁解して見たがなかなか聞いてくれない。親の癖に自分の云う事をちつとも信用しないのが第一不都合だと思うと同時に、第一の少女の傍^{そば}にいたら、この先どうなるか分らない、ことに因^よると実際弁解の出来ないような怪しからん事^{しゅつたい}が出来するかも知れないと考え出した。がどうしても離れる事が出来ない。しかも第二の少女に対しては気の毒である、済まん事になったと

云う念が日々烈にちにちはげしくなる。——こんな具合で三方四方から、両立しない感情が攻め寄せて来て、五色の糸のこんがらかったように、こつちを引くと、あつちの筋が詰る、あつちをゆるめるとこつちが釣れると云う按排あんばいで、乱れた頭はどうあつても解ほどけない。いろいろに工夫を積んで自分に愛想あいその尽きるほどひねくつて見たが、とうてい思うように纏まとまらないと云う一点張いってんばりに落ちて来た時に——やっと気がついた。つまり自分が苦しんでるんだから、自分で苦みを留めるよりほかに道はない訳だ。今までは自分で苦しみながら、自分以外の人を動かして、どうにか自分に都合のいいような解決があるだろうと、ひたすらに外のみを当あてにして

いた。つまり往来で人と行き合った時、こっちは突ツ立ったまま、向うが泥濘^{ぬかるみ}へ避^よけてくれる工面^{くめん}ばかりしていたのだ。こっちが動かない今のままのこっちで、それで相手の方だけを思う通りに動かそうと云う出来ない相談を持ち懸^かけていたのだ。自分が鏡の前に立ちながら、鏡に写る自分の影を気にしたって、どうなるもんじゃない。世間の掟^{おきて}という鏡が容易に動かせないとすると、自分の方で鏡の前を立ち去るのが何よりの上分別である。

そこで自分はこの入り組んだ関係の中から、自分だけをふいと煙^{けむ}にしておおうと決心した。しかし本当に煙にするには自殺するよりほかに致し方がない。そこでたびたび自殺をしかけて見

た。ところが仕掛けるたんびにどきんとしてやめてしまった。自殺はいくら稽古けいこをしても上手にならないものだと言ふ事をようやく悟った。自殺が急に出来なければ自滅するのが好かろうとなつた。しかし自分は前に云う通り相当の身分のある親を持つて朝夕に事を欠かぬ身分であるから生家うちにいては自滅しようがない。どうしても逃亡かけおちが必要である。

逃亡かけおちをしてもこの関係を忘れる事は出来まいとも考えた。また忘れる事が出来るだろうとも考えた。要するに、して見なければ分らないと考えた。たとい煩悶はんもんが逃亡につき纏まとつて来るにしてもそれは自分の事である。あとに残つた人は自分の逃亡のために助

かるに違いないと考えた。のみならず逃亡をしたって、いつまでも逃亡かけおちている訳じゃない。急に自滅がしにくいから、まずその一着として逃亡ちて見るのである。だから逃亡ちて見てもやっぱり過去に追われて苦しいようなら、その時徐おもむろに自滅の計はかりごとを廻めぐらしても遅くはない。それでも駄目ときまればその時こそきつと自殺して見せる。——こう書くと自分はいかにも下らない人間になつてしまふが、事実を露骨に云うとこれだけの事に過ぎないんだから仕方がない。またこう書けばこそ下らなくなるが、その当時のぼんやりした意気込いきごみを、ぼんやりした意気込のままに叙したなら、これでも小説の主人公になる資格は十分あるんだろうと考え

る。

それだけでなく、でも実際その当時の、二人の少女の有様やら、日ごとに変わる局面の転換やら、自分の心配やら、煩悶やら、親の意見や親類の忠告やら、何やらかやらを、そっくりそのまま書き立てたら、だいぶ面白い続きものができるんだが、そんな筆もなし時もないから、まあやめにして、せつかくの坑夫事件だけを話す事にする。

とにかくこう云う訳で自分はいよいよとなつて出奔したんだから、固より生きながら葬られる覚悟でもあり、また自ら葬ってしまつた簡でもあったが、さすがに親の名前や過去の歴史はいくら

棄鉢すてばちになっても長蔵さんには話したくなかった。長蔵さんばかりじゃない、すべての人間に話したくなかった。すべての人間は愚か、自分にさえできる事なら語りたくないほど情なさけない心持でひよろひよろしていた。だから長蔵さんが人を周旋する男にも似合わず、自分の身元について一言いちごんも聞き糺たださなかったのは、変と思うながらも、内々嬉しかった。本当を云うと、当時の自分はまだ嘘うそをつく事をよく練習していなかったし、ごまかすと言う事は大変な悪事のように考えていたんだから、聞かれたら定めし困ったろうと思う。

そこで長蔵さんに尾ついて、横町を曲って行くと、一二丁行った

か行かないうちに町並が急に疎まばらになって、所々は田圃たんぼの片割れが細く透いて見える。表はあんなに繁昌しても、繁昌は横幅だけであるなと気がついたら、また急に横町を曲らせられて、また賑にぎやかな所へ出された。その突当りが停車場ステーションであつた。汽車に乗らなくっては坑夫になる手続きが済まないんだと云う事をこの時ようやく知った。実は鉾山の出張所でもこの町にあつて、まずそこへ連れて行かれて、そこからまた役人が山へでも護送してくれるんだらうと思つていた。

そこで停車場へ這入はいる五六間手間になつてから、

「長蔵さん、汽車に乗るんですか」

と後から、呼び掛けながら聞いて見た。自分がこの男を長蔵さんと云ったのはこの時が始めてである。長蔵さんはちよつと振り返ったが、あかの他人から名前を呼ばれたのを不審がる様子もなく、すぐ、

「ああ、乗るんだよ」

と答えたなり、停車場に這入った。

自分は停車場ステーションの入口に立って考え出した。あの男はいつたい自分といっしょに汽車へ乗って先方さきまで行く気なんだろうか、それにしては余り親切過ぎる。なんぼなんでも見ず知らずの自分にこう丁寧ていねいな世話を焼くのはおかしい。ことによると彼奴あいつは詐欺師かたきりか

も知れない。自分は下らん事に今更のごとくはつと気がついて急に汽車へ乗るのが厭いやになって来た。いっその事また停車場を飛び出そうかしらと思つて、今までプラットフォームの方を向いていた足を、入口の見当けんとうに向け易えた。しかしまだ歩き出すほどの決心もつかなかったと見えて、茫然ぼうぜんとして、停車場前の茶屋の赤い暖簾のれんを眺ながめていると、いきなり大きな声を出して遠くから呼びとめられた。自分はこの声を聞くと共に、その所有者は長蔵さんであつて、松原以来の声であると言ふ事を悟つた。振り返ると、長蔵さんは遠方から顔だけ斜はすに出して、しきりにこちらを見て、首を豎たてに振っている。何でも身体からだは便所の塀へいにかくれているらし

い。せっかく呼ぶものだからと思って、自分は長蔵さんの顔を目的^{めあ}に歩いて行くと、

「御前さん、汽車へ乗る前にちよつと用を足したら善かろう」

と云う。自分はそれには及ばんから、一応辞退して見たが、なかなか承知しそうもないから、そこで長蔵さんと相並んで、きたない話だが、小便を垂れた。その時自分の考えはまた変った。自分は身体よりほかに何にも持っていない。取られようにも瞞^{かた}られようにも、名誉も財産もないんだから初手^{しよて}から見込の立たない代物^{しろもの}である。昨日^{きのう}の自分と今日の自分とを混同して、長蔵さんを恐ろしがつたのは、免職になりながら俸給の差し押^{おさえ}を苦にするような

ものであった。長蔵さんは教育のある男ではあるまいが、自分の風体ふうていを見て一目いちもく騙かたるべからずと看破するには教育も何も要いったものではない。だからことによると、自分を坑夫に周旋して、あとから周旋料でも取るんだろうと思い出した。それならそれで構わない。給料のうちを幾分かやれば済む事だなどと考えながら用を足した。——実は自分がこれだけの結論に到着するためには、わずかの時間内だがこれほどの手数てすうと推論とを要したのである。このくらい骨を折ってすら、まだ長蔵さんのポン引きなる事をいわゆるポン引きなる純粹の意味において会得えとくする事が出来なかったのは、年が十九だったからである。

年の若いのは実に損なもので、こんなにポン引きの近所までどうか、どうか、漕ぎつけながら、それでも、もしや好意ずくの世話ずきから起った親切じゃあるまいかと思つて、飛んだ気兼ねをしたのはおかしかった。

実は二人して、用を足して、のそのそ三等待合所の入口まで来た時、自分は比較的威儀を正して長蔵さんに、こんな事を云つたのである。

「あなたに、わざわざ先方^{さき}まで連れて行つていただいては恐縮ですから、もうこれでたくさんです」

すると長蔵さんは返事もせずに変な顔をして、黙つて自分の方

を見ているから、これは礼の云いようがわるいのかとも思つて、

「いろいろ御世話になつてありがとうございます。これから先はもう僕一人でやりますから、どうか御構いなく」

と云つて、しきりに頭を下げた。すると、

「一人でやれるものかね」

と長蔵さんが云つた。この時だけは御前さんを省はぶいたようである。

「なにやれます」

と答えたら、

「どうして」

と聞き返されたんで、少し面喰めんくらったが、

「今貴方あなたに伺って置けば、先へ行って貴方の名前を云って、どうかしますから」

ともじもじ述べ立てると、

「御前さん、私わたしの名前くらいで、すぐ坑夫になれると思ってるのは大間違いだよ。坑夫なんて、そんなに容易になれるもんじゃないよ」

と跳はねつけられちまった。仕方がないから

「でも御気の毒ですから」

と言訳かたがた挨拶あいさつをすると、

「なに遠慮しないでもいい、先方^{さき}まで送^{おく}ってあげるから心配しないがいい。――袖^{そで}摩^すり合うも何とかの因縁^{いんねん}だ。ハハハハハ」
と笑った。そこで自分は最後に、

「どうも済みません」

と礼を述べて置いた。

それから二人でベンチへ隣り合^あひに腰を掛けていると、だんだん^{ステーション}停車場へ人が寄^よってくる。大抵は田舎^{いなか}者である。中には長蔵^{ちんざう}さんのような袈裟^{はんてん}天兼^{てんけん}どてらを着た上に、天秤^{てんびん}棒^{ぼう}さえ荷^{かつ}いだのがある。そうかと思うと光沢^{つや}のある前掛^{まへかけ}を締めて、中折帽^{なかつま}を妙に凹^{へこ}ました江戸ッ子流^{あきぬい}の商人もある。その他の何やらかやらでベンチの

四方が足音と人声でざわついて来た時に、切符口の戸がかたりと開いた。待ち兼ねた連中は急いで立ち上がって、みんな鉄網の前へ集ってくる。この時長蔵さんの態度は落ちつき払ったものであった。例の太刀のごとくそっくりかえった「朝日」を厚い唇の間に啣えながら、あの角張った顔を三が二ほど自分の方へ向けて、

「御前さん、汽車賃を持っていなさるか」と聞いた。また自分の未熟なところを発表するようだが、実を云うと汽車賃の事は今が今まで自分の考えには毫も上らなかつたのである。汽車に乗るんだなと思いつながら、いくら金を払うもの

か、また金を払う必要があるものか、と思ひ至らなかつたのは愚^ぐの至^{いたり}である。愚はどこまでも承認するがこの質問に出逢^{であ}うまでは無賃^{ただ}で乗れるかのごとき心持で平気でいたのは事実である。よく分らないけれども、何でも自分の腹の底には、長蔵さんにさえ食つついてさえおれば、どうかしてくれるんだらうと云う依頼心が妙に潜^{ひそ}んでいたんだらう。ただし自分じゃけっしてそう思つていなかった。今でもそうだとは自分の事ながら申しにくい。けれども、こう云う安心がないとすれば、いくら馬鹿だつて、十九だつて、停車場^{ステーション}へ来て汽車賃の汽^きの字も考えずにいられるもんぢやない。その癖こんなに依頼している長蔵さんに対して、もう

御世話にならなくつても、好うございますの、これから一人で行きますのと平ひらに同行を断つたのは、どう云う了簡りようけんだろう。自分はこう云う場合にたびたび出逢であつてから、しまいには自分で一つの理論を立てた。――病気に潜伏期があるごとく、吾々われわれの思想や、感情にも潜伏期がある。この潜伏期の間には自分でその思想を有もちながら、その感情に制せられながら、ちつとも自覚しない。またこの思想や感情が外界の因縁いんねんで意識の表面へ出て来る機会がないと、生涯しやうがいその思想や感情の支配を受けながら、自分はけつしてそんな影響を蒙こうつた覚おぼえがないと主張する。その証拠はこの通りと、どしどし反対の行為言動をして見せる。がその行為言動が、

傍^{はた}から見ると矛盾になっている。自分でもはてなと思う事がある。はてなと気がつかないでもとんだ苦しみを受ける場合が起ってくる。自分が前に云った少女に苦しめられたのも、元はと云えば、やっぱりこの潜伏者を自覚し得なかったからである。この正体の知れないものが、少しも自分の心を冒^{おか}さない先に、劇薬でも注射して、ことごとく殺し尽す事が出来たなら、人間幾多の矛盾や、世上幾多の不幸は起らずに済んだろうに。ところがそう思うように行かんのは、人にも自分にも気の毒の至りである。

それで、自分が長蔵さんから「御前さん汽車賃を持っていなさるか」と問われた時に、自分ははっと思つて、少からず狼狽^{うろた}え

た。三十二銭のうちで饅頭まんじゅうの代と茶代を引くと何にもありやしない。汽車賃もない癖に、坑夫になろうなんて呑込のみこみ顔に受合あったんだから、自分は少し図迂ずうずう図迂ずうずうしい人間であつたんだと気がついたら、急に頬辺ほっぺたが熱くなつた。その時分の事を考えると自分ながら可愛らしい。これが今だったら、たとい電車の中で借金しんきんの催促さいそくをされようとも、ただ困るだけで、けっして赤面しやくめんはしない。ましてぼん引きの長蔵さんなどに対して、神聖なる羞恥しゆううちの血色を見せるなんてもつたいたない事は、夢にもやる気遣きづかいはありやしない。

自分はどう云うものか、長蔵さんに対して汽車賃はありますと答えたかった。しかし実際がないんだから嘘うそを吐く訳には行かな

い。嘘を吐きつ放はなにして済ませられるなら、思い切つて、嘘を吐く事にしたろうが、とにかく今切符を買うと云う間際まぎわで、吐けばすぐ露現ろけんしてしまうんだから始末がわるい。と云つて汽車賃はありませんと答えるのがいかにも苦痛である。どうも子供だから、しかも満更まんぜうの子供でなくつて、少し大きくなりかけた、色氣いろけのついた、煩悶はんもんをしている、つまらん常識があるような、ないような子供だから、なおなお不都合だった。そこで汽車賃はありますとも、ありませんとも云いにくかったもんだから、

「少しあります」

と答えた。それも響の物に応ずるごとく、停滞なく出ればよかつ

たが、何しろもつたいなくも頬辺を赤くしたあとで、はなはだ恐縮の態度で出したんだから、馬鹿である。

「少しって、御前さん、いくら持つてるい」

と長蔵さんが聞き返した。長蔵さんは自分が頬辺を赤くしても、恐縮しても、まるで頓着とんじやくしない。ただいくら持つてるか聞きたい様子であった。ところがあいにく肝心かんじんの自分にはいくらあるか判然しない。何しろしめめて三十二銭のうち、饅頭まんじゅうを三皿食って、茶代を五銭やったんだから、残るところはたくさんじゃない。あつても無くっても同じくらいなものだ。

「ほんのわずかです。とても足りそうもないです」

と正直なところを云うと、

「足りないところは、私が^{わたし}足して上げるから、構わない。何しろ有るだけ御出し」

と、思ったよりは平気である。自分はこの際一錢銅や二錢銅を勘定するのは、いかにも体裁^{ていさい}がわるいと考えた上に、有るものを無いと隠すように取られては厭^{いや}だから、懷^{ふところ}から例の墓口^{がまぐち}を取り出して、墓口ごと長蔵さんに渡した。この墓口は鰐^{わに}の皮で拵^{こしら}えたさくぶる上等なもので、親父から貰う時も、これは高価な品であると言ふ講釈をとくと聴かされた贅沢^{ぜいたくもの}物である。長蔵さんは墓口を受け取って、ちよつと眺^{なが}めていたが、

「ふふん、安くないね」

と云ったなり中味も改めずに腹掛の隠しへ入れちまった。中味を改めないところはよかったが、

「じゃ、私が切符を買って来て上げるから、ちゃんとここに待っていないくっちゃ、いけない。はぐれると、坑夫になれないんだからね」

と念を押して、ベンチを離れて切符口の方へすたすた行つてしまった。見ていると人込ひとごみの中へ這入はいったなり振り返りもしないで切符を買う番のくるのを待っている。さつき松原の掛茶屋を出てから、いまさきがた今先方までの長蔵さんは始終しじゅう自分の傍そばに食つついていて、

たまに離れると便所からでも顔を出して呼ぶくらいであつたのに、墓口を受け取つて、切符を買う時はまるで自分を忘れていたように見受けられた。あんまり人が多くつて、こっちへ眼をつける暇がなかつたんだろう。これに反して自分は一生懸命に長蔵さんの後姿を見守つて、札を買う順番が一人一人に廻つて来るたんに長蔵さんがだんだん切符口へ近づいて行くのを、遠くから妙な神経を起して眺^{なが}めていた。墓口は立派だが中を開けられたら銅貨が出るばかりだ。開けて見て、何だこれっばかりしか持つていないのかと長蔵さんが驚くに違ない。どうも気の毒である。いくら足し前をするんだろうなどと入らざる事を苦^くに病^やんでいると、

やがて長蔵さんは平生^{へいぜい}の顔つきで帰って来た。

「さあ、これが御前さんの分だ」

と云いながら赤い切符を一枚くれたぎりいくら不足だとも何とも云わない。きまりが悪かったから、自分もただ

「ありがとう」

と受取ったぎり賃銭の事は口へ出さなかった。墓口の事もそれなりにして置いた。長蔵さんの方でも墓口の事はそれっきり云わなかった。したがって墓口はついに長蔵さんにやった事になる。

それから、とうとう二人して汽車へ乗った。汽車の中では別にこれと云う出来事もなかった。ただ自分の隣りに腫物^{できもの}だらけの、

腐爛目^{ただれめ}の、痘痕^{あばた}のある男が乗ったので、急に心持が悪くなつて向う側へ席を移した。どうも当時の状態を今からよく考えて見るとよつぽどおかしい。生家^{うち}を逃亡^{かけお}ちて、坑夫にまで、なり下^{さが}る決心なんだから、大抵の事に辟易^{へきえき}しそももないもんだがやつぱり醜^{きた}なもの^{そば}の傍へは寄りつきたくなかった。あの安排^{あんばい}では自殺の一日前でも、腐爛目の隣を逃げ出したに違ない。それなら万事^{きち}こう几帳面^{ようめん}に段落をつけるかと思うと、そうでないから困る。第一長蔵さんや茶店のかみさんに逢^あつた時なんぞは平生の自分にも似ず、ぐうの音^ねも出さずに心^{しん}からおとなしくしていた。議論も主張^{きぎ}も気^き慨^いも何もあつたもんじゃありません。もつともこれはだいぶ餓^{ひも}

じい時であつたから、少しは差引いて勘定を立てるのが至当だが、けっして空腹のためばかりとは思えない。どうも矛盾——また矛盾が出たから廃そう。

自分は自分の生活中もつとも色彩の多い当時の冒険を暇さえあれば考え出して見る癖がある。考え出すたびに、昔の自分の事だから遠慮なく厳密なる解剖の刀を揮つて、縦横十文字に自分の心緒を切りさいなんで見ると、その結果はいつも千遍一律で、要するに分らないとなる。昔しだから忘れちまったんだなどと云つてはいけない。このくらい切実な経験は自分の生涯中に二度とありやしない。二十以下の無分別から出た無茶だから、その筋道が

入り乱れて要領を得んだと評してはなおいけない。経験の当時こそ入り乱れて滅多^{めった}やたらに盲動するが、その盲動に立ち至るまでの経過は、落ち着いた今日^{こんにち}の頭脳の批判を待たなければとても分らないものだ。この鉱山^{ゆき}行だって、昔の夢の今日だから、このくらい人に解るように書く事が出来る。色気がなくなつたから、あらいざらい書き立てる勇氣があると云うばかりじゃない。その時の自分を今の眼の前に引擦^{ひきず}り出して、根掘り葉掘り研究する余裕がなければ、たといこれほどにだってとうてい書けるものじゃない。俗人はその時その場合に書いた経験が一番正しいと思うが、大間違である。刻下^{こっか}の事情と云うものは、転瞬^{てんしゆん}の客氣^{かつき}に駆ら

れて、とんでもない誤謬^{ごびゆう}を伝え勝ちのものである。自分の鉾山行などもその時そのままの心持を、日記にでも書いて置いたら、定めし乳臭い、気取った、偽りの多いものが出来上ったろう。とうてい、こうやって人の前へ御覧下さいと出された義理じゃない。

自分が腐爛目の難を避けて、向う側に席を移すと、長蔵さんは一目ちよつと自分と腐爛目を見たなりで、やはり元の所へ腰を掛けたまま動かなかった。長蔵さんの神経が自分よりよほど剛健なものには少からず驚嘆した。のみならず、平気な顔で腐爛目と話し出したに至って、少しく愛想^{あいそ}が尽きた。

「また山行きかね」

「ああまた一人連れて行くんだ」

「あれかい」

と腐爛目は自分の方を見た。長蔵さんはこの時何か返事をしかけたんだろうがふと自分と顔を見合せたものだから、そのまま厚い唇を閉じて横を向いてしまった。その顔について廻って、腐爛目は、

「まただいぶん儲^{もう}かるね」

と云った。自分はこの言葉を聞くや否やたちまち窓の外へ顔を出した。そうして窓から唾^{つばき}液をした。するとその唾液が汽車の風で自分の顔へ飛んで来た。何だか不愉快だった。前の腰掛で知らな

い男が二人并じている。

「泥棒が這入るとするぜ」

「こそそこそがかい」

「なに強盗がよ。それでもって、拔身か何かで威嚇した時によ」

「うん、それで」

「それで、主人が、泥棒だからってんで贋銭をやって帰したと
するんだ」

「うんそれから」

「後で泥棒が贋銭と気がついて、あすこの亭主は贋銭使だ贋銭使
だって方々振れて歩くんだ。常公の前だが、どっちが罪が重いと

思う」

「どっちたあ」

「その亭主と泥棒がよ」

「そうさなあ」

と相手は解決に苦しんでいる。自分は眠ねぶくなつたから、窓の所へ頭を持たしてうとうとした。

寝ると急に時間が無くなつちまう。だから時間の経過が苦痛になるものは寝るに限る。死んでもおそらく同じ事だろう。しかし死ぬのは、やさしいようでなかなか容易でない。まず凡人は死ぬ代りに睡眠で間に合せて置く方が軽便である。柔道をやる人が、

時々朋友ほうゆうに咽喉のどを締めて貰う事がある。夏の日永ひながのだるい時などは、絶息したまま五分も道場に死んでいて、それから活かつを入れさせると、生れ代るような好い気分になる——ただし人の話だが。

——自分は、もしや死につきりに死んじまやしないかと云う神経のために、ついぞこの荒療治あらりようじを頼んだ事がない。睡眠はこれほどの効験もあるまいが、その代り生き戻り損そこなう危険も伴ともなっていないから、心配のあるもの、煩悶はんもんの多いもの、苦痛に堪たえぬもの、ことに自滅の一着として、生きながら坑夫になるものに取っては、至大なる自然の賚たまものである。その自然の賚が偶然にも今自分の頭の上に落ちて来た。ありがたいと礼を云う閑ひまもないうちに、うっと

りとしちまつて、生きている以上は是非共その経過を自覚しなければならぬ時間まるつぶを、丸潰しに潰していた。ところが眼めが覚さめた。後から考えて見たら、汽車の動いてる最中に寝ね込んだから、汽車の留ったために、眠りが調子を失ってどこかへ飛んで行ったのである。自分は眠っていると、時間の経過だけは忘れているが、空間の運動には依然として反応を呈する能力があるようだ。だから本当に煩悶を忘れるためにはやはり本当に死ななくつては駄目だ。ただし煩悶がなくなつた時分には、また生き返りたくなるにきまつてるから、正直に理想を云うと、死んだり生きたり互違たがいちがいにするのが一番よろしい。——こんな事をかくと、何だか

剽軽ひょうきんな冗談じょうたんを云つてゐるようだが、けっしてそんな浮いた了見りょうけんじゃない。本気に真面目まじめを話してゐるつもりである。その証拠にはこの理想はただ今過去を回想して、面白半分興に乗じて、好い加減につけ加えたんじゃない。実際汽車が留つて、不意に眼が覚めた時、この通りに出て来たのである。馬鹿ばか気た感じだから滑稽こっけいのように思われるけれども、その時は正直にこんな馬鹿気た感じが起つたんだから仕方がない。この感じが滑稽に近ければ近いほど、自分は当時の自分を可愛想かわいそうに思ふのである。こんな常識をはずれた希望を、真面目まじめに抱いだかねばならぬほど、その時の自分は情ない境遇におつたんだと云う事が判然するからである。

自分がふと眼を開けると、汽車はもう留っていた。汽車が留まっただなと云う考えよりも、自分は汽車に乗っていたんだなと云う考えが第一に起った。起ったと思うが早いか、長蔵さんがいるんだ、坑夫になるんだ、汽車賃がなかったんだ、生家^{うち}を出奔^{しゅっぽん}したんだ、どうしたんだ、こうしたんだとまるで十二三のたんだがむらむらと塊^{かた}まつて、頭の底から一度に湧^わいて来た。その速い事と云ったら、言語^{ごんご}に絶すると云おうか、電光石火と評しようか、実に恐ろしいくらいだった。ある人が、溺^{おほ}れかかったその刹那^{せつな}に、自分の過去の一生を、細大漏^{さいだい}らさずありありと、眼の前に見た事があると云う話をその後聞^{のち}いたが、自分のこの時の経験に因^よって

考えると、これはけっして嘘じゃなかろうと思う。要するにそのくらい早く、自分は自分の実世界における立場と境遇とを自覚したのである。自覚すると同時に、急に厭^{いや}な心持になった。ただ厭では、とても形容が出来ないんだが、さればと云って、別に叙述しようもない心持ちだからただの厭でとめて置く。自分と同じような心持ちを経験した人ならば、ただこれだけで、なるほどあれだなと、直勘^{すぐかん}づくだろう。また経験した事がないならば、それこそ幸福だ、けっして知るに及ばない。

その内同じ車室に乗っていたものが二三人立ち上がる。外からも二三人這入^{はい}って来る。どこへ陣取ろうかと云う眼つきできよろ

きよろするのと、忘れものはないかと云う顔つきでうろろするのと、それから何の用もないのに姿勢を更^かえて窓へ首を出したり、欠伸^{あくび}をしたりするのと、が一度に合併して、すべて動揺の状態で世の中を崩^{くず}し始めて来た、自分は自分の周囲のものが、ことごとく活動しかけるのを自覚していた。自覚すると共に、自分は普通の人間と違って、みんなが活動する時分でさえ、他に^{ひと}釣り込まれて気分が動いて来ないような仲間外^{はず}れだと考えた。袖^{そで}が触^すれ違って、膝^{ひざ}を突き合せていながらも、魂だけはまるで縁も由緒^{ゆかり}もない、他界から迷い込んだ幽霊のような気持であつた。今まで
は、どうか、こうか、人並に調子を取って来たのが汽車が留まる

や否や、世間は急に陽気になって上へ騰^{あが}る。自分は急に陰気になつて下へ降^{さが}る、とうてい交際^{つきあい}はできないんだと思うと、背中と胸の厚さがしゅうと減つて、臟腑^{ぞうふ}が薄^{うす}っ片^{ぺら}な一枚の紙のように圧^おしつけられる。途端に魂だけが地面の下へ抜け出しちまつた。まことに申訳のない、御恥^{へこ}ずかしい心持ちをふらつかせて、凹^{へこ}んでいた。

ところへ長蔵さんが、立つて来て、

「御前さん、まだ眼が覚めないかね。ここから降りるんだよ」と注意してくれた。それでようやくなるほどと気がついて立ち上った。魂が地の底へ抜け出して行く途中でも、手足に血が通^{かよ}つ

てるうちは、呼ぶと返って来るからおかしなものだ。しかしこれがもう少し烈はげしくなると、なかなか思うように魂こゝろが身体からだに寄りついてくれない。その後台湾沖で難船した時などは、ほとんど魂に愛想あいそを尽かされて、非常な難義をした事がある。何なんにでも上には上があるもんだ。これが行き留りだの、突き当りだのと思つて、安心してかかると、とんだ目に逢う。しかしこの時はこの心持が自分にとつてもっとも新しくて、しかもはなはだ苦にがい経験であつた。

長蔵さんのどてらの尻しりを嗅かぎながら改札場から表へ出ると、大きな宿しゆくの通りへ出た。一本筋の通りだが存外広い、ばかりではな

い、心持の判然はつきりするほど真直まっすぐである。自分はこの広い往還おうかんの真中に立って遥はるか向うの宿外しゆくはずれを見下みおろした。その時一種妙な心持になった。この心持ちも自分の生涯しょうがい中であって新らしいものであるから、ついでにここに書いて置く。自分は肺の底が抜けて魂が逃げ出しそうなところを、ようやく呼びとめて、多少人間らしい了簡りようけんになって、宿の中へ顔を出したばかりであるから、魂が吸ひく息につれて、やっと胎内に舞い戻っただけで、まだふわふわしている。少しも落ちついていない。だからこの世にいても、この汽車から降りても、この停車場ステーションから出ても、またこの宿の真中に立つても、云わば魂がいよいよながら、義理に働いてくれたようなも

ので、けっして本気の沙汰^{さた}で、自分の仕事として引き受けた専門の職責とは心得られなかったくらい、鈍^{にぶ}い意識の所有者であつた。そこで、ふらついている、気の遠くなっている、すべてに興味を失つた、かなつぽ眼^{まなこ}を開いて見ると、今までは汽車の箱に詰め込まれて、上下四方とも四角に仕切られていた限界が、はつと云う間^まに、一本筋の往還を沿うて、十丁ばかり飛んで行つた。しかもその突当りに滴^{したた}るほどの山が、自分の眼を遮^{かへき}りながらも、邪魔にならぬ距離を有^{たも}つて、どろんとしたわが眸^{ひとみ}を翠^{みどり}の裡^{うち}に吸寄せている。——そこで何んとなく今云つたような心持になつちまつたのである。

第一には大道砥だいどうとのごとしと、成語にもなってるくらいで、平たい真直な道は蟠まりわだかのない爽さわやかなものである。もっと分り安く云うと、眼を迷までつかせない。心配せずにこっちへ御出おいでと誘うようにでき上ってるから、少しも遠慮や気兼きがねをする必要がない。ばかりじゃない。御出と云うから一本筋の後あとを喰ツついて行くと、どこまでも行ける。奇体な事に眼が横町へ曲りたくない。道が真直に続いていればいるほど、眼も真直に行かなくっては、窮屈でかつ不愉快である。一本の大道は眼の自由行動と平行して成り上ったものと自分は堅く信じている。それから左右の家並いえなみを見ると、――これは瓦葺かわづぶきも藁葺わらづぶきもあるんだが――瓦葺だろうが、藁葺だろう

が、そんな差別はない。遠くへ行けば行くほどしだいに屋根が低くなって、何百軒とある家が、一本の針金で勾配こうばいを纏めまとられるために向うのはずれからこっちまで突き通されてるように、行儀よく、斜はすに一筋を引っ張って、どこまでも進んでいる。そうして進めば進むほど、地面に近寄ってくる。自分の立っている左右の二階屋などは——宿屋のように覚えているが——見上げるほどの高さであるのに、宿外れの軒を透すかして見ると、指の股またに這入はいると思われるくらい低い。その途中に暖簾のれんが風に動いていたり、腰障子こししょうじに大きな蛤はまぐりがかいてあったりして、多少の変化は無論あるけれども、軒並のきなみだけを遠くまで追っ掛けて行くと、一里が半秒はんせうどで

眼の中に飛び込んで来る。それほど明瞭めいりょうである。

前に云った通り自分の魂は二日酔ふつかえいの体ていたらくで、どこまでもと

ろんとしていた。ところへ停車場ステーションを出るや否や断りなしにこの明

瞭な——盲目めくらにさえ明瞭なこの景色けしきにばったりぶつかったのであ

る。魂の方では驚かなくっちゃならない。また実際驚いた。驚い

たには違いないが、今まであやふやに不精不精ふしようぶしように徘徊はいかいしていた情

性を一変して屹きつとなるには、多少の時間がかかる。自分の前さきに

云った一種妙な心持ちと云うのは、魂が寝返りを打たないさき、

景色がいかにも明瞭であるなと心づいたあと、———その際きわどい中ちゆう

間かんに起った心持ちである。この景色はかように暢達のびのびして、かよう

に明白で、今までの自分の情緒しじょうしきとは、まるで似つかない、景氣のいいものであったが、自身の魂がおやと思つて、本氣にこの外界げかいにむか対い出したが最後、いくら明かでも、いくら暢のんびりしていても、全く実世界の事実となつてしまふ。実世界の事実となるといかな御光ごこうでもありがた味が薄くなる。仕合せな事に、自分は自分の魂が、ある特殊の状態にいたため——明かな外界を明かなりと感受するほどの能力は持ちながら、これは実感であると自覚するほど作用が鋭くなかったため——この真直な道、この真直な軒を、事実には等しい明かな夢と見たのである。この世でなければ見る事の出来ない明瞭な程度と、これに伴う爽涼はつきりした快感をもつ

て、他界の幻影に接したと同様の心持になったのである。自分は大きな往来の真中に立っている。その往来はあくまでも長くつて、あくまでも一本筋に通っている。歩いて行けばその外まで行かれる。たしかにこの宿を通り抜ける事はできる。左右の家は触れば触る事が出来る。二階へ上れば上る事が出来る。できると云う事はちゃんと心得ていながらも、できると云う観念を全く遺失して、単に切実なる感能の印象だけを眸のなかに受けながら立っていた。

自分は学者でないから、こう云う心持は何と云うんだか分らない。残念な事に名前を知らないののでついこう長くかいてしまっ

た。学問のある人から見たら、そんな事をと笑われるかも知れないが仕方がない。その後これに似た心持は時々経験した事がある。しかしこの時ほど強く起った事はかつてない。だから、ひよつとすると何かの参考になりはすまいかと思って、わざわざここに書いたのである。ただしこの心持ちは起るとたちまち消えてしまった。

見ると日はもう傾きかけている。初夏の日永の頃だから、日差から判断して見ると、まだ四時過ぎ、おそろく五時にはなるまい。山に近いせいか、天気は思ったほどよくないが、現に日が出ているくらいだから悪いとは云われない。自分は斜かけに、長い

一筋の町を照らす太陽を眺めた時、あれが西の方だと思った。東京を出て北へ北へと走ったつもりだが、汽車から降りて見ると、まるで方角がわからなくなっていた。この町を真直に町の通つてなりに、下ると、突き当りが山で、その山は方角から推すと、やはり北であるから、自分と長蔵さんは相変わらず、北の方へ行くんだと思った。

その山は距離から云うとだいぶんあるように思われた。高さもけっして低くはない。色は真蒼で、横から日の差す所だけが光るせいか、陰の方は蒼い底が黒ずんで見えた。もつともこれは日の加減と云うよりも杉檜の多いためかも知れない。ともかくも蓊鬱

として、奥深い様子であった。自分は傾き^{かたむ}かけた太陽から、眼を移してこの蒼い山を眺めた時、あの山は一本立だろうか、または続きが奥の方にあるんだろうかと考えた。長蔵さんと並んで、だんだん山の方へ歩いて行くと、どうあっても、向うに見える山の奥のまたその奥が果しもなく続いていて、そうしてその山々はここごとく北へ北へと連なっているとしか思われなかった。これは自分達が山の方へ歩いて行くけれど、ただ行くだけでなかなか麓^{ふもと}へ足が届かないから、山の方で奥へ奥へと引き込んでいくような気がする結果とも云われるし。日がだんだん傾いて^{かたむ}陰の方は蒼い山の上皮^{うわかわ}と、蒼い空の下層^{したかわ}とが、双方で本分を忘れて、好い加減

に他の領分を犯し合ってるんで、眺める自分の眼にも、山と空の区劃が判然しないものだから、山から空へ眼が移る時、つい山を離れたと云う意識を忘却して、やはり山の続きとして空を見るからだとも云われる。そうしてその空は大変広い。そうして際限なく北へ延びている。そうして自分と長蔵さんは北へ行くのである。

自分は昨夕東京を出て、千住の大橋まで来て、裕の尻を端折つたなり、松原へかかっても、茶店へ腰を掛けても、汽車へ乗っても、空脛のまままで押し通して来た。それでも暑いくらいであった。ところがこの町へ這入ってから何だか空脛では寒い氣持がす

る。寒いと云うよりも淋しいんだろう。長蔵さんと黙って足だけを動かしていると、まるで秋の中を通り抜けてるようである。そこで自分はまた空腹になった。たびたび空腹になった事ばかりを書くのはいかがわしい事で、かつこの際空腹になつては、どうも詩的でないが、致し方がない。実際自分は空腹になった。家を出てから、ただ歩くだけで、人間の食うものを食わないから、たちまち空腹になつちまう。どんなに気分がわるくつても、煩悶はんもんがあつても、魂が逃げ出しそうでも、腹だけは十分減るものである。いや、そう云うよりも、魂を落つけるためには飯を供えなくつちやいけないと云い換えるのが適當かも知れない。品の悪い

話だが、自分は長蔵さんと並んで往来の真中を歩きながら、左右に眼をくばって、両側の飲食店を覗き込むようにして長い町を下^{くだ}って行^いった。ところがこの町には飲食店がだいぶんある。旅屋^{はたごや}とか料理屋とか云う上等なものは駄目としても、自分と長蔵さんが這入^{はい}ってしかるべきや^やたい^{たい}いち流^{りゅう}のがあすこにもここにも見える。しかし長蔵さんは毫^{ごう}も支度^{したく}をしそうにない。最前^{さいぜん}の我多馬車^{がたばしや}の時のように「御前^{ごぜん}さん夕食^{ゆうめし}を食^くうかね」とも聞いてくれない。その癖自分と同じように、きよろきよろ両側に眼を配^{はく}って何^{なに}だか発見^{はっけん}したいような気色^{けしき}がありありと見える。自分は今に長蔵さんが恰好^{かつこう}な所^{ところ}を見つけて、晩食^{ばんめし}をしたために自分を連れ込む事^{こと}と自

信して、気を永く辛抱しながら、長い町を北へ北へと下って行つた。

自分は空腹を自白したが、倒れるほどひもじくは無かった。胃の中にはまだ先刻さつきの饅頭まんじゅうが多少残ってるようにも感ぜられた。だから歩けば歩かれる。ただ汽車を下りるや否や滅めり込みこみそうな精神が、真直まっすぐな往来の真中に抛ほうり出されて、おやと眼を覚したら、山里の空気がひやりと、夕日の間から皮膚を冒おかして来たんで、心機一転の結果としてここに何か食って見たくなっただのである。したがって食わなければ食わないでも済む。長蔵さん何か食わしてくれませんかと言うほど苦しくもなかった。しかし何だか口が淋さび

しいと見えて、しきりに縄なわの暖簾れんや、お煮にしメや、御中おちゆうじぎょう食所が気にか
かる。相手の長蔵さんがまた申し合せたように右左と覗のぞき込むの
で、こっちはますます食意くいい地が張ってくる。自分はこの長い町を
通りながら、自分らに適當と思ふ程度の一膳いちぜんめし屋をついに九軒
まで勘定した。数えて九軒目に至ったら、さしもに長い宿しゆくはどう
とうおしまいになり掛けて、もう一町も行けば宿外しゆくはずれへ出拔でけそ
うである。はなはだ心細かった。時にふと右側を見ると、また酒
めしと云う看板に逢着ほうちやくした。すると自分の心のうちにこれが最後
だなと云う感じが起った。それがためか煤すすけた軒の腰障子こししょうじに、肉
太したに認めた酒めし、御肴おしやくと云う文字がもつとも劇烈な印象をもつ

て自分の頭に映じて来た。その映じた文字がいまだに消えない。酒の字でも、め・し・の字でも、御肴おんさかなの字でもありあり見える。この様子では、いくら耄碌もろくしてもこの五字だけは、そっくりそのまま、紙の上に書く事が出来るだろう。

自分が最後の酒、めし、御肴をしみじみ見ていると、不思議な事に長蔵さんも一生懸命に腰障子の方に眼をつけている。自分はさすが頑強がんきょうの長蔵さんも今度こそ食いに這入はいるに違なかつと思った。ところが這入らない。その代りぴたりと留った。見ると腰障子の奥の方では何だか赤いものが動いている。長蔵さんの顔色を窺うかがうと、何でもこの赤いものを見詰めているらしい。この赤

いものは無論人間である。が長蔵さんがなぜ立ち留ってこの赤い人間を覗き込むのか、とんと自分には分らなかった。人間には違ないが、ただ薄暗く赤いばかりで、顔つきなどは無論判然しやしない。がと思つて、自分も不審かたがた立ち留っていると、やがて障子の奥から赤毛布が飛び出した。いくら山里でも五月の空に毛布は無用だろうと云う人があるかも知れないが、實際この男は赤毛布で身を堅めていた。その代り下には手織の単衣一枚だけしきや着ていないんだから、つまり^{しめ}見て見ると自分と大した相違はない事になる。もつとも単衣一枚で^{しの}凌いでると云う事は、あとからの発見で、障子の影から飛び出した時にはただ赤いばかりで

あつた。

すると長蔵さんは、いきなり、この赤い男の側そばへつかつかやつて行つて、

「お前さん、働く気はないかね」

と云つた。自分が長蔵さんに捕つかまつた時に聞かされた、第一の質問はやはり「働く気はないかね」であつたから、自分はおやまた働かせる気かなと思つて、少からぬ興味の念に駆かられながら二人を見物していた。その時この長蔵さんは、誰を見ても手頃な若い衆しゅとさえ鑑定すれば、働く気はないかねと持ち掛ける男だと云う事を判然はんぜんと覺さとつた。つまり長蔵さんは働かせる事を商売にするん

で、けっして自分一人を非常な適任者と認めて、それで坑夫に推
挙した訳ではなかった。おおかたどこで、どんな人に、幾人逢お
うとも、版行はんこうで押したような口調で御前さん働く気はないかねを
根気よく繰返し得る男なんだろう。考えると、よくこんな商売を
厭あきもせず、長の歳月としつきやられたものだ。長蔵さんだって、天性御
前さん働く気はないかねに適した訳でもあるまい。やっぱり何か
の事情やむを得ず御前さんを復習しているんだろう。こう思え
ば、まことに罪のない男である。要するに芸がないからほかの事
は出来ないんだが、ほかの事が出来ないんだと意識して煩悶はんもんする
気色けしきもなく、自分でなくっちゃ御前ごぜんさんをやり得る人間は天下広

しといえども二人と有るまいと云うほどの平気な顔で、やっている。

その当時自分にこれだけの長蔵観ちようぞうかんがあつたらだいぶ面白かつたろうが、何しろ魂に逃げだされ損なっている最中だったから、なかなかそんな余裕は出て来なかつた。この長蔵観は当時の自分を他人と見倣みなして、若い時の回想を紙の上に写すただ今、始めて序じょの節せつに浮かんだのである。だからやッぱり紙の上だけで消えてなくなるんだろう。しかしその時その砌みぎりの長蔵観と比較して見るとだいぶ違つてるようだ。――

自分は長蔵さんと赤毛布あかげつとの立談たちばなしを聞きながら、自分は長蔵さん

から毫ごうも人格を認められていなかったと云う事を見出した。――
もつとも人格はこの際少しおかしい。いやしくも東京を出奔しゅつぽんして
坑夫にまでなり下がるものが人格を云々うんぬんするのは変挺へんてこな矛盾であ
る。それは自分も承知している。現に今筆を執とって人格と書き出
したら、何となく馬鹿ばか気けでいて、思わず噴ふき出しそうになつた
らである。自分の過去を顧かえりみて噴き出しそうになる今の身分
を、昔と比くらべて見ると実に結構の至りであるが、その時はなか
か噴き出すどころの騒さわぎではなかった。――長蔵さんは明かに自
分の人格を認めていなかった。

と云うのは、彼れはこの酒、めし、御肴おんさかなの裏うちから飛び出した若

い男を捕^{つら}まえて、第二世の自分であるごとく、全く同じ調子と、同じ態度と、同じ言語と、もっと立ち入って云えば、同じ熱心の程度をもつて、同じく坑夫になれと勧誘している。それを自分はなぜだか少々怪^けしからんように考えた。その意味を今から説明して見ると、ざっとこんな訳なんだろう。――

坑夫は長蔵さんの云うごとくすこぶる結構な家業^{かぎよう}だとは、常識を質に入れた当時の自分にももつとも思ひようがなかった。ま
ず牛から馬、馬から坑夫という位の順だから、坑夫になるのは不
名誉だと心得ていた。自慢^{さと}にやならないと覺^{おも}っていた。だから坑
夫の候補者が自分ばかりと思^{おも}いのほか突然居酒屋の入口から赤毛布

になって、あらわれようとも別段神経を悩ますほどの大事件じゃないくらいは分りきってる。しかしこの赤毛布の取扱方が全然自分と同様であると、同様であると云う点に不平があるよりも、自分は全然赤毛布と一般的な人間であると云う気になっちまう。取扱方の同様なのを延^ひき伸ばして行くと、つまり取り扱われるものが同様だからと云う妙な結論に到着してくる。自分はふらふらとそこへ到着していたと見える。長蔵さんが働かないかと談判しているのは赤毛布で、赤毛布はすなわち自分である。何だか他^{ひと}人が赤毛布を着て立ってるようには思われない。自分の魂が、自分を置き去りにして、赤毛布の中に飛び込んで、そうして長蔵さんから

坑夫になれと談じつけられている。そこで、どうも情なさけなくなっちまった。自分が直接に長蔵さんと応対している間は、人格も何も忘れていたんだが、自分が赤毛布になって、君儲もつかるんだぜと説得ていさいされている体裁ていさいを、自分が傍わきへ立って見た日には方かたなしである。自分はたしてこんなものかと、少しく興きようを醒さまして赤毛布を、つらつら観察していた。

ところが不思議にもこの赤毛布がまた自分と同じような返事をする。被かぶってる赤毛布ばかりじゃない、心底しんそこから、この若い男は自分と同じ人間だった。そこで自分はつくづくつまらないなと感じた。その上もう一つつまらない事が重なったのは、長蔵さん

が、にくにくしいほど公平で、自分の方が赤毛布あかげつとよりも坑夫に適していると言ふところを少しも見せない。全く器械的にやっている。先口せんくちだから、もう少しこつちをひいき贖ひいきにしたら好かろうと思うくらいであつた。――これで見ると人間の虚栄心はどこまでも抜けないものだ。窮して坑夫になるとか、ならないとか云う切齒せつば詰つた時でさえ自分はこれほどの虚栄心を有もつていた。泥棒に義理があつたり、乞食に礼式があるのも全くこの格なんだろう。――しかしこの虚栄心の方は、自分すなわち赤毛布であると云うことを自覚して、大おおにつまらなくなつたよりも、よほどつまらなさ加減が少かつた。

自分が大につまらなくなつて、ぼんやり立っていると、二人の
談判は見る間に片づいてしまった。これは必ずしも長蔵さんがこ
とほどさように上手だからと云う訳ではない。赤毛布の方がこと
ほどさように馬鹿だったからである。自分はこの男を一概に馬鹿
と云うが、あながち、自分に比較して輕蔑する氣じゃけつしてな
い。自分の当時は、長蔵さんの話をはいはい聞く点において、す
ぐ坑夫になろうと承知する点において、その他いろいろの点にお
いて、全くこの若い男と同等すなわち馬鹿であつたのである。も
し強いて違ふところを詮議したら赤毛布を被つてゐるのと縋を着て
いるとの差違くらいなものだろう。だから馬鹿と云うのは、自分

と同じく気の毒な人と云う意味で、馬鹿のうちに少しぐらいは同情の意を寓ぐうしたつもりである。

で、馬鹿が二人長蔵さんに尾ついていっしょに銅山まで引つ張られる事になった。しかるに自分が赤毛布と肩を並べて歩き出した時、ふと気がついて見ると、さっきのつまらない心持ちがもう消えていた。どうも人間の了見りょうけんほど出たり引つ込んだりするものはない。有るんだなと安心してゐると、すでにない。ないから大丈夫と思つてると、いや有る。有るようで、ないようでその正体はどこまで行つても捕まらない。その後のちさる温泉場で退屈だから、宿の本を借りて読んで見たらいろいろ下らない御経の文句が並べ

てあつたなかに、心は三世にわたつて不可得ふかとくなりとあつた。三世にわたるなんてえのは、大袈裟おおげさな法螺ほらだろうが、不可得ふかとくと云うのは、こんな事を云うんじゃないかと思う。もつともある人が自分の話を聞いて、いやそれは念ねんと云うもので心こころじゃないと反対した事がある。自分はいずれでも御随意だから黙っていた。こんな議論は全く余計な事だが、なぜ云いたくなるかという、世間には大變利口な人物でありながら、全く人間の心を解していないものがだいぶんある。心は固形体だから、去年も今年も虫さえ食わなければ大抵同じもんだろうくらいに考えているには弱らせられる。そうして、そう云う呑気のんきな料簡りょうけんで、人を自由に取り扱

の、教育するの、思うようにして見せるのと騒いでいるから驚いちまう。水だって流れりや返って来やしない。ぐずぐずしてりや蒸発しちまう。

とにかくこの際は、赤毛布と並んで歩き出した時、もう先刻さつきのつまらない考えが蒸発していたと云う事だけを記憶して置いて貰もらえばいい。——そして吾われながら驚いたのは、どうも赤毛布あかげつとと並んで歩くのが愉快になって来た。もっともこの男は茨城いばらきか何かの田舎いなかもので、鼻から逃げる妙な発音をする。芋いもの事を芋えもと訓じたのはこれからさきの逸話に属するが、歩き出したてから、あんまりありがたい音声ではなかった。その上顔が人並にできていな

かった。この男に比べると角張^{かくば}った顎^{あご}の、厚唇^{あつくちびる}の長蔵さんなどは威風堂々たるものである。のみならず茨城の田舎を突っ走ったの
みで、いまだかつて東京の地を踏んだことがない。そうして、赤
い毛布^{けつと}が妙に臭い。それにもかかわらず自分はこの山里で、銅山
行きの味方を得たような心持ちがして嬉^{うれ}しかった。自分はどうせ
捨てる身だけれども、一人で捨てるより道伴^{みちづれ}があつて欲^{ほし}い。一人
で零落^{おちぶ}れるのは二人で零落れるのよりも淋しいもんだ。そう明ら
さまに申しては失礼に当るが、自分はこの男について何一つ好い
ところではなかったけれども、ただいっしょに零落れてくれる
と云う点だけがありがたいのでそれがため大いに愉快を感じた。

それで歩き出すや否や、少し話もし掛けて見たくらいに、近しい仲となつてしまった。これから推^おして考えると、川で死ぬ時は、きつと船頭の一人や二人を引き擦^ずり込みたくなるに相違ない。もし死んでから地獄へでも行くような事があつたなら、人のいない地獄よりも、必ず鬼のいる地獄を択^{えら}ぶだろう。

そう云う訳で、たちまち赤毛布が好きになつて、約一二町も歩いて来たら、また空腹を覚え出した。よく空腹を覚えるようだが、これは前段の続きでけつして新しい空腹ではない。順序を云うと、第一に精神が稀薄になつて、もつとも刻^{こっ}下^か感^{かん}に乏しい時に汽車を下りたんで、次に真直^{まっすぐ}な往来を真直に突き当りの山まで見^みお

下したもんだからようやく正氣づいたのは前申した通りである。
それが機縁になつて、今度は食氣がついて、それから人格を認められていない事を認識して、はなはだつまらなくなつて、つまらなくなつたと思つたら坑夫の同類が出来て、少しく頽勢を挽回し
たと云うしだいになる。だに因つてまた空腹に立ち戻つたと説明
したら善く呑み込めるだろう。さて空腹にはなつたが、最後の
膳飯屋はもう通り越している。宿はすでに尽きかかった。行く手
は暗い山道である。とうてい願は叶いそうもない。それに赤毛布
は今食つたばかりの腹だから、勇ましくどんどん歩く。どうも、
降参しちまつた。そこで思い切つて、最後の手段として長蔵さん

に話しかけて見た。

「長蔵さん、これからあの山を越すんですか」

「あの取附とつつきの山かい。あれを越しちゃ大変だ。これから左へ切れるんさ」

と云ったなりまたすたすた歩いて行く。どうも是非に及ばない。

「まだよっぽどあるんですか、僕は少し腹が減ったんだが」

と、とうとう空腹の由を自白した。すると長蔵さんは

「そうかい。芋でも食うべい」

と、云いながら、すぐさま、左側の芋屋へ飛び込んだ。よく約束したように、そことこん所に芋屋があつたもんだ。これを大袈裟おおげさに云

え、ば天^{てん}佑^{ゆう}である。今でもこの時の上出来に行つた有様を回顧すると、おかしいばかりじゃない、嬉しい。もつとも東京の芋屋のよ^きうに奇麗^{きれい}じゃなかった。ほとんど名状しがたいくらいに真黒になつた芋屋で、芋屋と云えば芋屋だが、芋専門じゃない。と云つて芋のほかに何を売ってるんだつたか、今は忘れちまつた。食う方に氣を取られ過ぎたせいかとも思う。

やがて長蔵さんは両手に芋を載^のせて、真黒な家^{うち}から、のそりと出て来た。入れ物がないもんだから、両手を前へ出して、

「さあ、食つた」

と云う。自分は眼前に芋を突きつけられながら、ただ

「ありがとう」

と礼を述べて、芋を眺^{なが}めていた。どの芋にしようかと考えた訳ではない。そんな選択を許すような芋ではなかった。赤くつて、黒くつて、瘡^やせていて、湿^{しめ}っぽそうで、それで所々皮が剥^はげて、剥げた中から緑青^{ろくしょう}を吹いたような味^みが出ている。どれにぶつかったって大同小異である。そんなら一目^{いちもく}惨澹^{さんたん}たるこの芋の光景に辟^{へき}易^{えき}して、手を出さなかったかと云うと、そうでもない。自分の胃の状況から察すると、芋中^{いもちゅう}の、とも云わるべきこの御薩^{おさつ}を快よく賞翫^{しょうがん}する食欲は十分有ったように思う。しかし「さあ、食った」と突きつけられた時は、何だかおびえたような気分で、おい

きたと手を出し損^{そく}なつた。これはおおかた「さあ、食^{そく}った」の云い方が悪かつたんだらう。

自分が芋を取らないのを見て、長蔵さんは、少々もどかしいと云う眼つきで、再び

「さあ」

と、例の顎^{あご}で芋を指^さしながら、前へ出した手頸^{てくび}を、食えと云う相図^{あず}にちよつと動かした。よく考えて見ると、両手が芋で塞^{ふさ}つてゐるんで、自分がどうかしてやらないと、長蔵さんは、いくら芋が食いたくても、口へ持つて行く事ができないんであつた。じれたのももつともである。そこで自分はようやく気がついて、二の腕

で、変な曲線を描いて、右の手を芋まで持って行こうとすると、
持って行く途中で、芋の方が一本ころころと往来の中へ落ちた。
これはすぐさま赤毛布あかげつとが拾った。拾ったと思ったら、

「この芋は好芋だ。おれが貰おう」

と云った。それでこの男は芋いもを芋えもと発音すると云う事が分った。

自分はこの時長蔵さんから、最初に三本、あとから一本締しめて五
本、前後二回に受取ったと記憶している。そうしてそれを懐なつかし
げに食いながら、いよいよ宿外れしゆくはずまで来るとまた一事件ひとじけん起った。

宿しゆくの外れはずには橋がある。橋の下は谷川で、青い水が流れてい
る。自分はもう町が尽きるんだなとは思いつつ、芋に心を

奪われて、橋の上へ乗っかかるまでは川があるとも気がつか
なかった。ところが急に水の音がするんで、おやと思うと橋へ出
ている。川がある。水が流れている。——何だか馬鹿気た話だが、
事実にもっとも近い叙述をやろうとすると、まあ、こう書くのが
一番適切だろう、こう書いて置く。けっして小説家の弄ぶような
法螺ほら七分の形容ではない。これが形容でないとするとその時の自
分がいかにか芋を旨うまがったのかがおのずから分明ぶんめいになる。さて水音
に驚いて、欄干らんかんから下を見ると、音のするのはもっともで、川の
中に大きな石がだいぶんある。そうしてその形状かっこうがいかにも不作ぶさほ
法うにでき上って、あたかも水の通り道の邪魔になるように寝た

り、突っ立ったりしている。それへ水がやけにぶつかる。しかもその水には勾配こうはいがついている。山から落ちた勢いをなし崩しくずに持ち越して、追っ懸かけられるように跳おどつて来る。だから川と云うようなもの、実は幅の広い瀑たきを月賦げつぷに引き延ばしたくらいなものである。したがって水の少ない割には大変烈はげしい。鼻はなっ端はしの強い江戸ツ子のようにむやみやたらに突っかかって来る。そうして白い泡あわを噴ふいたり、青い飴あめのようになったり、曲ったり、くねったりして下しもへ流れて行く。どうも非常にやかましい。時に日はだんだん暮れてくる。仰あおむ向いて見たが、日向ひなたはどこにも見えない。ただ日の落ちた方角がぼうっと明るくなって、その明かるい空を背し

負^よつてゐる山だけが目立^あつて蒼黒^{あおぐろ}くなつて来た。時は五月だけれども寒いもんだ。この水音だけでも夏とは思われない。まして入^{いり}日を背中から浴びて、正面は陰になつた山の色と来たら、――あ
りや全体何と云う色だろう。ただ形容するだけなら紫^{むらさき}でも黒でも
蒼^{あお}でも構^あわないんだが、あの色の氣持を書こうとすると駄目だ。
何でもあの山が、今に動き出して、自分の頭の上へ来て、どつと
圧^おつ被^{かぶ}さるんじやあるまいかと感じた。それで寒いんだろう。実
際今から一時間か二時間のうちには、自分の左右前後四方八方こ
とごとく、あの山のような氣味のわるい色になつて、自分も長蔵
さんも茨城県も、全く世界一^{いっしき}色の内に裹^{つつ}まれてしまふに違ないと

云う事を、それとはなく意識して、一二時間後に起る全体の色を、一二時間前に、入日いりひの方かたの局部の色として認めたから、局部から全体を唆そそのかされて、今にあの山の色が広がるんだなと、どっかで虫が知らせたために、山の方が動き出して頭の上へ圧つ被さるんじゃあるまいかと云う気を起したんだなと——自分は今机の前で解剖して見た。閑ひまがあるとかく余計な事がしたくなつて困る。その時はただ寒いばかりであつた。傍そばにいる茨城県の毛布けつとが羨ましくなつて来たくらいであつた。

すると橋の向うから——向むかたつて突き当りが山で、左右が林だから、人家なんぞは一軒もありやしない。——實際自分はこう突

然人家が尽きてしまおうとは、自分が自分の足で橋板を踏むまでも思いも寄らなかつたのである。——その淋さむしい山の方から、小僧が一人やって来た。年は十三四くらいで、冷飯草履ひやめしぞうりを穿はいている。顔は始めのうちはよく分らなかつたが、何しろ薄暗い林の中を、少し明るく通り抜けてる石ころ路を、たった一人してこっちへひよこひよこ歩いて来る。どこから、どうして現れたんだか分らない。木下こしたやみ闇の一本路が一二丁先で、ぐるりと廻り込んで、先が見えないから、不意に姿を出したり、隠したりするような仕掛しかけにできてるのかも知れないが、何しろ時が時、場所が場所だから、ちよつと驚いた。自分は四本目の芋いもを口へ宛あてがつたなり、顎あご

を動かす事を忘れて、この小僧をしばらくの間眺めていた。もつともしばらくと云ったって、わずか二十秒くらいなものである。芋はそれからすぐに食い始めたに違いない。

小僧の方では、自分らを見て、驚いたか驚かないか、その辺はしかと確められないが、何しろ遠慮なく近づいて来た。五六間のこつちから見ると頭の丸い、顔の丸い、鼻の丸い、いずれも丸く出来上った小僧である。品質から云うと赤毛布あかげつとよりもずっと上製である。自分らが三人並んで橋向うの小路こみちを塞ふさいでいるのを、とんと苦にならない様子で通り抜けようとする。すこぶる平気な態度であつた。すると長蔵さんが、また、

「おい、小僧さん」

と呼び留めた。小僧は臆^{おく}した気色^{けしき}もなく

「なんだ」

と答えた。ぴたりと踏み留^{とどめ}った。その度胸には自分も少々驚いた。さすがこの日暮に山から一人で降りて来るがものはある。自分などがこの小僧の年輩の頃は夜青山の墓地を抜けるのがいささか苦になったものだ。なかなかえらいと感心していると、長蔵さんは、

「芋^{いも}を食わないかね」

と云いながら、食い残しを、気前よく、二本、小僧の鼻の前^{さき}に出

した。すると小僧はたちまち二本とも引ったくるように受け取って、ありがとうとも何とも云わず、すぐその一本を食い始めた。この手っ取り早い行動を熟視した自分は、なるほど山から一人を下りてくるだけあつて自分とは少々訳が違うなと、また感心しちまった。それとも知らぬ小僧は無我無心に芋を食っている。しかも頬張った奴を、唾液も交ぜずに、むやみに呑み下すので、咽喉が、ぐいぐいと鳴るように思われた。もう少し落ちついて食う方が楽だろうと心配するにもかかわらず、当人は、傍で見るほど苦しくはないと云わんばかりにぐいぐい食う。芋だから無論堅いものじゃない。いくら鵜呑にしたって咽喉に傷のできっこはあるま

いが、その代り咽喉がいっぱいに塞^{ふせ}がって、芋が食道を通り越すまでは呼^い息^きの詰る恐れがある。それを小僧はいつこう苦にしな
い。今咽喉がぐいと動いたかと思うと、またぐいと動く。後^{あと}の芋
が、前^{さき}の芋を追っ懸^かけてぐいぐい胃の腑^ふに落ち込んで行くよう
だ。二本の芋は、随分大きな奴だったが、これがためたちまち見
る間^まに無くなってしまった。そうして、小僧はついに何らの異状
もなかった。自分ら三人は何にも云わずに、三方から、この小僧
の芋を食うところを見ていたが、三人共、食ってしまうまで、一
句も言葉を交^かわさなかった。自分は腹^{うち}の中で少しはおかしいと
思った。しかし何となく憐れだった。これは単に同情の念ばかり

ではない。自分が空腹になって、長蔵さんに芋をねだったのは、
つい、今しがたで、餓^{ひも}じい記憶は気の毒なほど近くにあるのに、
この小僧の食い方は、自分より二三層倍餓^{ひも}じそうに見えたからで
ある。そこへ持って来て、長蔵さんが、

「旨^うまかったか」

と聞いた。自分は芋へ手を出さない先からありがとうと礼を述べ
たくらいだから、食ったあとの小僧は無論何とか云うだろうと
思っていたら、小僧はあやにく何とも云わない。黙って立ってい
る。そうして暮れかかる山の方を見た。後から分ったがこの小僧
は全く野生で、まるで礼を云う事を知らないんだった。それが

分つてからはさほどにも思わなかったが、この時は何だ顔に似合
わない無愛嬌ぶあいきょうな奴やつだなと思った。しかしその丸い顔を半分傾かたむけ
て、高い山の黒ずんで行く天辺てっぺんを妙に眺ながめた時は、また可愛想かわいそうに
なつた。それからまた少し物騒になつた。なぜ物騒になつたんだ
かはちよつと疑問である。小さい小僧と、高い山と、夕暮と山の
宿しゆくとが、何か深い因縁いんねんで互に持ち合つてるのかも知れない。詩だ
の文章だのと云うものは、あんまり読んだ事がないが、おそらく
こんな因縁いんねんに勿体もったいをつけて書くもんじゃないかしら。そうすると
妙な所で詩を拾ひろつたり、文章にぶつかつたりするもんだ。自分は
この永年ながねん方々を流浪るろうしてあるいて、折々こんな因縁に出っ食わし

て我ながら変に感じた事が時々ある。――しかしそれも落ちついて考えると、大概解けるに違ない。この小僧なんかやっぱり子供の時に聞いた、山から小僧が飛んで来たが化け損ばなそくったところくらいだろう。それ以上は余計な事だから考えずに置く。何しろ小僧は妙な顔をして、黒い山の天辺てっぺんを眺めていた。すると長蔵さんがまた聞き出した。

「御前、どこへ行くかね」

小僧はたちまち黒い山から眼を離して、

「どこへも行きやあしねえ」

と答えた。顔に似合わずすこぶる無愛想ぶあいそうである。長蔵さんは平気

なもんで、

「じゃどこへ帰るかね」

と、聞き直した。小僧も平気なもんで、

「どこへも帰りやしねえ」

と云ってる。自分はこの問答を聞きながら、ますます物騒な感じがした。この小僧は宿無に違やどなしないんだが、こんなに小さい、こんなに淋しい、そうして、こんなに度胸の据すわった宿無を、今までかつて想像した事がないものだから、宿無とは知りながら、ただの宿無に附属する憐あわれとか気の毒とかの念慮よりも、物騒の方が自然勢力を得たしだいである。もつとも長蔵さんにはそんな感じは

少しも起らなかったらしい。長蔵さんは、この小僧が宿無か宿無でないかを突き留めさえすれば、それでたくさんだったんだろう。どこへも行かない、またどこへも帰らない小僧に向って、「じゃ、おいらといっしょにおいで。御金を儲もうけさしてやるから」

と云うと、小僧は考えもせず、すぐ、

「うん」

と承知した。赤毛布あかげつとと云い、小僧と云い、実に面白いように早く話が纏まとまってしまうには驚いた。人間もこのくらい簡単にできていたら、御互に世話はなкаろう。しかしそう云う自分がこの赤毛

布にもこの小僧にも遜ゆずらないもつとも世話のかからない一人で
あつたんだから妙なもんだ。自分はこの小僧の安受合やすうけあいを見て、少
からず驚くと共に、天下には自分のように右へでも左へでも誘わ
れしだい、好い加減に、ふわつきながら、流れて行くものがだい
ぶんあるんだと云う事に気がついた。東京にいるときは、目眩めまぐるしい
ほど人が動いていても、動きながら、みんな根ねが生えてるんで、
たまたま根が抜けて動き出したのは、天下広しといえども、自分
だけであろうくらいで、千住から尻はしを端折しよって歩き出した。だか
ら心細さも人一倍であつたが、この宿しゆくで、はからずも赤毛布あかげつとを手
に入れた。赤毛布を手に入れてから、二十分と立たないうちにま

たこの小僧を手に入れた。そうして二人とも自分よりは遥はるかに根が抜けている。こう続々同志が出来てくると、行く先は山だろうが、河だろうが、あまり苦にはならない。自分は幸か不幸か、中以上の家庭に生れて、昨日きのうの午後九時までは申し分のない坊ちゃんとして生活していた。煩悶はんもんも坊ちゃんとしての煩悶であつたのは勿論もちろんだが、煩悶の極試きよくみたこの駆落かけおちも、やっぱり坊ちゃんとしての駆落であつた。さればこそ、この駆落に対して、不相当にもつたいぶつた意味をつけて、ありがたがらないまでも、一生の大事件のように考えていた。生死しょうじの分れ路のように考えていた。と云うものは坊ちゃんの眼で見渡した世の中には、駆落をしたも

のは一人もない。——たまにあれば新聞にあるばかりである。ところ
ころが新聞では駆落が平面になって、一枚の紙に浮いて出るだけで、
云わばあぶり出しの駆落だから、食べたって身にはならない。あた
かも別世界から、電話がかかったようなもので、はあ、はあ、と聞
いてる分の事である。だから本当の意味で切実な駆落をするのは自
分だけだと云うありがたみがつけ加わってくる。もつとも自分は
ただ煩悶して、ただ駆落をしたまでで、詩とか美文とか云うものを、
あんまり読んだ事がないから、自分の境遇の苦しさ悲しさを一部の
小説と見立てて、それから自分でこの小説の中を縦横に飛び廻
って、大いに苦しがつたりまた大いに悲し

がったりして、そうして同時に自分の惨状を局外から自分と観察して、どうも詩的などと感心するほどなませた考えは少しもなかった。自分が自分の駆落に不相当なありがたみをつけたと云うのは、自分の不経験からして、さほど大袈裟おおげさに考えないでも済む事を、さも仰山ぎやうさんに買い被かぶって、独ひとりでどぎまぎしていた事実を指さすのである。しかるにこのどぎまぎが赤毛布に逢あい、小僧に逢あつて、両人ふたりの平然たる態度を見ると共に、いつの間にやら薄らいだのは、やっぱり経験の賜たまものである。白状すると当時の赤毛布でも当時の小僧でも、当時の自分よりよっぽど偉かったようだ。

こう手もなく赤毛布がかかる。小僧がかかる。そう云う自分

も、たわいもなく攻め落された事実を綜合そうごうして考えて見ると、なるほど長蔵さんの商売も、満更待まんぜらち草臥くたびれの骨折損になる訳でもなかった。坑夫になれますよ、はあ、なれますか、じやありませんよ。うと二つ返事で承知する馬鹿は、天下広しといえども、尻端折しりはしよりで夜逃をした自分くらいと思っていた。したがって長蔵さんのような気楽な商売は日本にたった一人あればたくさんで、しかもその一人が、まぐれ当りに自分に廻めぐり合せると云う運勢をもつて生れて来なくっちゃ、とても商売にならないはずだ。だから大川端おおかわばたで眼の下三尺の鯉こいを釣るよりもよっぽどの根気仕事だと、始めから腰を据すえてかかるのが当然なんだが、長蔵さんはほんとそんな自

覺は無用だと云わぬばかりの顔をして、これが世間もつとも普通の商売であると社会から公認されたような態度で、わるびれずに往来の男を捉つかまえる。するとその捉つかまえられた男が、不思議な事に、一も二もなく、すぐにうんと云う。何となくこれが世間もつとも普通の商売じゃあるまいかと疑念を起すように成功する。これほど成功する商売なら、日本に一人じゃとても間に合わない、幾人あつても差支さしかえないと云う気になる。——当人は無論そう思つてゐるんだろう。自分もそう思つた。

この吞のん気な長蔵さんと、さらに吞のん気な小僧に赤毛布あかげつとと、それから見様見真似みようみまねで、大いに吞のん気になりかけた自分と、都合四人で橋

向うの小路こみちを左へ切れた。これから川に沿って登りになるんだから、気をつけるが好いと云う注意を受けた。自分は今芋いもを食ったばかりだから、もう空腹じゃない。足は昨夕ゆうべから歩き続けで草臥くたびれてはいるが、あるけばまだ歩ける。そこで注意の通り、なるべく気をつけて、長蔵さんと赤毛布あこの後を跟つけて行つた。路みちがあまり広くないので四人よつたりは一行いちぎょうに並べない。だから後を跟ける事にした。小僧は小さいからこれも一足おく後れて、自分と摺々すれすれくらいになつて食つついてくる。

自分は腹が重いのと、足が重いのと両方で、口を利きくのが厭いやになつた。長蔵さんも橋を渡ってから以後とんと御前さんを使わ

なくなった。赤毛布はさつき一膳飯屋の前で談判をした時から、余り多弁ではなかったが、どう云うものかここに至ってますます無口となっちまった。小僧の無口はさらにはなはだしかった。穿はいている冷飯草履ひやめしぞうりがぴちゃぴちゃ鳴るばかりである。

こう、みんな黙ってしまうと、山路は静かなものである。ことに夜だからなお淋さびしい。夜と云ったって、まだ日が落ちたばかりだから、歩いてる道だけではどうか、こうか分る。左手を落ちて行く水が、気のせいかな、少しずつ光って見える。もっともきらきら光るんじゃない。なんだか、どす黒く動く所が光るように見えるだけだ。岩にあたって砕ける所は比較的判然はつきりと白くなっている。

そうしてその声がさあさあと絶え間なくする。なかなかやかましい。それでなかなか淋しい。

その中細い道が少しずつ、上りになるような気持がしだした。

上りだけならこのくらいの事はそう骨は折れないんだが、路が何だか凸凹する。岩の根が川の底から続いて来て、急に地面の上へ出たり、引っ込んだりするんだろう。この凸凹に下駄を突っ掛け^げる。烈^{はげ}しいときは内臓が飛び上がるようになる。だいぶ難義になつて来た。長蔵さんと赤毛布は山路に馴^なれていると見えて、よくも見えない木下闇^{こしたやみ}を、すたすた調子よくあるいて行く。これは仕方がないが、小僧が——この小僧は實際物騒である。冷飯草履

をぴしゃぴしゃ云わして、暗い凸凹を平気に飛び越して行く。しかも全く無言である。昼間ならさほどにも思わないんだが、この際だから、薄暗い中でぴしゃりぴしゃりと草履の尻の鳴るのが気になる。何だか蝙蝠こうもりといっしよに歩いてるようだ。

そのうち路がだんだん登りになる。川はいつしか遠くなる。呼吸いきが切れる。凸凹はますます烈はげしくなる。耳ががぁんと鳴って来た。これが駆落かけおちでなくって、遠足なら、よほど前から、何とか文句をならべるんだが、根が自殺しそこなの仕損しそいから起った自滅の第一着なんだから、苦しくっても、辛つらくっても、誰に難題を持ち掛ける訳にも行かない。相手は誰だと云えば、自分よりほかに誰もいや

しない。よいいたって、こだわるだけの勇氣はない。その上先方^{さき}は相手になつてくれないほど平氣である。すたすた歩いて行く。口さえ利^きかない。まるで取附端^{とつつきは}がない。やむを得ず呼吸^{いき}を切らして、耳をがぁんと鳴らして、黙^{もく}つて後^{あと}から神妙^{しんびよう}に尾^ついて行く。神妙と云う字は子供の時から覚えていたんだが、神妙の意味を悟ったのはこの時が始めてである。もっともこれが悟り始めの悟りじまいだと笑い話にもなるが、一度悟り出したら、その悟りがだいぶ長い事続いて、ついに鉾山の中で絶高頂に達してしまった。神妙の極に達すると、出るべき涙さえ遠慮して出ないようになる。涙がこぼれるほどだと譬^{たとえ}に云うが、涙が出るくらいなら安心なも

のだ。涙が出るうちは笑う事も出来るにきまつてる。

不思議な事にこれほど神妙にあてられたものが、今はけろりとして、一切神妙いっさい気を出さないのみか、人からは横着者のように思われている。その時御世話になった長蔵さんから見たら、定めし増長した野郎だと思ふ事だろう。がまた今の朋友ほうゆうから評すると、昔は気の毒だったと云ってくれるかも知れない。増長したにしても気の毒だったにしても構わない。昔は神妙で今は横着なのが天然自然の状態である。人間はこうできてるんだから致し方がない。夏になっても冬の心を忘れずに、ぶるぶるふる悸ふるえているろったって出来ない相談である。病気で熱の出た時、牛肉を食わなかった

から、もう生涯しょうがいコースの鍋なべへ箸はしを着けちやならんぞと云う命令は
どんな御大名だつて無理だ。咽喉のどもと元過ぐれば熱さを忘れると云つ
て、よく、忘れては怪けしからんように持ち掛けてくるが、あれは
忘れる方が当り前で、忘れない方が嘘うそである。こう云うと詭弁ぎべんの
ように聞えるが、詭弁でもなんでもない。正直しやうじきしやうめい正銘のところを云
うのである。いったい人間は、自分を四角張った不変ふへんたい体のように
思い込み過ぎて困るように思う。周囲の状況なんて事を眼中に置
かないで、平押ひらおしに他人ひとを圧おしつけたがる事がだいぶんある。他人
なら理窟りくつも立つが、自分で自分をきゅきゅ云う目に逢あわせて嬉うれし
がつてるのは聞えないようだ。そう一本調子にしようとする、

立体世界を逃げて、平面国へでも行かなければならない始末が出来てくる。むやみに他人の不信とか不義とか変心とかを咎めて、万事万端向うがわるいように噪ぎ立てるのは、みんな平面国に籍を置いて、活版に印刷した心を睨んで、旗を揚げる人達である。

御嬢さん、坊っちゃん、学者、世間見ず、御大名、にはこんなのが多くて、話が分り悪くって、困るもんだ。自分もあの時駆落をせずに、可愛らしい坊ちゃんとしておとなしく成人したなら、——自分の心の始終動いているのも知らずに、動かないもんだ、変らないもんだ、変っちゃ大変だ、罪悪だなどよくよ思っ、年を取ったら——ただ学問をして、月給をもらって、平和な家庭

と、尋常な友達に満足して、内省の工夫を必要と感ずるに至らなかったら、また内省ができるほどの心機轉換の活作用に見参げんざんしなかつたならば——あらゆる苦痛と、あらゆる窮迫と、あらゆる流るて転んと、あらゆる漂泊ひょうはくと、困憊こんぱいと、懊惱おうのうと、得喪とくそうと、利害とより得たこの経験と、最後にこの経験をもつとも公明に解剖して、解剖したる一々を、一々に批判し去る能力がなかつたなら——ありがたい事に自分はこの至大なる資たまものを有もっている、——すべてこれらがなかつたならば、自分はこんな思い切った事を云やしない。いくら思い切った事を云ったって自慢にやならない。ただこの通りだからこの通りだと云うまでである。その代り昔し神妙しんびょうなもの

が、今横着になるくらいだから、今の横着がいつ何時なんどきまた神妙に
ならんとは限らない。――抜けそうな足を棒のように立てて聞く
と、がんと鳴ってる耳の中へ、遠くからさあさあ水音が這入はいって
くる。自分はますます神妙になった。

この状態でだいぶ来た。何里だか見当けんとうのつかないほど来た。夜
道だから平生へいぜいよりは、ただでさえ長く思われる上へ持ってきて、
凸凹でこぼこの登りを膨ふくらつ脛はざが腫はれて、膝頭ひざかじうの骨と骨が擦すれ合って、股ももが
地面じびたへ落ちそうに歩くんだから、長い、長くないのって――そ
れでも、生きてる証拠には、どうか、こうか、長蔵さんの尻を五
六間と離れずに、やって来た。これはただ神妙に自己を没却した

諦あきらめの体ていたらくから生じた結果ではない。五六間以上後おくれると、長蔵さんが、振り返って五六歩ずつは待合してくれるから、仕方なしに追いつくと、追いつかない先に向うはまた歩き出すんで、やむを得ずだらだら、ちびちびに自己を奮興ふんこうさせた成行なりゆきに過ぎない。それにしても長蔵さんは、よく後うしろが見えたもんだ。ことに夜中やちゆうである。右も左も黒い木が空を見事に突っ切って、頭の上は細く上まで開あいているなど、仰向あおもむいた時、始めて勘かんづくくらいな暗い路である。星明りと云うけれど、あまり便たよりにやならない。提灯ちようちんなんか無論持ち合せようはずがない。自分の方から云うと、先へ行く赤毛布あかげつとが目標めあてである。夜だから赤くは見えないが、何だか赤

毛布らしく思われる。明るいうちから、あの毛布けつと、あの毛布と御おだ題目いもくのように見詰めてねらて来て、日が暮れて、突然の眼には毛布だか何だか分らないところを、自分だけにはちゃんと赤毛布に見えるんだろう。信心の功德くどくなんてえのは大方こんなところから出るに違ない。自分はこう云う訳で、どうにか目標めじるしだけはつけて置いたようなものの、長蔵さんに至っては、どのくらいあとから自分が跟ついてくるか分りようがない。ところをちゃんと五六間以上になると留とまってくれる。留とまってくれるんだか、留まる方が向うの勝手なんだか、判然しないが、とにかく留まることはたしかだった。とうてい素人しろうとにやできない芸である。自分

は苦しいうちにも、これが長蔵さんの商売に必要な芸で、長蔵さんはこの芸を長い間練習して、これまでに仕上げたんだなと、少からず感心した。赤毛布は長蔵さんと並んでいるんだから、長蔵さんさえ留まればきつととまる。長蔵さんが歩き出せば必ず歩き出す。まるで人形のように活動する男であつた。ややともすると後れ勝ちの自分よりはこの赤毛布の方が遥はるかに取り扱いやすかつたに違ない。小僧は――例の小僧は消えて無くなつちまつた。始めのうちこそ小僧だから後あとになるんだらうと思つて、草臥くたびれたら励ましてやろうくらいの了簡りようけんがあつたんだが、かの冷飯草履ひやめしぞうりをびしやりぴしやりと鳴らしながら凸凹路でこぼこを飛び跳はねて進行する有様

を目撃してから、こりや敵^{かな}わないと覚悟をしたのは、よつぽど前の事である。それでもしばらくの間はぴしゃりぴしゃりが自分の袖^{そで}と擦^すれ擦れくらいになって、登って来たが、今じゃもう自分の近所には影さえなくなった。並んで歩くうちは、あまり小僧の癖に活澆^{かつぱつ}にあるくんで——活澆だけならいいが、活澆の上に非常に沈黙^{しんもく}なんで——、随分物騒な心持ちだった。もし笑うなら、極^{きわ}めて小さくって、非常に活澆で、そうして口を利^きかない動物を想像して見ると分る。滅^め多^たにありやしない。こんな動物といっしょに夜山越^{やまごえ}をしたとすると、誰だって物騒な気持になる。自分はこの時この小僧の事を今考えても、妙な感じが出て来る。さつき蝙蝠^{こうもり}

のようだと云ったが、全く蝙蝠だ。長蔵さんと赤毛布あかげつとがいたから、好よいようなものの、蝙蝠とたった二人限ふたりぎりだったら——正直なところ降参する。

すると長蔵さんが、暗闇くらやみの中で急に、

「おおい」

と声を揚げた。淋さむしい夜道で、急に人声を聞いた人があるかないか知らないが、聞いて見るとちよつと異いな感じのするものだ。それも普通の話し声なら、まだ好いが、お・お・いと人を呼ぶ奴は気味がよくない。山路で、黒闇くらやみで、人っ子一人通らなくって、御負おまけに蝙蝠なんぞと道伴みちづれになつて、いとど物騒な虚に乗じて、長蔵さん

が事ありげに声を揚げた^あのである。事のあるべきはずでない時
で、しかも事がありかねまじき場所でおおいと来たんだから、突
然と予期が合体して、自分の頭に妙な響を与えた。この声が自分
を呼んだんなら、何か起ったなとびくんとするだけで済むんだ
が、五六間後^{うしろ}から行く自分の注意を惹^ひくためとは受取れないほど
大きかった。かつ声の伝わって行く方角が違^{ちが}う。こつちを向いた
声じゃない。おおいと右左りに当^{あた}ったが、立ち木に遮^{かき}られて、細
い道を向うの方へ遠く逃げのびて、遥^{はるか}の先でおおいと云う反響が
あつた。反響はたしかにあつたが、返事はないようだ。すると長
蔵さんは、前より一層大きな声を出して、

「小僧やあ」

と呼んだ。今考えると、名前も知らないで、小僧やあと呼ぶなんて少しとぼけているがその時はなかなかとぼけちゃいなかった。自分はこの声を聞くと同時に蝙蝠が隠れたんだなと気がついた。先へ行っただと思うのが当り前で、まかり間違っても逃げたと鑑定をつけべきはずなのに、隠れたんだとすぐ胸先へ浮んで来たのは、よっぽど蝙蝠に崇たたられていたに違ない。この崇は翌朝あしたになつて太陽が出たらすっかり消えてしまつて、自分で自分を何なんて馬鹿だろうと思つたくらいだが、実際小僧やあの呼び声を聞いた時は、ちよつと烈はげしく来た。

ところがまた反響が例のごとく向うへ延びて、突き当りがない
もんだから、人魂ひとたまの尻尾しっぽのように、幽かすかに消えて、その反動か、
有らん限りの木も山も谷もしんと静まった時、——何とも返事が
ない。この反響が心細く継続つながりながら消えて行く間、消えてか
ら、すべての世界がしんと静まり返るまで、長蔵さんと赤毛布と
自分と三人が、暗闇くらやみに鼻を突き合せて黙って立っていた。あんな
り好い心持じゃなかった。やがて、長蔵さんが、

「少し急いだら、追つつくべえ。御前さん好いかね」

と云った。無論好くはないが、仕方がないから承知をして、急ぎ
出した。元来この場に臨んで急ぐなんて生意気な事ができるはず

がないんだが、そこが妙なもので、急ぐ気も、急ぐ力もない癖に受合っちまった。定めし変な顔をして受合ったんだろうが、受合ったら急げても、急げないでもむちゃくちやに急いでしまった。この間はどこをどんな具合に通ったか、まあ断然知らないと言った方が穏当だろう。やがて長蔵さんがぴたりと留ったんで、ふと気がついた。すると一つ家の前へ出ている。ランプが点いている。ランプの灯が往来へ映っている。はっと嬉しかった。赤毛布がありあり見える。そうして小僧もいる。小僧の影が往来を横に切って向うの谷へ折れ込んでいる。小僧にしては長い影だ。

自分はこんな所に人の住む家があるうとはまるで思いがけな

かつたし、その上眼がくらんで、耳が鳴って、夢中に急いで、どこまで急ぐんだかあても希望もなくやって来て、ぴたりと留まるや否や、ランプの灯がまぶしいように眼に這入^{はい}って来たんだから、驚いた。驚くと共にランプの灯は人間らしいものだをつくづく感心した。ランプがこんなにありがたかった事は今日^{こんにち}までまだかつてない。後^{あと}から聞いたら小僧はこのランプの灯まで抜け掛^{がけ}をして、そこで自分達を待ってたんだそうだ。おおいと云う声も小僧やあと云う声も聞えたんだが返事をしなかったと云う話した。偉い奴だ。

同勢^{どうぜい}はこれでようやく揃^{そろ}ったが、この先どうなる事だろうと思

いながら、相変らず神妙しんびようにしていると、長蔵さんは自分達を路傍みちばたに置きっ放しにして、一人で家の中へ這入うちって行つた。仕方がないから家と云うが、実のところは、家じゃもったいない。牛さえいれば牛小屋で馬さえ嘶なけば馬小屋だ。何でも草鞋わらじを売る所らしい。壁と草鞋とランプのほかは何にもないから、自分はそう鑑定した。間口まぐちは一間ばかりで、入口の雨戸が半分ほど閉たてである。残る半分は夜っぴて明けて置くんじゃないかしら。ことによると、敷居みぞの溝に食い込んだなり動かないのかも知れない。屋根は無論藁わら葺ぶきで、その藁が古くなって、雨に腐ふやけたせいか、崩くずれかかって漠然ばくぜんとしている。夜と屋根の継目つぎめが分らないほど、ぶくつ

いて見える。その中へ長蔵さんは這入って行った。なんだか穴の中へでも潜り込んで行ったような心持だった。そうして話している。三人は表に待っている。自分の顔は見えないが、赤毛布と小僧の顔は、小屋の中から斜に差ししてくるランプの灯でよく見える。赤毛布は依然として、散漫なものである。この男はたとい地震がゆって、梁が落ちて来ても、親の死目に逢うか、逢わないかと云う大事な場合でも、いつでも、こんな顔をしているに違ない。小僧は空を見ている。まだ物騒だ。

ところへ長蔵さんがあらわれた。しかし往来へは出て来ない。敷居の上へ足を乗せて、こっちを向いて立った股倉から、ランプ

の灯だけが細長く出て来る。ランプの位置がいつの間にか低く
なつたと見える。長蔵さんの顔は無論よく分らない。

「御前さん、これから山越をするのは大変だから、今夜はここへ
泊^{とま}って行こう。みんな這入るがいい」

自分はこの言葉を聞くと等しく、今までの神妙^{しんびよう}が急に破裂し
て、身体^{からだ}がぐたりとなつた。この牛小屋で一夜を明^{あか}す事が、それ
ほどの慰藉^{いしや}を自分に与えようとは、牛小屋を見た今が今まで、と
んと気がつかなかった。やはり神妙の結果泊る所が見つかつて
も、泊る気が起らなかったんだろう。こうなると人間ほど御^ごしや
すいものはない。無理でも何でもはいはい畏^{かしこ}まって聞いて、そう

して少しも不平を起さないのみか大に嬉しがる。当時を思い出すたびに、自分はもつとも順良なまたもつとも励精な人間であつたなと云う自信が伴つてくる。兵隊はああでなくっちゃいけないなどと考える事さえある。同時に、もし人間が物の用を無視し得るならば、かねて物の用をも忘れ得るものだと言ふ事も悟つた。――こう書いて見たが、読み直すと何だかむずかしくつて解らない。実を云うと、もつとずっとやさしいんだが、短く詰めるものだからこんなにむずかしくなつちまつた。例えば酒を飲む権利はないと自信して、酒の徳を、あれどもなきがごとくに見做す事さえできれば、徳利が前に並んでも、酒は飲むものだと言ふ気がつ

かずにいるくらいなところである。御互が泥棒にならずに済むのも、つまりを云えば幼少の時から、人工的にこの種の境界きょうがいに馴ならされているからの事だろう。が一方から云うと、こんな境界は人性の一部分を麻痺まひさせた結果としてでき上るもんだから、図に乗ってきゅきゅ押して行くと、人間がみんな馬鹿になっちまう。まあ泥棒さえしなければ好いとして、その他の精神器械は残らず相応に働く事ができるようにしてやるのが何よりの功德くどくだと愚考する。自分が当時の自分のままで、のべつに今日こんにちまで生きていたならば、いかに順良だって、いかに励精だって、馬鹿に違ない。だれの眼から見たって馬鹿以上の不具かたわだろう。人間であるから

は、たまには怒るおこがいい。反抗するがいい。怒るように、反抗する
ようにできてるものを、無理に怒らなかつたり、反抗しなかつ
たりするのは、自分で自分を馬鹿に教育して嬉しがるんだ。第一
身体からだの毒である。それを迷惑だと云うなら、怒らせないように、
反抗させないように、御膳立おぜんだてをするが至当じゃないか。

自分は当時種々の状況で、万事長蔵さんの云う通りはいはい
云っていたし、またそのはいはいを自然と思ひもするが、その代
り、今のような身分にいるからは、たとい百の長蔵さんが、七日なぬかな
七晩なばん引っ張りつづけに引っ張ったってちよつとも動きやしない。
今の自分にはこの方が自然だからである。そうしてこう変るのが

人間たるところだと思ってる。分りやすいように長蔵さんを引合ひきあいに出したが、よく調べて見ると、人間の性格は一時間ごとに変っている。変るのが当然で、変るうちには矛盾が出て来るはずだから、つまり人間の性格には矛盾が多いと云う意味になる。矛盾だらけのしまいは、性格があってもなくっても同じ事に帰着する。嘘うそだと思うなら、試験して見るがいい。他人ひとを試験するなんて罪な事をしないで、まず吾身わがみで吾身を試験して見るがいい。坑夫にまで零落おちぶれないでも分る事だ。神さまなんか聞いて見たって、以上分わッこない。この理窟りくつがわかる神さまは自分の腹のなかにいるばかりだ。などと、学問もない癖に、学者めいた事を云っては

済まない。こんな景気のいいタンカを切る所存は毛頭なかったんだが、実を云うとこう云う仔細である。自分はよく人から、君は矛盾の多い男で困る困ると苦情を持ち込まれた事がある。苦情を持ち込まれるたびに苦い顔をして謝罪^{あやま}っていた。自分ながら、どうも困ったもんだ、これじゃ普通の人間として通用しかねる、何とかして改良しなくっちゃ信用を落して路頭に迷うような仕儀になると、ひそかに心配していたが、いろいろの境遇に身を置いて、前に述べた通りの試験をして見ると、改良も何も入ったものじゃない。これが自分の本色なんで、人間らしいところはほかにありやしない。それから人も試験して見た。ところがやっぱり自

分と同じようにできている。苦情を持ち込んでくるものが、みんな苦情を持ち込まれてしかるべき人間なんだからおかしくなる。要するに御腹おなかが減って飯が食いたくなつて、御腹が張ると眠くなつて、窮きゆうして濫らんして、達おこなして道を行つて、惚ほれていつしよになつて、愛想あいそが尽きて夫婦別れをするまでの事だから、ことごとく臨機応変の沙汰さたである。人間の特色はこれよりほかにありやしない。と、こう感服しているんだから、ちよつと言つて見たまでである。しかし世の中には学者だの坊主だの教育家だのと云うむずかしい仲間がだいぶいて、それぞれ専門に研究している事だから、自分だけ、訳の分つたように并じ立てては善くない。

そこで元氣のいい今の気焰きえんをやめて、再びもとの神妙しんびような態度に復して、山の中の話をする。長蔵さんが敷居の上に立って、往來を向きながら、ここへ泊って行こうと云い出した時、こんな破屋あばらやでも泊る事が出来るんだったと、始めて意識したよりも、すべての家と云うものが元來がんらい泊るために建ててあるんだなと、ようやく気がついたくらい、泊る事は予期していなかった。それでいて身からだ体は蒟蒻こんやくのように疲れ切ってる。平生いっしょなら泊りたい、泊りたいですべての内臓が張切はちきれそうになるはずなのに、没自我ぼつじがの坑夫行こうふぎ、すなわち自滅の前座としての墮落と諦めあきらめをつけた上の疲労だから、いくら身体に泊る必要があっても、身体の方から魂へ宛てて

宿泊の件を請求していなかった。ところへ泊ると命令が天から逆に魂が下ったんで、魂はちよつとまごついたかたちで、とりあえず手足に報告すると、手足の方では非常に嬉しかったから、魂もなるほどありがたいと、始めて長蔵さんの好意を感謝した。と云う訳になる。何となく落語じみてふざけているが、実際この時の心の状態は、こう譬^{たとえ}を借りて来ないと説明ができない。

自分は長蔵さんの言葉を聞くや否や、急に神経が弛^{ゆる}んで、立ち切れない足を引^ひき摺^ずって、第一番に戸口の方に近寄った。赤毛布^{あかげつと}はのそのそ這^{はい}入^いってくる。小僧は飛んで来た。飛んだんじやあるまいが、草履^{ぞうり}の尻^{しり}が勢よく踵^{かかと}へあたるんで、ぴしゃぴしゃ云う音

が飛ぶように思われた。

這入って見るとぷんと臭におった。何の臭だかさらに分らない。小僧が鼻をぴくつかせたので、小僧もこの臭に感じたなと気がついた。長蔵さんと赤毛布はまるで無頓着むとんじやくであつた。土間から上へあがる段になつて、雑巾ぞうきんでもと思つたが、小僧は委細構わず、草履を脱いで上がった。小僧の草履は尻が無いんだから、半分裸足はだしである。ひどい奴だと眺ながめていると、長蔵さんが、

「御前さんも下駄だから、御上り」

と注意した。それで気味がわるいが、ほこりも払わず上がった。畳の上へ一足掛けて見るとぶくつとした。小僧はその上へころり

と転がっている。自分は尻だけおろして、障子——障子は二枚あつた——その障子の影へ胡坐あぐらをかいた。この障子は入口に立ててあるから、振り向くと、長蔵さんと赤毛布あかげつとが草鞋わらじを脱いでいる。二人共腰から手拭てぬぐいを出して、ばたばた足をはたいている。そうして、すぐ上がって来た。足を洗うのが面倒だと見える。ところへ主人が次の間まから茶と煙草盆たばこぼんを持って来た。

主人だの、次の間だの、茶だの、煙草盆だの、と云うとすこぶ尋常じんじょうに聞えるが、その実名ばかりで、一々説明すると、大変な誤解ごかいをしていたんだねと呆あきれ返かえるものばかりである。がとにかく主人が次の間から、茶と煙草盆を持って来たには違いない。そう

して長蔵さんと談話をし始めた。談話の筋は忘れたが、その様子から察すると、二人はもとからの知合で、御互の間には貸や借があるらしい。何でも馬の事をしきりに云ってた。自分だの、赤毛布だの、小僧などの事はまるで聞きもしない。まるで眼中にない訳でもあるまいが、さつき長蔵さんが一人で談判に這入った時に、残らず聞いてしまったんだろう。それとも長蔵さんはたびたびこんな呑気屋を銅山へ連れて行くんで、自然その行き還りにはこの主人の厄介になりつけてるから、別段気にも留めないのかも知れない。

自分は、長蔵さんと主人との話を聞きながら、居眠を始めた。

いつから始めたか知らない。馬を売損^{うりそこな}つて、どうかしたと云うところから、だんだん判然^{はつきり}しなくなつて、自然^{じねん}と長蔵さんが消える。赤毛布が消える。小僧が消える。主人と茶と煙草盆が消えて、破屋^{あばらや}までも消えた時、こくりと眠^{ねむり}が覚^さめた。気がつくとも頭が胸の上へ落ちてゐる。はつと思つて、擡^{もちや}げるとはなはだ重い。主人はやっぱり馬の話をしている。まだ馬かと思つてゐるうちに、また気が遠くなつた。気が遠くなつたのを、遠いままにして打遣^{うちぢや}つて置くと、忽然^{こつぜん}ぱつと眼があいた。薄暗い部屋の中に、影のような長蔵さんと亭主が膝^{ひざ}を突き合せてゐる。ちようど、借^{かり}がどうかしてハハハハと亭主が笑つたところだった。この亭主は額^{ひたい}が長

くつて、斜^{はす}に頭^{てっぺん}の天辺^{ひっこ}まで引込んでるから、横から見ると切通^{きりどお}しの坂^{さか}くらいな勾配^{こうはい}がある。そうして上になればなるほど毛^はが生^はえている。その毛は五分^{ごぶ}くらいなのと一寸^{いっすん}くらいなのとが交^{まじ}って、不規則^{ふきそく}にしかも疎^{まばう}にもじゃもじゃしている。自分が居眠^{いねぶ}りからはっと驚^{おどろ}いて、急に眼を開けると、第一にこの頭^{ひとみ}が眸^{ひとみ}の底に映った。ランプが煤^{すす}だらけで暗いものだから、この頭も煤だらけになつて映つて来た。その癖距離は近い。だから映った影は明瞭^{めいりょう}である。自分はこの明瞭でかつ朦朧^{もうろう}なる亭主の頭を居眠りの不知覺から我に返る咄嗟^{とっさ}にふと見たのである。この時はあまり好い心持ではなかった。それがため、居眠りもしばらく見合せるような気

になって、部屋中を見廻すと、向うの隅に小僧が倒れている。こちらの横に茨城県が長く伸びている。毛布けつとの下から大きな足が見える。突当りが壁で、壁の隅に穴が開あいて、穴の奥が真黒である。上は一面の屋根裏で、寒いほど黒くなってる所へ、油煙とともにランプの灯ひがあたるから、よく見ていると、藁わら葺ぶきの裏側が震ふるえるように思われた。

それからまた眠くなった。また頭が落ちる。重いから上げるとまた落ちる。始めのうちは、上げた頭が落ちながらだんだんうっとりして、うっとり極、胸の上へがくりと落ちるや否や、一足いっそく飛とに正気へ立ち戻とったが、三回四回と重なるにつけて、眼だけ開あ

けても気は判然はつきりしない。ぼんやりと世界に帰って、またぞろすぐと不覚に陥おちいちまう。それから例のごとく首が落ちる。微かすかに生きてるような気になる。かと思うとまた一切空いっさいくうに這入る。しまいには、とうとう、いくら首がのめって来ても、動じなくなつた。あるいはのめつたなり、頭の重みで横にぶつ倒れちまったのかも知れない。とにかく安々と夜明まで寝て、眼が覚さめた時は、もう居いね眠りはしていなかった。通例のごとく身体全体を畳の上につけて長くなっていた。そうして涎よだれを垂れている。——自分は馬の話を聞いて居眠りを始めて、眼をあけて借金話を聞いて、また居眠りの続を復習しているうちに、とうとう居眠りを本式に崩して長

なくなつたぎり、魂の音沙汰おとさたを聞かなかつたんだから、眼が覚めて、夜が明けて、世の中が土台から陰と陽に引ッ繰り返ってるのを見るや否いなや、眼をあいて涎よだれを垂れて、横になつたまま、じっとしていた。自覚があつて死んでたらこんだろう。生きてるけれども動く気にならなかつた。昨夜ゆうべの事は一から十までよく覚えてる。しかし昨夜の一から十までが自然と延びて今日まで持ち越したとは受け取れない。自分の経験はすべてが新しくって、かつ痛切であるが、その新しい痛切の事々物々が何だか遠方にある。遠方にあると云うよりも、昨夜と今日の間に厚い仕切りが出来て、截然せつぜんと区別がついたようだ。太陽が出ると引き込むだけの差

で、こう心に連続がなくなつては不思議なくらい自分で自分が当^{あて}にならなくなる。要するに人世は夢のようなもんだ。とちよつと考えたもんだから、涎も拭かずに沈んでいると、長蔵さんが、うん^{のび}と伸をして、寝たまま握^{にぎ}り拳^{こぶし}を耳の上まで持ち上げた。握り拳がぬつと真直に畳の上を擦^{こす}つて、腕のありたけ出たところで、勢^{せい}がゆるんで、ぐにやりとした。また寝るかと思つたら、今度は右の手を下へさげて、凹^{くぼ}んだ頬^ほつぺたをぼりぼり搔^かき出した。起きてるのかも知れない。そのうち、むにやむにや何か云うんで、やっぱり眼が覚めていないなと気がついた時、小僧がむくりと飛び起きた。これは真正の意味において飛起きたんだから、どしん

と音がして、根太^{ねだ}が抜けそうに響いた。すると、さすが長蔵さんだけあって、むにゃむにゃをやめて、すぐ畳についた方の肩を、肘^{ひじ}の高さまで上げた。眼をぱちつかせている。

こうなると、自分もいつまで沈んでいたって際限がないから、起き上った。長蔵さんも全く起きた。小僧は立ち上がった。寝ているものは赤毛布^{あかげつと}ばかりである。これはまた呑気^{のんき}なもんで、依然として毛布^{けつと}から大きな足を出してぐうぐう鼾^{いびき}声をかいて寝ている。それを長蔵さんが起す。――

「御前^{おまえ}さん。おい御前^{おまえ}さん。もう起きないと御午^{おひる}までに銅山^{やま}へ行きつけないよ」

御前さんが三四返繰返されたが、毛布はよく寝ている。仕方がないから長蔵さんは毛布の肩へ手を懸けて、

「おい、おい」

と揺り始めたんで、やむを得ず、毛布の方でも「おい」と同じような返事をして、中途半端に立ち上った。これでみんな起きたよ
うなもの、自分は顔も洗わず、飯も食わず、どうして好いか
迷つてると、長蔵さんが、

「じゃ、そろそろ出掛けよう」

と云って、真先に土間へ降りかけたには驚いた。小僧がつづいて
降りる。毛布も不得要領に土間へ大きな足をぶら下げた。こうな

ると自分も何とか片をつけなくっちゃならないから、一番あとから下駄を突掛^{つつか}けて、長蔵さんと赤毛布^{あかげつと}が草鞋^{わらじ}の紐^{ひも}を結ぶのを、不景気な懷手^{ふかいみで}をして待っていた。

土間へ下りた以上は、顔を洗わないのかの、朝飯^{あさめし}を食わないのかのと、当然の事を聞くのが、さも贅沢^{ぜいたく}の沙汰^{さた}のように思われて、とんと質問して見る気にならない。習慣の結果、必要とまで見倣^{みなな}されているものが、急に余計な事になっちまうのはおかしいようだが、その後^{のち}この顛倒事件^{てんとう}を布衍^{ふえん}して考えて見たら、こんな、例はたくさんある。つまり世の中では大勢のやってる事が当然になって、一人だけでやる事が余計のように思われるんだか

ら、当然になろうと思ったたら味方を大勢拵えて、さも当然であるかの容子ようすで不当な事をやるに限る。やっては見ないがきつと成功するだろう。相手が長蔵さんと赤毛布でさえ自分にはこれほどの変化を来たしたんでも分る。

すると長蔵さんは草鞋の紐を結んで、足元に用がなくなつたものだから、ふいと顔を上げた。そうして自分を見た。そうして、こんな事を云う。

「御前さん、飯は食わなくつても好いだらうね」

飯を食わなくつて好い法はないが、わるいと云つたつて、始まりようがないから、自分はただ、

「好いです」

と答えて置いた。すると長蔵さんは、

「食いたいかね」

と云つて、にやにやと笑つた。これは自分の顔に飯が食いたいよ
うな根性こんじやうが幾分かあらわれたためか、または十九年来の予期に反
した起きたなり飯抜きしゅったつの出立に、自然不平の色が出ていたためだ
ろう。それでなければ草鞋の紐を結んでしまつてから、こんな事
を聞く訳がない。現に長蔵さんは、赤毛布にも小僧にもこの質問
を呈出しなかつたんでも分る。今考えると、ちよつと兩人ふたりにも同
じ事を聞いて見れば善かつたような氣もする。朝飯を食わないで

五里十里と歩き出すものは宿無^{やどな}しか、または準宿無しでなくつちやならない。目が醒^さめて、夜が明けてるのに、汁の煙^{けむ}も、漬物の香^{におい}も、いっこう連想に乗って来ないからは、行きなり放題に、今日は今日の命を取り留めて、その日その日の魂の供養^{くよう}をする呑^の氣屋^{んきや}で、世の中にあしたと云うものがないのを当り前と考えるほどに不幸なまた幸^{さいわい}な人間である。自分は十九年来始めて、こう云う人間と一つ所^{ところ}に泊^とって、これからまたいっしょに歩き出すんだなと思った。赤毛布と小僧の顔色を伺って見ると少しも朝飯を預期している様子がないんで、双方共朝飯を食い慣^っけていない一種の人類だと勘づいて見ると、自分の運命は坑夫にならない先か

ら、もう、坑夫以下に摺^ずり落ちていたと云う事が分った。しかし分ったと云うばかりで別に悲しくもなかった。涙は無論出なかった。ただ長蔵さんが、この朝飯の経験に乏^{とほ}しい人間に向って、「御前さん達も飯が食いたいかね」と尋ねてくれなかったのを、今では残念に思ってる。食った事が少いから、今までの習慣性で、「食わないでも好い」と答えるか、それとも、たまさかに有りつけるかも知れないと云う意外の望に奨^{しょう}励^{れい}されて「食いたい」と答えるか。——つまり事だがどっちか聞いて見たい。

長蔵さんは土間へ立って、ちよつと後^{うし}ろを振り返ったが、

「熊^{くま}さん、じゃ行^くってくる。いろいろ御世話様」

と軽く力足ちからあしを二三度踏んだ。熊さんは無論亭主の名であるが、まだ奥で寝ている。覗のぞいて見ると、昨夕ゆうべうつつに気味をわるくした、もじやもじやの頭が布団ふとんの下から出ている。この亭主は敷蒲しきぶ団とんを上へ掛けて寝る流儀と見える。長蔵さんが、このもじやもじやの頭に話しかけると、頭は、むくりと畳を離れた。そうして熊さんの顔が出た。この顔は昨夜ゆうべ見たほど妙でもなかった。しかし額がさかに瘡こけて、脳天まで長くなってる事は、今朝でも争われない。熊さんは床の中から、

「いや、何にも御構おかまい申さなかった」

と云った。なるほど何にも構わない。自分だけ布団をかけてい

る。

「寒かなかったかね」

とも云った。気楽なもんだ。長蔵さんは

「いいえ。なあに」

と受けて、土間から片足踏み出した時、後うしろから、熊さんが欠伸あくび交まじりに、

「じゃ、また歸りに御寄り」

と云った。

それから長蔵さんが往来へ出る。自分も一足後おくれて、小僧と赤あか毛布げつとの尻を追おつ懸かけて出た。みんな大急ぎに急ぐ。こう云う道中

には慣^なれ切ったものばかりと見える。何でも長蔵さんの云うところによると、これから山越をするんだが、午^{ひる}までには銅^{やま}山へ着かなくっちゃならないから急ぐんだそうだ。なぜ午までに着かなくっちゃならないんだか、訳が分らないが、聞いて見る勇気がなかったから、黙って食つついて行^いった。するとなるほど登^{のぼ}りになった。昨夕あれほど登ったつもりなのに、まだ登るんだから嘘^{うそ}のようでもあるが実際見渡して見ると四方^{しほう}は山ばかりだ。山の中に山があつて、その山の中にまた山があるんだから馬鹿馬鹿しいほど奥へ這^{はい}入る訳になる。この模様では銅^{どうざん}山のある所は、定めし淋しいだろう。呼^い息^きを急^せいで登りながらも心細かった。ここまで

来る以上は、都へ帰るのは大変だと思つと、何の酔興すいきようで来たんだか浅間あさましくなる。と云つて都におりたくないから出奔しゅつぽんしたんだから、おいそれと歸りにくい所へ這入つて、親親類おやしんるいの目に懸かからなように、朽果くちはててしまふのはむしろ本望である。自分は高い坂へ来ると、呼息を継つぎながら、ちよつと留つては四方の山を見廻した。するとその山がどれもこれも、黒ずんで、凄すこいほど木を被かぶつている上に、雲がかかつて見る間まに、遠くなつてしまふ。遠くなると云うより、薄くなると云う方が適當かも知れない。薄くなつた揚句あげくは、しだいしだいに、深い奥へ引き込んで、今までは影のように映つてたものが、影さえ見せなくなる。そうかと思つ

と、雲の方で山の鼻面はなづらを通り越して動いて行く。しきりに白いものが、捲まき返しているうちに、薄く山の影が出てくる。その影の端がだんだん濃くなって、木の色が明かになる頃は先刻さつきの雲がもう隣りの峰へ流れている。するとまた後あとからすぐに別の雲が来て、せつかく見え出した山の色をぼうとさせる。しまいには、どこにどんな山があるかいつこう見当けんとうがつかなくなる。立ちながら眺ながめると、木も山も谷もめっちゃめっちゃになって浮き出して来る。頭の上の空さえ、際限もない高い所から手の届く辺あたりまで落ちかかった。長蔵さんは、

「こりゃ、雨だね」

と、歩きながら独言ひとりごとを云った。誰も答えたものはない。四人よつたりとも雲の中を、雲に吹かれるような、取り捲まかれるような、また埋めうずられるような有様で登って行った。自分にはこの雲が非常に嬉しかった。この雲のお蔭かげで自分は世の中から隠したい身体からだを十分に隠すことが出来た。そうして、さのみ苦しい思いもせずにその中を歩いて行ける。手足は自由に働いて、閉じ籠めこられたような窮屈も覚えない上に、人目にかからん徳は十分ある。生きながら葬ほうぶられると云うのは全くこの事である。それが、その時の自分には唯一の理想であつた。だからこの雲は全くありがたい。ありがたいという感謝の念よりも、雲に埋められ出してから、まあ安心だ

と、ほっと一息した。今考えると何が安心だか分りやしない。全
くの気違だと云われても仕方がない。仕方がないが、こう云う自
分が、時と場合によれば、翌^{あす}が日にも、また雲が恋しくならんと
も限らない。それを思うと何だか変だ。吾^わが身^みで吾が身が保証出
来ないような、また吾が身が吾が身でないような氣持がする。

しかしこの時の雲は全く嬉しかった。四人が離れたり、かた
まったり、隔^{へだ}てられたり、包まれたりして雲の中を歩いて行つた
時の景色はいまだに忘れられない。小僧が雲から出たり這入つた
りする。茨城の毛布^{けつと}が赤くなったり白くなったりする。長蔵さん
の、どて^らが、わずか五六間の距離で濃くなったり薄くなったり

する。そうして誰も口を利^きかない。そうして、むやみに急ぐ。世界から切り離された四つの影が、後^{あと}になり先になり、殖^{ふえ}もせず減^へもせず、四つのまま、引かれて合うように、弾^{はじ}かれて離れるように、またどうしても四つでなくてはならないように、雲の中をひたすら歩いた時の景色はいまだに忘れられない。

自分は雲に埋まっている。残る三人も埋まっている。天下が雲になったんだから、世の中は自分共にたった四人である。そうしてその三人が三人ながら、宿^{やど}無である。顔も洗わず朝飯も食わずに、雲の中を迷って歩く連中である。この連中と道伴^{みちづれ}になって登り一里、降^{くだ}り二里を足の続く限り雲に吹かれて来たら、雨になっ

た。時計がないんで何時なんじだか分らない。空模様で判断すると、朝とも云われるし、午過ひるすぎとも云われるし、また夕方と云っても差支さしつかえない。自分の精神と同じように世界もぼんやりしているが、ただちよつと眼についたのは、雨の間から微かすかに見える山の色であった。その色が今までのとは打って変っている。いつの間にか木が抜けて、空坊主からぼうずになったり、ところ斑まだらの禿頭はげあたまと化けちまったんで、丹砂たんしゃのように赤く見える。今までの雲で自分と世間を一筆ひとふでに抹殺まつさつして、ここまでふらつきながら、手足だけを急がして来たばかりだから、この赤い山がふと眼に入るや否や、自分ははつと雲から醒さめた気分になった。色彩の刺激が、自分にこう強く応こたえよ

うとは思いがけなかった。——実を云うと自分は色盲じゃないか
と思うくらい、色には無頓着むとんじやくな性質たちである。——そこでこの赤い
山が、比較的烈しく自分の視神経を冒おかすと同時に、自分はいよいよ
銅山に近づいたなと思った。虫が知らせたと云えば、虫が知ら
せたとも云えるが、実はこの山の色を見て、すぐ銅あかがねを連想したん
だろう。とにかく、自分がいよいよ到着したなと直覺的に——世
の中で直覺的と云うのは大概このくらいなものだと思うが——い
わゆる直覺的に事実を感得した時に、長蔵さんが、

「やっと、着いた」

と自分が言いたいような事を云った。それから十五分ほどしたら

町へ出た。山の中の山を越えて、雲の中の雲を通り抜けて、突然新しい町へ出たんだから、眼を擦こすって視覚をたしかめたいくらい驚いた。それも昔の宿しゆくとか里とか云う旧幕時代に縁のあるような町なら、まだしもだが、新しい銀行があつたり、新しい郵便局があつたり、新しい料理屋があつたり、すべてが苔こけの生えない、新しづくめの上に、白粉おしろいをつけた新しい女いづままでいるんだから、全く夢のような気持で、不審が顔に出る暇いひまもないうちに通り越しちまった。すると橋へ出た。長蔵さんは橋の上へ立って、ちよつと水の色を見たが、

「これが入口だよ。いよいよ着いたんだから、そのつもりでいな

くっっちゃ、いけない」

と注意を与えた。しかし自分には、どんなつもりでいなくっっちゃいけないんだか、ちっとも分らなかったから、黙って橋の上へ立って、入口から奥の方を見ていた。左が山である。右も山である。そうして、所々に家が^{うち}見える。やっぱり木造の色が新しい。

中には白壁だか、ペンキ塗だか分らないのがある。これも新しい。古ぼけて禿^はげてるのは山ばかりだった。何だかまた現実世界に引き摺^ひり込まれるような気がして、少しく失望した。長蔵さんは自分が黙って橋の向^{むこう}を覗^{のぞ}き込んでるのを見て、

「好いかね、御前さん、大丈夫かい」

とまた聞き直したから、自分は、

「好いです」

と明瞭^{めいりょう}に答えたが、内心あまり好くはなかった。なぜだかしらないが、長蔵さんはただ自分にだけ懸念^{けんねん}がある様子であつた。赤毛^{あかげ}布^{つと}と小僧には「好いかね」とも「大丈夫かい」とも聞かなかつた。頭からこの兩人^{ふたり}は過去の因果^{いんが}で、坑夫になつて、銅山のうちに天命を終るべきものと認定しているような気色^{けしき}がありありと見えた。して見ると不信用なのは自分だけで、だいぶ長蔵さんからこいつは危ない^{あぶ}なと睨^{にら}まれていたのかも知れない。好い面^{つら}の皮だ。

それから四人揃そろって、橋を渡って行くと、右手に見える家にはなかなか立派なのがある。その中うちで一番いかめしい奴やつを指さして、あれが所長の家だうちと長蔵さんが教えてくれた。ついでに左の方を見ながら

「こっちがシ・キだよ、御前さん、好いかね」

と云う。自分はシ・キと云う言葉をこの時始めて聞いた。

よっぽど聞き返そうかと思ったが、大方これがシ・キなんだろうと思って黙っていた。あとから自分もこのシ・キと云う言葉を明瞭めいりょうに理解しなければならぬ身分になったが、やっぱり始めにぼんやり考えついた定義とさした違もなかった。そのうち左へ折れて

いよいよシキの方へ這入る事になった。鉄軌レールについてだんだん上のぼって行くと、そこに粗末な小さい家がたくさんある。これは坑夫の住んでる所だと聞いて、自分も今日から、こんな所で暮すのかと思ったが、それは間違であつた。この小屋はどれも六畳と三畳二間ふたまで、みんな坑夫の住んでる所には違ないが、家族のあるものに限って貸してくれる規定であるから、自分のような一人ものは這入りたくたって這入れないんだつた。こう云う小屋の間を縫あって、飽あきずに上のぼって行くと、今度は石崖いしがけの下に細長い横幅ばかりの長屋が見える。そうして、その長屋がたくさんある。始めはわずか二三軒かと思つたら、登るに従つて続々あらわれて来

た。大きさも長さも似たもので、みんな崖下がけしたにあるんだから位地にも変りはないが、向むだけは各々めいめい違ってる。山坂を利用して、けなしの地面へ建てることだから、東だとか西だとか贅沢ぜいたくは言っ
ていられない。やっとの思いで、ならした地面へ否応いやおうなしに、方角のお構かまなく建ててしまったんだから不規則なものだ。それに、
第一、登って行く道がくねってる。あの長屋の右を歩いてるなと
思うと、いつの間にかその長屋の前へ出て来る。あれは、すぐ頭
の上だがと心待ちに待っていると、急に路が外それて遠くへ持って
かれてしまう。まるで見当けんとうがつかない。その上この細長い家から
顔が出ている。家から顔が出ているのが珍しい事もないんだ

が、その顔がただの顔じゃない。どれも、これも、出来ていない上に、色が悪い。その悪さ加減がまた、尋常でない。青くって、黒くって、しかも茶色で、とうてい都会にいては想像のつかない色だから困る。病院の患者などとはまるで比較にならない。自分が山路を登りながら、始めてこの顔を見た時は、シ・キ・と云う意味をよく了解しない癖に、なるほどシ・キ・だなと感じた。しかしくらし・キ・でも、こう云う顔はたくさんあるまいと思って、登って行くと、長屋を通るたんびに顔が出ていて、その顔がみんな同じである。しまいにはシ・キ・とは恐ろしい所だと思うまで、いやな顔をたくさん見せられて、また自分の顔をたくさん見られて——長屋

から出ている顔はきつと自分らを見ていた。一種寧惡^{どうあく}な眼つきで見ていた。——とうとう午後の一時に飯場^{はんば}へ着いた。

なぜ飯場と云うんだか分らない。焚^たき出しをするから、そう云う名をつけたものかも知れない。自分はその後飯場^ごの意味をある坑夫に尋ねて、篋棒^{べうぼう}め、飯場たあ飯場でえ、何を云ってるんだ、え、とひどく剣突^{けんつく}を食^{くら}った事がある。すべてこの社会に通用する術語は、シキでも飯場でもジャンボーでも、みんな偶然に成立して、偶然に通用しているんだから、滅多^{めった}に意味なんか聞くと、すぐ怒られる。意味なんか聞く閑^{ひま}もなし、答える閑もなし、調べるのは大馬鹿となってるんだから至極^{しごく}簡単でかつ全く實際的なもの

である。

そう云う訳で飯場はんばの意味は今もって分らないが、とにかく崖がけの下に散在している長屋を指さすものと思えばいい。その長屋へようやく到着した。多くある長屋のうちで、なぜこの飯場を選んだかは、長蔵さんの一人ひとりぎめだから、自分には説明しにくい。が、この飯場は長蔵さんの専門御得意の取引先と云う訳でもなかったらしい。長蔵さんは自分をこの飯場へ押しつけるや否や、いつの間にか、赤毛布あかげつとと小僧を連れてほかの飯場へ出て行ってしまった。それで二人はほかの飯場の飯めしを食うようになったんだと後あとから気がついた。二人の消息はその後のちいっこう聞かなかった。銅山やまの

なかでもついぞ顔を合せた事がない。考えると、妙なものだ。一膳めし屋から突然飛び出した赤い毛布けつとと、夕方の山から降くだって来た小僧と落ち合って、夏の夜よを後になり先になって、崩くずれそうなた藁屋根わらやねの下でいっしょに寝た明日あくるひは、雲の中を半日かかって、目指す飯場へようやく着いたと思うと、赤毛布も小僧もふいと消えてなくなっちまう。これでは小説にならない。しかし世の中には纏まとまりそうで、纏まとらない、云わばでき損そこないの小説めいた事がだいぶある。長い年月を隔へだてて振り返って見ると、かえってこのだらしなく尾おしを蒼穹そうきゆうの奥に隠してしまった経歴の方が興味の多いように思われる。振り返って思い出すほどの過去は、みんな夢で、そ

の夢らしいところに追懷の趣おもむきがあるんだから、過去の事実それ自身にどこかぼんやりした、曖昧あいまいな点がないとこの夢幻の趣を助ける事が出来ない。したがって十分に発展して来て因果いんがの予期を満足させる事柄よりも、この赤毛布流に、頭も尻も秘密うちの中に流れ込んでただ途中だけが眼の前に浮んでくる一夜半日いちやはんにちの画えの方が面白い。小説になりそうで、まるで小説にならないところが、世間臭くなくって好い心持だ。ただに赤毛布ばかりじゃない。小僧もそうである。長蔵さんもそうである。松原の茶店の神かみさんもそうである。もっと大きく云えばこの一篇の「坑夫」そのものがやはりそうである。纏まりのつかない事実を事実のままに記しるすだけで

ある。小説のように拵こしらえたものじゃないから、小説のように面白くはない。その代り小説よりも神秘的である。すべて運命が脚色した自然の事実は、人間の構想で作り上げた小説よりも無法則である。だから神秘である。と自分は常に思っている。

赤毛布と小僧が連れて行かれたのは後の事だが、自分らが飯場に到着した時は無論二人ともいっしょであつた。ここで長蔵さんがいよいよ坑夫志願の談判を始めた。談判と云うと面倒なようだが、その実極きわめて簡単なものであつた。ただ、この男は坑夫になりたいと云うから、どうか使ってくれと云ったばかりである。自分の姓名も出生地しゅっしよちも身元も閱歴も何にも話さなかつた。もちろん

話したくったって、知らないんだから、話せようもないんだが、
こうまで手っ取り早く片づける了簡りようけんとは思わなかった。自分は中
学校へ入学した時の経験から、いくら坑夫だって、それ相應の手
続がなくっちゃ採用されないもんだとばかり思っていた。大方身
元引受人とか保証人とか云うものが証文へ判でも捺おすんだろう、
その時は長蔵さんにでも頼んで見ようくらいにまで、先廻りをし
て考えていた。ところが案に相違して、談判を持ち込まれた飯場はんばが
頭しらは——飯場頭だか何だかその時は無論知らなかった。眉毛まゆげの太
くって蒼髯あおひげの痕あとの濃い逞たくましい四十恰好がっこうの男だった。——その男が
長蔵さんの話を一通り聞くや否や、

「そうかい、それじゃ置いておいで」

とさも無雑作に云つちまつた。ちようど炭屋が土釜を台所へ担ぎ込んだ時のように思われた。人間が遙々山越をして坑夫になりに来たんだとは認めていない。そこで自分は少々腹の中でこの飯場頭を恨んだが、これは自分の間違であつた。その訳は今直に分る。

飯場頭と云うのは一の飯場を預かる坑夫の隊長で、この長屋の組合に這入る坑夫は、万事この人の了簡しだいでどうでもなる。だからはなはだ勢力がある。この飯場頭と一分時間に談判を結了した長蔵さんは、

「じゃ、よろしくお頼みもうします」

と云ったなり、赤毛布あかげつとと小僧を連れて出て行つた。また歸つてくる事と思つたが、その後ごいっとう影も形も見せないんで、全く、置去おきざりにされたと云う事が分つた。考えるとひどい男だ。ここまで引つ張つて来るときには、何のかのと、世話らしい言葉を掛けたのに、いざとなると通り一片の挨拶あいさつもしない。それにしてもぽん引の手数料はいつ何時なんどきどこで取つたものか、これは今もって分らない。

こう云うしだいで飯場頭からは、土釜の炭俵のごとく認定される、長蔵さんからは小包のように抛なげ込まれる。少しも人間らし

い心持がしないんで、大いに悄然しやうぜんとしていると、出て行く三人の後姿を見送った飯場頭は突然自分の方を向いた。その顔つきが変っている。人を炭俵のように取扱う男とは、どうしても受取れない。全く東京辺で朝晩出逢であう、万事を心得た苦労人の顔である。

「あなたは生れ落ちてからの労働者とも見えないようだが……」

飯場掛はんばがかりの言葉をここまで聞いた時、自分は急に泣きなくなっ

た。さんざっぱらお前まへさんで、厭いやになるほどやられた揚句あげくの果はて、もうとうてい御前さん以上には浮ばれないものと覚悟をしていた矢先に、突然あななたの昔に帰ったから、思いがけない所で自己を

認められた嬉しさと、なつかしさと、それから過去の記憶——自分
分はつい一昨日までは立派にあなたで通って来た——それやこれ
やが寄って、たかって胸の中へ込み上げて来た上に、相手の調子
がいかにも鄭寧で親切だから——つい泣きなくなつた。自分はそ
の後いろいろな目に逢つて、幾度となく泣きなくなつた事はある
が、擦れ枯しの今日から見れば、大抵は泣くに当らない事が多
い。しかしこの時頭の中にたまつた涙は、今が今でも、同じ羽目
になれば、出かねまいと思う。苦しい、つらい、口惜しい、心細
い涙は経験で消す事が出来る。ありがた涙もこぼさずに済む。た
だ墮落した自己が、依然として昔の自己であると他から認識され

た時の嬉し涙は死ぬまでついて廻るものに違ない。人間はかように手前勘てまえかんの強いものである。この涙を感謝の涙と誤解して、得意がるのは、自分のために書生を置いて、書生のために置いてやったような心持になつてると同じ事じゃないかしら。

こう云う訳で、飯場掛はんばがかりの言葉を一行ばかり聞くと、急に泣きたくなつたが、実は泣かなかつた。悄然しやうぜんとはしていたが、気は張っている。どこからか知らないが、抵抗心が出て来た。ただ思うように口が利きけないから、黙って向うの云う事を聞いていた。すると飯場掛りは嬉しいほど親切な口調で、こう云つた。――

「……まあどうして、こんな所へ御出おいでなすつたんだか、今の男が

連れて来るくらいだから大概私わたしにも様子は知れてはいるが——どうです、もう一遍考えて見ちゃあ。きっと取とツ附つけ坑夫になれて、金がうんと儲もうかるてえような旨うまい話でもしたんでしょう。それがさ、実際やって見るととうてい話の十が一にも行かないんだからつまらないです。第一坑夫と一口に云いますがね。なかなかただの人に来る仕事じゃない、ことにあなたのように学校へ行つて教育なんか受けたものは、どうしたって勤まりっこありませんよ。……」

飯場頭はんばがしらはここまで来て、じつと自分の顔を見た。何とか云わなくつちやならない。幸さいわいこの時はもう泣きたいところを通り越し

て、口が利^きけるようになっていた。そこで自分はこう云った。――

「僕は――僕は――そんなに金なんか欲^ほしいです。何も儲^{もう}けるためにやって来た訳^{わけ}じゃないんですから、――そりゃ知^しってるです、僕^わだって知^しってるです……」

と、この時知^しってるですを二遍繰^くり返^かした事を今だに記憶^{きおく}している。はなはだ穏^{おだ}かならぬ生意^{しやうい}気^けな、ものの云^いいようだった。若いうちは、たった今まで悄^{しやう}気^げでいても、相手^{あいて}しだいですぐつけ上^あつちまう。まことに赤面^{せつめん}の至^{いた}りである。しかもその知^しってるですが、何^{なに}を知^しってるのかと思うと、今自分^{いま自分}を連^つれて来^きた男^{おとこ}、すなわ

ち長蔵さんは、一種の周旋屋であつて、すべての周旋屋に共通な法螺吹きであるほらふと云う真相をよく自覺していると云う意味なんだから、いくら知つてたつて自慢にならないのは無論である。それを念入に、瞞だま着れて来たんじゃない、万事承知の上の坑夫志願だなどと説明して見たつて今更いまどうなるものじゃない。ところが年が若いと虚栄心の強いもので——今でも弱いとは云わないが——しきりに弁解に取り掛つたのは実に冷汗の出るほどの愚ぐであつた。幸い相手が、こう云う家業かぎように似合とくじつわぬ篤実な男で、かつ自分の不経験を気の毒に思ふのあまり、この生意気を生意気と知りながら大目に見てくれたもんだから、どやされずに済んだ。まこと

にありがたい。この飯場に住み込んだあとで、頭の勢力の広大な
るに驚くにつれて、僕は知ってるですを思い出しては独り赧い顔
をしていた。ついでに云うがこの頭の名は原駒吉である。今もつ
て自分は好い名だと思ってる。

原さんは別に厭な顔つきもせず、黙って自分の言訳を聞いて
いたが、やがて頭を振り出した。その頭は大きな五分刈で額の所
が面摺のように抜き上がっている。

「そりや物数奇と云うもんでさあ。せつかく来たから是非やるつ
たって、何も家を出る時から坑夫になると思いつめた訳でもない
んでしよう。云わば一時の出来心なんだからね。やって見りや、

すぐ厭になっちまうな眼に見えてるんだから、廃よすが好ようがしよ
う。現に書生さんでここへ来て十日と辛抱したものあ、有りやし
ませんぜ。え？ そりや来る。幾人いくたりも来る。来る事は来るが、み
んな驚いて逃げ出しちまいますさあ。全く普通なみのものの出来る業わざ
じゃありませんよ。悪い事は云わないから御帰んなさい。なに坑
夫をしなくったって、口過くちすぎだけなら骨は折れませんかやあ」

原さんはここに至って、胡坐あぐらを崩くずして尻を宙に上げかけた。自
分はどうしても落第しそうな按排あんばいである。大いに困った。困った
結果、坑夫と云う事から気を離して、自分だけを検査して見る
と、——何だか急に寒くなった。袷あわせはさっきの雨で濡ぬれている。

洋袴^{ズボンした}下は穿^はいていない。東京の五月もこの山の奥へ来るとまるで二月か三月の気候である。坂を登っている間こそ体温でさほどにも思わなかった。原さんに拒絶されるまでは気が張っていたから、好かった。しかし飯場^{はんば}へ来て休息した上に、坑夫になる見込がほとんど切れたとなると、情^{なさけ}ないのが寒いのと合併して急に顫^{ふる}え出した。その時の自分の顔色は定めし見るに堪^たえんほど醜いもんだっだろう。この時自分はまた何となく、今しがた自分を置去^{おきざり}にして、挨拶^{あいさつ}もせずに出て行った長蔵さんが恋しくなった。長蔵さんがいたら、何とか尽力して坑夫にしてくれるだろう。よし坑夫にしてくれないまでも、どうにか片をつけてくれるだろう。汽

車賃を出してくれたくらいだから、方角のわかる所までくらいは送り出してくれそうなものだ。墓口がまぐちを長蔵さんに取りられてから、懷中ふところには一文もない。帰るにしても、帰る途中で腹が減って山の中で行倒ゆきだおれになるまでだ。いつその事今から長蔵さんを追掛けて見ようか。飯場飯場を探して歩いたら逢あえない事もないだろう。逢ってこれこれだと泣きついたら、今までの交際つきあいもある事だから、好い智慧ちえを貸してくれまいものでもない。しかし別れ際に挨拶さえしない男だから、ひよっとすると……自分は原さんの前で実はこんな閑ひまな事を、非常に忙しく、ぐるぐる考えていた。好すきな原さんが前にいるのに、あんまり下さらない、しかも消えてなく

なつた長蔵さんばかりを相談相手のように思い込んだのは、どう云う理由わけだろう。こんな事はよくあるもんだから、いざと云う場合に、敵は敵、味方は味方と板行はんこうで押したように考えないで、敵のうちで味方を探したり、味方のうちで敵を見露みあらわしたり、片方かたつぽづかないように心を自由に活動させなくってはいけない。

弱輩じやくはいな自分にはこの機会きあいがまだ呑み込めなかったもんだから、原さんの前に立って顫えながら、へどもどしていると、原さんも気の毒になつたと見えて、

「あなたさえ帰る気なら、及ばずながら相談になろうじゃありませんか」

と向うから口を掛けてくれた。こう切って出られた時に、自分ははっとありがたく感じた。ばかりなら当り前だがはっと気がついた。——自分の相談相手は自分の志望を拒絶するこの原さんを除いて、ほかにないんだと気がついた。気がつくと同時にまた口が利け^きなくなつた。是非坑夫^{きふ}にしてくれとも、帰るから旅費を貸してくれとも言いかねて、やっぱり立ちすくんでいた。気がついても何にもならない、ただ右の手で拳骨^{げんこつ}を拵^{こしら}えて寒い鼻の下を擦^{こす}つたように記憶している。自分はその前寄席^{よせ}へ行つて、よく噺家^{はなしか}がこんな手真似^{てつき}をするのを見た事があるが、自分でその通りを実行したのは、これが始めてである。この手真似を見ていた原さん

が、今度はこう云った。

「失礼ながら旅費のことなら、心配しなくつても好ござんす。どうかして上げますから」

旅費は無論ない。一厘たりとも金気は肌に着いていない。のたれ死^{じに}を覚悟の前でも、金は持つてる方が心丈夫だ。まして慢性の自滅で満足する今の自分には、たとい白銅一箇の草鞋^{わらじ}銭でも大切である。帰ると事がきまりさえすれば、頭を地に摺^すりつけても、原さんから旅費を恵んで貰^{もら}ったろう。実際こうなると廉恥^{れんち}も品格もあつたもんじやない。どんな不体裁^{ふていさい}な貰^{もら}い方でもする。――大抵の人がそうなるだろう。またそうなつてしかるべきである。――

—しかしけっして褒められた始末じゃない。自分がこんな事を露骨にかくのは、ただ人間の正体を、事実なりに書くんで、書いて得意がるのとは訳が違う。人間の生地はこれだから、これで差支ないなどと主張するのは、練羊羹ねりようかんの生地は小豆あずきだから、羊羹の代りに生小豆なまを噛かんでれば差支ないと結論するのと同じ事だ。自分はこの時の有様を思い出すたびに、なんで、あんな、さもない料簡けんになったものかと、吾われながら愛想あいそが尽きる。こう云う下卑げびた料簡を起さずに、一生を暮す事のできる人は、経験の足りない人かも知れないが、幸な人である。また自分らよりも遙はるかに高尚な人である。生小豆のまずさ加減を知らないで、生涯しょうがい練羊羹ばかり味

わつてゐる結構な人である。

自分は、も少しの事で、手を合せて、見ず知らずの飯場頭からわずかの合力を仰ぐところであつた。それをやつとの事で喰い止めたのは、せつかくの好意で調べてくれる金も、二三日木賃宿で夜露を凌げば、すぐ無くなつて、無くなつた暁には、また当途もなく流れ出さなければならぬと、冥々のうちに自覚したからである。自分は屑よく涙金を断つた。断つた表向は律義にも見える。自分もそう考えるが、よくよく詮索すると、慾の天秤に懸けた、利害の判断から出ている事はたしかである。その証拠には補助を断ると同時に、自分は、こんな事を言い出した。

「その代り坑夫に使って下さい。せつかく来たんだから、僕はど
うしてもやって見る気なんですから」

「随分酔興すいきやうですね」

と原さんは首を傾かしげて、自分を見つめていたが、やがて溜息のよ
うな声を出して、

「じゃ、どうしても帰る気はないんですね」

と云った。

「帰るつたって、帰る所がないんです」

「だって……」

「家うちなんかないんです。坑夫になれなければ乞食こじきでもするより仕

方がないです」

こんな押問答を二三度重ねている中に、口を利くきのが大変楽になつて来た。これは思い切つて、無理な言葉を、出でにくいと知りながら、我慢して使つた結果、おのずと拍子ひょうしに乗つて来た勢いに違ないんだから、まあ器械的の変化と見倣みなしても差支さしかえなからうが、妙なもので、その器械的の変化が、逆戻りに自分の精神に影響を及ぼして来た。自分の言いたい事が何の苦もなく口が出るに連れて——ある人はある場合に、自分の言いたくない事までも調子づいてべらべら饒舌しゃべる。舌はかほどに器械的なものである。——この器械が使用の結果加速度の効力を得るに連れて、自分はだ

んだん大胆になつて来た。

いや、大胆になつたから饒舌れたんだらう、君の云う事は顛倒あべこべじゃないかとやり込める気なら、そうして置いてもいい。いいが、それはあまり陳腐ちんぷでかつ時々嘘うそになる。嘘と陳腐で満足しないものは自分の言分をもつともと首肯うなずくだらう。

自分は大胆になつた。大胆になるに連れて、どうしても坑夫に住み込んでやろうと決心した。また饒舌っておれば必ず坑夫になれるに違ないと自覚して来た。一昨日おととい家を飛び出す間際まぎわまでは、夢にも坑夫にならうと云う分別は出なかった。ばかりではない、坑夫になるための駆落かけおちと事がきまっていたならば、何となく恥ず

かしくなつて、まあ一週間よく考えた上にと、出奔しゅっぽんの時期を曖昧あいまいに延ばしたかもしれない。逃亡はする。逃亡はするが、紳士の逃亡で、人だか土塊つちくれだか分らない坑掘あなほりになり下るさが目的の逃亡とは、何不足なく生育そだった自分の頭には影さえ射さなかつたろう。ところが原さんの前で寒い奥歯を噛かみしめながら、しよう事なしの押問答をしているうちに、自分はどうかつても坑夫になるべき運命、否いな天職を帯びてるような気がし出した。この山とこの雲とこの雨を凌しのいで来たからには、是非共坑夫にならなければ済まない。万一採用されない暁には自分に対して面目がない。——読者は笑うだろう。しかし自分は当時の心情を真面目まじめに書いてるんだ

から、人が見ておかしければおかしいほど、その時の自分に対して気の毒になる。

妙な意地だか、まけおし負惜みだか、それとも行倒れになるのが怖くつて、帰り切れなかったためだか、——その辺は自分にも曖昧だが、とにかく自分は、もつとも熱心な語調で原さんを口説いた。

「……そう云わずに使って下さい。実際僕が不適當なら仕方がないが、まだやって見ない事なんだから——せつかく山を越して遠方をわざわざ来たかい甲斐に、一日でもいちんち二日でも、いいですから、まあ試しだと思って使って下さい。その上で、とうてい役に立たないと思えば帰ります。きっと帰ります。僕だって、それだ

けの仕事が出来ないのに、押おしを強く御厄介ごやっかいになつてゐる気はないんですから。僕は十九です。まだ若いです。働き盛りです……」
と昨日茶店の神かみさんが云つた通りをそのまま図に乗つて述べ立てた。後から考えると、これはむしろ人が自分を評する言葉で、自分が自分を吹聴ふいちやうする文句ではなかった。そこで原さんは少し笑い出した。

「それほどお望みなら仕方がない。何も御縁だ。まあやつて御覧なさるが好い。その代り苦しいですよ」

と原さんは何気なく裏の赤い山を覗のぞくように見上げた。おおかた天気模様でも見たんだろう。自分も原さんといっしょに山の方へ

眼を移した。雨は上がったが、暗く曇っている。薄気味の悪いほど怪しい山の中の空合だ。この一瞬時に、自分の願が叶^{かな}って、自分はず山の中の人となった。この時「その代り苦しいですよ」と云った原さんの言葉が、妙に気に掛り出した。人は、ようやくの思いで刻下^{こっか}の志を遂^とげると、すぐ反動が来て、かえって志を遂げた事が急に恨めしくなる場合がある。自分が望み通りここへ落ちつける口頭の辞令を受け取った時の感じはいささかこれに類している。

「じゃね」——原さんは語調を改めて話し出した。——「じゃね。何しろ明日^{あした}の朝シキ[・]へ這入^{はい}って御覧なさい。案内を一人つけ

て上げるから。――それから――そうだ、その前に話して置かなくっちゃなりませんかね。一口に坑夫と云うと、訳もない仕事のように思われましようが、なかなか外で聞いてるような生容易なまやさしい業わざじゃないんで。まあ取っつけから坑夫になるなあ」と云って自分の顔を眺ながめていたが、やがて、

「その体格じゃ、ちっとむずかしいかも知れませんか。坑夫でなくっても、好ようがすかい」

と気の毒そうに聞いた。坑夫になるまでには相当の階級と練習を積まなくっちゃならないと云う事がここで始めて分った。なるほど長蔵さんが坑夫坑夫と、さも名誉らしく坑夫を振り廻したはず

だ。

「坑夫のほかになにかあるんですか。ここにいるものは、みんな坑夫じゃないんですか」

と念のために聞いて見た。すると原さんは、自分を馬鹿にした様子もなく、すぐそのわけを説明してくれた。

「銅山やまにはね、一万人も這入っててね。それが掘子ほりこに、シ・チ・ユウ・に、山市やまいちに、坑夫と、こう四つに分れてるんでさあ。掘子ほりこってえな、一人前の坑夫に使えねえ奴になるんで、まあ坑夫の下働したばたうぎですね。シ・チ・ユウは早く云うとシ・キなかの内の大工見たようなものかね。それから山市やまいちだが、こいつは、ただ石塊いしつこころをこつこつ欠いてるだけ

で、おもに子供——さつきも一人来たでしょう。ああ云うのが当分坑夫の見習にやる仕事さね。まあざっと、こんなものですよ。それで坑夫となると請負仕事だから、間が好いと日に一円にも二円にも当る事もあるが、掘子は日当で年が年中三十五銭で辛抱しなければならぬ。しかもそのうち五分は親方が取っちゃまって、病気でしようもんなら手当が半分だから十七銭五厘ですね。それで蒲団の損料が一枚三銭——寒いときは是非二枚要るから、都合で六銭と、それに飯代が一日十四銭五厘、御菜は別ですよ。——どうです。もし坑夫にいけなかったら、掘子にでもなる気はありますかね」

実のところはなりませんと勢いよく出る元氣はなかったが、ここまで来れば、今更いまさらどうしたって否いやだと断られた義理のもんじやない。そこで、出来るだけ景氣よく、

「なります」

と答えてしまった。原さんにはこの答が断然たる決心のように受けとれたか、それとも、瘖我慢やせがまんのつけ景氣げいきのごとく響いたか、その辺は確しと分らないが、何しろこの一言いちごんを聞いた原さんは、機嫌よく、

「じゃまあ、御上おあがんなさい。そうして、あした人をつけて上げるから、まあシキへ這入って御覧なさるがいい。何しろ一万人も

いて、こんなに組々に分れているんだから、飯場はんばを一つでも預かってると、毎日毎日何だかだつて、うるさい事ばかりでね。

せつかく頼むから置いてやる、すぐ逃げる。——いちんち一日に二三人は

きつと逃げますよ。そうかと云つて、おとなしくしているかと思うと、病氣になつて、死んじまう奴が出て来て——どうも始末に行かねえもんでさあ。葬とむりいばかりでも日に五六組無い事あ、滅多めったにないからね。まあやる気なら本氣にやつて御覧なさい。腰を掛けてちや、足が草臥くたびれるだろう。こつちへ御上り」

この逐一ちくいちを聞いていた自分はたとい、掘子ほりこだろうが、山市やまいちだろうが一生懸命に働かなくっちゃあ、原さんに対して済まない仕儀

になって来た。そこで心のうちに、原さんの迷惑になるような不都合はけっしてしまいときめた。何しろ年が十九だから正直なものであった。

そこで原さんの云う通り、足を拭いて尻をおろしているうちに、奥の方から婆さんが出て来て、——この婆さんの出ようがはなはだ突然で、ちよつと驚いたが、

「こつちへ御出おいでなさい」

と云うから、好加減いいかげんに御辞儀をして、後あとから尾ついて行つた。小作こづくりな婆さんで、後姿きやしやの華奢な割合には、ぴんぴん跳はねるように活潑かつぱつな歩き方をする。幅の狭い茶色の帯をちよつきり結むすびにむすんで、

なけなしの髪を頸窩^{ぼんのくぼ}へ片づけてその心棒^{しんぼう}に鉛色^{かんざし}の簪^{かんざし}を刺している。そうして襷掛^{たすきがけ}であつた。何でも台所か——台所がなければ、——奥の方で、用事の真つ最中に、案内のため呼び出されたから、こう急がしそうに尻を振るんだろう。それとも山育^{やまそだち}だからかしら。いや、飯場^{はんば}だから優長^{ゆうぢやう}にしちやいられないせいだろう。し
て見ると、今日から飯場の飯を食い出す以上は自分だって安閑としちやいられない。万事この婆さんの型で行かなくっちゃなるまい。——なるまい。——と力を入れて、うんと思つたら、さすがに草臥れた手足が急になるまいで充満して、頭と胸の組織が
ちよつと変つたような気分になつた。その勢いで広い階子段^{はしごだん}を、

案内に応じて、すとなすとなと景気よく登って行った。が自分の頭が階子段から、ぬっと一尺ばかり出るや否や、この決心が、ぐうと退避たじろいだ。

胸から上を階子段の上へ出して、二階を見渡すと驚いた。畳数たたみかずは何十枚だか知らないが遥はるかの突き当りまで敷き詰めてあつて、その間には一重ひとえの仕切りさえ見えない。ちようど柔道の道場か、浪花なに節わぶしの席亭わきでいのような恰好かっこうで、しかも広さは倍も三倍もある。だから、ただ駄々だだッびろ広い感じばかりで、畳の上でもまるで野原へ出たときゃあ思えない。それだけでも驚く価値ねうちは十分あるが、その広い原の中に大きな囲炉裏いろりが二つ切つてある、そこへ人間が約十

四五人ずつかたまっている。自分の決心が退避いだと云うのは、卑怯ひきょうな話だが、全くこの人間にあつたらしい。平生から強がつていたにはいたが、若輩じゃくはいの事だから、見ず知らずの多勢の席へ滅多めったに首を出した事はない。晴の場所となると、ただでさえもじもじする。ところへもつて来て、突然坑夫の団体に生擒いけどられたんだから、この黒い塊かたまりを見るが早いか、いささか辟易ひるんじまった。それも、ただの人間ならいい。と云つちや意味がよく通じない。――ただの人間が、坑夫になつてゐるなら差支さしかえない。ところが自分の胸から上が、階子段を出ると、等しく、この塊の各部分が、申し合せたように、こつちを向いた。その顔が――実はその顔で全く畏いし

縮ゆくしてしまった。と云うのはその顔がただの顔じゃない。ただの人間の顔じゃない。純然たる坑夫の顔であつた。そう云うより別に形容しようがない。坑夫の顔はどんなだろうと云う好奇心のあるものは、行つて見るより外に致し方がない。それでも是非説明して見ろと云うなら、ざつと話すが、——ほおほね頬骨がだんだん高く聳そびえてくる。あご顎が競せり出す。同時に左右に突つ張る。眼が壺つぼのよう
に引ッ込んで、めだま眼球を遠慮なく、奥の方へ吸いつけちまう。小鼻
が落ちる。——要するに肉と云う肉がみんな退却して、骨と云う
骨がことごとくとっかん呐喊展開するとても評したら好かろう。顔の骨だ
か、骨の顔だか分らないくらいに、しりぞろぞろ稜々たるものである。劇はげしい

労役の結果早く年を取るんだとも解釈は出来るが、ただ天然自然に年を取ったって、ああなるもんじゃない。丸味とか、あたたかみ温味とか、やさしみ優味とか云うものは薬にしたくっても、探し出せない。まあ一口に云うと^{どうもう}獰猛だ。不思議にもこの^{そう}獰猛な相が^そ一列一体の共有性になっていると見えて、^{いろり}囲炉裏の^{はた}傍の黒いものが等しく自分の方を向くと、またたく間^まに^ま獰猛な顔が十四五揃^{そろ}った。向うの^{とりま}囲炉裏を取捲^{とりま}いてる連中も同じ顔に違いない。さつき坂を上がってくるとき、長屋の窓から自分を見^み下^{おろ}していた顔も全くこれである。して見ると組々の長屋に住んでいる総勢一万人の顔はことごとく^{ひる}獰猛なんだろう。自分は全く退避^{ひる}んだ。

この時婆さんが後を振り返って、

「こっちへおいでなさい」

と、もどかしそうに云うから、度胸を据えて、獰猛の方へ近づいて行つた。ようやく囲炉裏の傍まで来ると、婆さんが、今度は、

「まあここへ御坐んなさい」

と差しずをしたが、ただ好加減な所へ坐れと云うだけで、別に設けの席も何もないんだから、自分は黒い塊りを避けて、たった一人置の上へ坐つた。この間獰猛な眼は、始終自分に喰つついてゐる。遠慮も何もありやしない。そうして誰も口を利くものがない。取附端を見出すまでは、団体の中へ交り込む訳にも行かず、

ぽつねんと独りぼ^{ひと}ちで離れているのは、獰猛の目標^{めじるし}となるばかりだし、大いに困った。婆さんは、自分を紹介する段じゃない、器械的に「ここへ坐れ」と云ったなり、ちよつ切り結びの尻を振り立てて階子段^{はしごだん}を降りて行ってしまった。広い寄席^{よせ}の真中にたった一人取り残されて、楽屋の出方^{でかた}一同から、冷かされてるようなものだ、手持無沙汰^{てもちぶさた}は無論である。ことさら今の自分に取っては心細い。のみならず^{あわせ}拾一枚ではなはだ寒い。寒いのは、この五月の空に、かんかん炭を焼^たいて獰猛共が囲炉裏^{いろり}へあたってゐるんでも分る。自分は仕方がないからてれ隠^{かく}しに襯衣^{シャツ}の釦^{ボタン}をはずして腋^{わき}の下へ手を入れたり、膝^{ひざ}を立てて、足の親指を抓^{つか}って見たり、ある

いは腿ももの所を両手で揉もんで見たり、いろいろやっていた。こう云う時に、落ついた顔をして——顔ばかりじゃいけない、心しんから落ちついて、平気で坐ってる修業をして置かないと、大きな損だ。しかし、十九や、そこいらではとうてい覚束おぼつかない芸だから、自分はやむを得ず。前記の通りいろいろ馬鹿な真似まねをしていると、突然、

「おい」

と呼んだものがある。自分はこの時ちょうど下を向いて鳴海絞なるみしぼりの兵児帯へこおびを締め直していたが、この声を聞くや否や、電気仕掛の顔のように、首筋が急に釣った。見るとさっきの顔揃かおぞろいで、眼がみん

なこつちを向いて、光ってる。「おい」と云う声は、どの顔から出たものか分らないが、どの顔から出たにしても大した変りはない。どの顔も獰猛どつもうで、よく見るとその獰猛のうちに、軽侮あなどりと、嘲あざ弄けりと、好奇の念が判然と彫りつけてあつたのは、首を上げる途端とたんに発明した事実で、発明するや否や、非常に不愉快に感じた事実である。自分は仕方がないから、首を上げたまま、「おい」の聲がもう一遍出るのを待っていた。この間が約何秒かかったか知らないが、とにかく予期の状態で一定の姿勢におつたものらしい。すると、いきなり、

「やに澄すますねえ」

と云ったものがある。この声はさっきの「おい」よりも少し皺しやが枯れていたから、大方別人だろうと鑑定した。しかし返答をするべき性質たちの言葉でないから——字で書くと普通のねえのように見えるが、実はなよの命令を倶利伽羅流くりからりゅうに崩くずしたんだから、はなはだ下等である。——それでやっぱり黙ってた。ただ内心では大いに驚いた。自分がここへ来て言葉を交したものは原さんと婆さんだけであるが、婆さんは女だから別として、原さんは思ったよりも叮嚀ていねいであつた。ところが原さんは飯場頭はんばがしらである。頭かしらですらこれだから、平ひらの坑夫は無論そう野卑ぞんざいじゃあるまいと思ひ込んでいた。だから、この悪口あくぐちが藪やぶから棒ぼうに飛んで来た時には、こいつはと退ひ

避^るむ前に、まずおやつと毒氣を抜かれた。ここでいっその事毒突^{どくづき}返^{かえ}したなら、袋叩^{ふくろたた}きに逢^あうか、または平等の交際が出来るか、どっちか早く片がついたかも知れないが、自分は何にも口答えをしなかった。もともと東京生れだから、この際何とか受けくらいは心得ていたんだろう。それにもかかわらず、兄^{あにい}に類似した言語は無論、尋常の竹篋返^{しつぺいがえ}しさえ控えたのは、——相手にならないと先方^{さき}を輕蔑^{けいべつ}したためだろうか——あるいは怖^{こわ}くって何とも云う度胸がなかったんだろうか。自分は前の方だと云いたい。しかし事實はどうも後^{あと}の方らしい。とにかくも両方交^{まじ}つてたと云うのが一番穩^{おだやか}のように思われる。世の中には輕蔑しながらも怖^{こわ}いものが

沢山いくらもある。矛盾にやならない。

それはどっちにしたって構わないが、自分がこの悪口あくたいを聞いたなり、おとなしく聞き流す料簡りょうけんと見て取った坑夫共は、面白そうにどつと笑った。こっちがおとなしければおとなしいほど、この笑は高く響いたに違ない。銅山やまを出れば、世間が相手にしてくれない返報に、たまたま普通の人間が銅山の中へ迷い込んで来たのを、これ幸いさいわいと嘲弄ちやうろうするのである。自分から云えば、この坑夫共が社会に対する恨みうらを、吾身わがみ一人で引き受けた訳になる。銅山へ這入はいるまでは、自分こそ社会に立てない身体からだだと思い詰めていた。そこで飯場はんばへ上あがって見ると、自分のような人間は仲間にして

やらないと云わんばかりの取扱いである。自分は普通の社会と坑夫の社会の間に立って、立派に板挟みいたばさとなつた。だからこの十四五人の笑い声が、ほてるほど自分の顔の正面に起つた時は、悲しいと云うよりは、恥ずかしいと云うよりは、手持無沙汰てもちぶさたと云うよりは、情なさけないほど不人情な奴が揃そろつてると思つた。無教育は始めから知れている。教育がなければ予期出来ないほどの無理な注文はしないつもりだが、なんぼ坑夫だって、親の胎内から持つて生れたままの、人間らしいところはあるだろうくらいに心得ていたんだから、この寸法に合わない笑声を聞くや否や、畜生奴ちくしやうめと思つた。俗語に云う怒おこつた時の畜生奴じゃない。人間と受取れない意

味の畜生奴である。今では経験の結果、人間と畜生の距離がだいぶ詰ってるから、このくらいの事をと、鈍い神経の方で相手にしないかも知れないが、何しろ十九年しか、使っていない新しい柔かい頭へこのわる笑がじんと来たんだから、切^{せつ}なかつた。自分ながら思い出すたびに、まことに痛わしいような、いじらしいような、その時の神経系統をそのまま真綿に包^{くる}んで大事にしまつて置いてやりたいような気がする。

この悪意に充^みちた笑がようやく下火になると、

「御前^{おめえ}はどこだ」

と云う質問が出た。この質問を掛けたものは、自分から一番近い

所に坐っていたから、声の出所は判然分った。浅黄色の手拭染み
た三尺帯を腰骨の上へ引き廻して、後向きの胡坐のまま、斜に顔
だけこつちへ見せている。その片眼は生れつきの赤んべんで、お
まけに結膜が一面に充血している。

「僕は東京です」

と答えたら、赤んべんが、肉のない頬を凹まして、愚弄の笑いを
洩らしながら、三軒置いて隣りの坑夫をちよいと顎でしゃくつ
た。するとこの相図を受けた、願人坊主が、入れ替ってこんな事
を云った、

「僕だなんて——書生ツ坊だな。大方女郎買でもしてしくじった

んだろう。太え奴だ。全体ぜんてえこの頃の書生ツ坊の風儀が悪くつてい
けねえ。そんな奴に辛抱が出来るもんか、早く帰けえれ。そんな瘡やせつ
こけた腕でできる稼かぎ業じゃねえ」

自分はだまっていた。あんまり黙っていたので張はり合あいが抜けたせ
いか、わいわい冷かすのが少し静まった。その時一人の坑夫――
これは尋常な顔である。世間へ出しても普通に通用するくらいに
眼鼻立が調ととのっていた。自分は、冷かされながら、眼を上げて、黒
い塊かたまりを見るたびに、人数にんずやら、着物やら、獐どう猛もうの度合やらをだん
だん腹に畳み込んでいたが、最初は総体の顔が総体に骨と眼で
きた上に獸慾じゆうよくの脂あぶらが浮いているところばかり眼に着いて、どれ

も、これも差別がないように思われた。それが三度四度と重なるにつけて、四人五人と人相の区別ができるに連れて、この坑夫だけが一際目立って見えるようになった。年はまだ三十にはなるまい。体格は倔強である。眉毛と鼻の根と落ち合う所が、一段奥へ引っ込んで、始終鼻眼鏡で圧しつけてるように見える。そこに瘡が拘泥していそうだが、これがために獰猛の度はかえって減ずると云っても好いような特徴であつた。——この坑夫が始めてこの時口を利いた。——

「なぜこんな所へ来た。来たって仕方がないぜ。儲かる所じゃない。ここにいる奴あ、みんな食詰ものばかりだ。早く帰るが好か

ろう。帰って新聞配達でもするがいい。おれも元はこれで学校へも通ったもんだが、放蕩の結果とうとう、シキの飯を食うようになった。おれのようになったが最後もう駄目だ。帰ろう。たつて、帰れなくなる。だから今のうちに東京へ帰って新聞配達をしろ。書生はとも一月と辛抱は出来ないよ。悪い事は云わねえから帰れ。分つたろう」

これは比較的眞面目な忠告であつた。この忠告の最中は、さすがの癡悪派もおとなしく交つ返しもせず聞いていた。その惰性で忠告が済んだあとも、一時は静であつた。もつともこれはこの坑夫に多少の勢力があるんで、その勢力に対しての遠慮かも知れ

ないと勘づいた。その時自分は何となく心の底で愉快だった。この坑夫だって、ほかの坑夫だって、人相にこそ少しの変化はあれ、やっぱり一つ穴でこつこつ鉋塊あらがねを欠いている分の事だろう。そう芸に巧拙こうせつのあるはずはない。して見ると、この男の勢力は全く字が読めて、物が解って、分別があつて——一口に云うと教育を受けたせいに違ない。自分は今こんなに馬鹿にされている。ほとんど最下等の労働者にさえ齒よわいされない人非人にんぴにんとして、多勢たぜいの侮辱を受けている。しかし一度この社会に首を突込つっこんで、寧猛組どうもうぐみの一人となりすましたら、一月二月と暮して行くうちには、この男くらいの勢力を得る事はできるかも知れない。できるだろう。で

きるにきまつてるとまで感じた。だから、いくら誰が何と云つても帰るまい、きつとこの社会で一人前以上になつて成功して見せる。——随分思い切つてつまらない考えを起したもんだが、今から見ても、多少論理には叶かなっているようだ。そこでこの坑夫の忠告には謹つつしんで耳を傾かたむけていたが、別段先方の注文通りに、では歸りましようと言ふ返事もしなかつた。そのうちいったん静まりかけた愚弄ぐろうの舌がまた動き出した。

「いる気なら置いてやるが、ここにや、それぞれ掟おきてがあるから呑み込んで置かなくっちゃ迷惑だぜ」

と一人が云うから、

「どんな掟ですか」

と聞くと、

「馬鹿だなあ。親分もあり兄弟分きょうていぶんもあるじゃねえか」
と、大変な大きな声を出した。

「親分たどんなもんですか」

と質問して見た。実はあまりがみがみ云うから、黙っていようかしらんとも思ったけれども、万一掟を破って、あとで苛ひどい目に逢あうのが怖こわいから、まあ聞いて見た。すると他の坑夫ほかが、すぐ、返事をした。

「しよあのねえ奴だな。親分を知らねえのか。親分も兄弟分も知

らねえで、坑夫になろうなんて料簡違えだ。早く帰れ」

「親分も兄弟分もいるから、だから、儲けようたって、そう旨か

あ行かねえ。帰れ」

「儲かるもんか帰るが好い」

「帰れ」

「帰れ」

しきりに帰れと云う。しかも実際自分のためを思って帰れと云うんじゃない。仲間入をさせてやらないから出て行けと云うんだある。さぞ儲けたいだろうが、そうは問屋で卸さない、こちとらだけで儲ける仕事なんだから、諦めて早く帰れと云うのである。

したがってどこへ帰れとも云わない。川の底でも、穴の中でも構わない勝手な所へ帰れと云うのである。自分は黙っていた。

この形勢がこのままで続いたら、どんな事にたち至ったか思いやられる。敵はこの^い罫^ろ裏^りの^ま周囲^{わり}ばかりにやいない。さつきちよつと話した通り、向うの方にも大きな輪になって、黒く塊^{かたま}っている。こっちの団体だけですら持ち扱っているところへ、あつちの^{ぐん}群勢^{ぜい}が加勢^かしたら^{だい}大事^じである。自分は愚弄^{ぐろう}されながらも、時々横目を使つて、未来の敵——こうなると、どれもこれも人間でさえあれば、敵と認定してしまう。——遠方にはおるが、そろそろ押し寄せて来そうな未来の敵を、見ていた。かように自分の

心が、左右前後と離れ離れになつて、しかも独立ができないものだから、物の後を追掛け、追ん廻わしているほど辛い事はない。なんでも敵に逢つたら敵を呑むに限る。呑む事ができなければ呑まれてしまふが好い。もし両方共困難ならぶつりと縁を截つて、独立自尊の態度で敵を見ているがいい。敵と融合する事もできず、敵の勢力範囲外に心を持つてく事も出来ず、しかも敵の尻を嗅がなければならぬとなると、はなはだしき損となる。したがつてもつとも下等である。自分はこう云う場合にたびたび遭遇して、いろいろな活路を研究して見たが、研究したほどに、心が云う事を聞かない。だからここに申す三策は、みんな釈迦の空説

法である。もし講釈をしないでも知れ切ってる陳説なら、なおさら言うだけが野暮になる。どうも正式の学問をしないと、こう云う所へ来て、取捨の区別がつかなくって困る。

自分が四方八方に気を配って、自分の存在を最高度に縮小して恐れ入っていると、

「御膳を御上がんなさい」

と云う婆さんの声が聞えた。いつの間に婆さんが上がって来たんだか、自分の魂が鳩の卵のように小さくなって、萎縮した真最中だったから、御膳の声が耳に入るまではまるで気がつかなかった。見ると剥げた御膳の上に縁の欠けた茶碗が伏せてある。小さ

い飯櫃めしびつも乗っている。箸はしは赤と黄に塗り分けてあるが、黄色い方の漆うるしが半分ほど落ちて木地きじが全く出ている。御菜いとしんには糸蒔いとごんにやく蒔が一皿ついていた。自分は伏目になってこの御膳の光景を見渡した時、大いに食いたくなつた。実は今朝けさから水一滴も口へ入れていない。胃は全く空からである。もし空でなければ、昨日きのう食あつた揚饅頭あげまんじゅうと薩摩芋さつまいもがあるばかりである。飯の氣けを離れる事約二昼夜になるんだから、いかに魂が萎縮しているこの際でも、御櫃おはちの影を見るや否や食慾は猛然として咽喉のどもと元まで詰め寄せて来た。そこで、冷かしも、交まぜつ返しも氣に掛ける暇いとまなく、見栄みえも糸瓜へちまも棒に振つて、いきなり、お櫃はちからしゃくつて茶碗へ一杯盛り上げた。その

手数^{てかず}さえ面倒なくらい待ち遠しいほどであつたが、例の剥^は箸^{げばし}を取り上げて、茶碗から飯をすくい出そうとする段になつて——おやと驚いた。ちつともすくえない。指の股^{また}に力を入れて箸をうんと底まで突っ込んで、今度こそはと、持上げて見たが、やっぱり駄目だ。飯はつるつると箸の先から落ちて、けっして茶碗の縁^{ふち}を離れようとしな^い。十九年来いまだかつてない経験だから、あまりの不思議に、この仕損^{しくじり}を二三度繰り返して見た上で、はてなと箸を休めて考えた。おそらく狐に撮^{つま}まれたような風であつたんだろう。見ていた坑夫共はまたぞろ、どつと笑い出した。自分はこの声を聞くや否や、いきなり茶碗を口へつけた。そうして光沢^{つや}のな

い飯を一口掻き込んだ。すると笑い声よりも、坑夫よりも、空腹よりも、舌三寸の上だけへ魂が宿ったと思うくらいに変な味がした。飯とは無論受取れない。全く壁土である。この壁土が唾液に和けて、口いっぱいに広がった時の心持は云うに云われなかった。

「面あ見ろ。いい様だ」

と一人が云うと、

「御祭日でもねえのに、銀米の気でいやがらあ。だから帰れって

教えてやるのに」

と他のものが云う。

「南京米ナンキンめえの味も知らねえで、坑夫になろうなんて、頭りょうけんっから料簡ちげえ違ちげえだ」

とまた一人が云った。

自分は嘲弄ちやうろうのうちに、術じゆつなくこの南京米ナンキンまいを呑み下した。一口でやめようと思ったが、せつかく盛り込んだものを、食ってしまわないと、また冷かされるから、熊の胆いを呑む氣になつて、茶碗に盛っただけは奇麗きれいに腹の中へ入れた。全く食慾のためではない。昨日食きのうった揚饅頭あげまんじゅうや、ふかし芋いもの方が、どのくらい御馳走ごちそうであつたか知れない。自分が南京米の味を知ったのは、生れてこれが始めてである。

茶碗に盛っただけは、こう云う訳で、どうにか、こうにか片づけたが、二杯目は我慢にも盛^{よそ}う気にならなかったから、糸蒚^{いとごんにやく}蒚だけを食って箸を置く事にした。このくらい辛抱して無理に厭^{いや}なものを口に入れてさえ、箸を置くや否や散々に嘲弄された。その時は随分つらい事と思つたが、その後日^ごに三度ずつは、必ずこの南京米^{むか}に対^{むか}わなくっちゃならない身分となつたんで、さすがの壁土も慣^なれるに連^つれて、いわゆる銀米と同じく、人類の食い得べきもの、否食^はつてしかるべき滋味と心得るようになってからは、剥膳^{はげぜん}に向^むつて逡巡^{しりごみ}した当時がかえつて恥ずかしい氣持になつた。坑夫共の冷かしたのも万更^{まんぜい}無理ではない。今となると、こんな無經驗

な貴族的の坑夫が一杯の南京米を苦に病むところに廻り合わせ
て、現状を目撃したら、ことに因ると、自分でさえ、笑うかも知
れない。冷かさないまでも、善意に笑うだけの価値は十分あると
思う。人はいろいろに変化するもんだ。

南京米の事ばかり書いて済まないから、もうやめにするが、こ
の時自分の失敗に対する冷評は、自然のままにして抛って置いた
なら、どこまで続いたか分らない。ところへ急に金盥を叩き合せ
るような音がした。一度ではない。二度三度と聞いているうち
に、じゃじゃん、じゃららんと時を句切って、拍子を取りながら
叩き立てて来る。すると今度は木唄の聲が聞え出した。純粹の木

唄では無論ないが、自分の知ってる限りでは、まあ木唄と云うのが一番近いように思われる。この時冷評は一時にやんだ。ひっそりと静まり返る山の空気に、じゃじゃん、じゃららんが鳴り渡る間を、一種異様に唄うたい囃はやして何物か近づいて来た。

「ジ・ヤン・ボーだ」

と一人が膝頭ひざがしらを打たないばかりに、大きな声を出すと、

「ジ・ヤン・ボーだ。ジ・ヤン・ボーだ」

と大勢口々に云いながら、黒い塊かたまりがばらばらになって、窓の方へ立って行った。自分は何がジ・ヤン・ボーなんだか分らないが、みんなの注意が、自分を離れると同時に、気分が急に暢達のんびりしたせい

か、自分もジャンボーを見たいと云う余裕ができて、余裕につれて元氣も出来た。つくづく考えるに、人間の心は水のようなもので、押されると引き、引くと押して行く。始終手を出さない相撲をとって暮らしていると云っても差支なかつた。それで、みんなが立ち尽したあとから、自分も立った。そうしてやっぱり窓の方へ歩いて行つた。黒い頭で下は塞がっている上から背伸をして見下すと、斜に曲つてゐる向の石垣の角から、紺の筒袖を着た男が二人出た。あとからまた二人出た。これはいずれも金盃を押しつぶして薄っ片にしたようなものを両手に一枚ずつ持っている。ははあ、あれを叩くんだと思う拍子に、二人は両手をじゃじゃんと打

ち合わした。その不調和な音が切っ立った石垣に突き当って、後うしろの禿山はげやまに響いて、まだやまないうちに、じゃらんとまた一組が後あとから鳴らし立てて現れた。たと思うとまた現れる。今度は金盃を持っていない。その代り木唄——さっきは木唄と云った。しかしこの時、彼らの揚げた声は、木唄と云わんよりはむしろ浪花節なにわぶしで咄喊とっかんするような稀代きだいな調子であつた。

「おい金公きんこうはいねえか」

と、黒い頭の一つが怒鳴どなった。後向うしろむきだから顔は見えない。すると、

「うん金公に見せてやれ」

とすぐ応じた者がある。この言葉が終るか、終らない間に、五つ六つの黒い頭がずらりとこつちを向いた。自分はまた何か云われる事と覚悟して仕方なしに、今までの態度で立っていると、不思議にも振り返った眼は自分の方に着いていない。広い部屋の片隅に遠く走った様子だから、何物がいる事かと、自分も後を追っ懸けて、首を捻じ向けると、——寝ている。薄い布団をかけて一人寝ている。

「おい金州^{きんしゅう}」

と一人が大きな声を出したが、寝ているものは返事をしない。

「おい金しゅう起きろやい」

と怒鳴^{どなり}つけるように呼んだが、まだ何とも返事がないので、三人ばかり窓を離れてとうとう迎^{むかえ}に出掛けた。被^{かぶ}つてゐる布団^{ふとん}を手荒にめくると、細帯をした人間が見えた。同時に、

「起きろってば、起きろやい。好いものを見せてやるから」

と云う声も聞えた。やがて横になつてた男が、二人の肩に支えられて立ち上った。そうしてこつちを向いた。その時、その刹那^{せつな}、その顔を一目見たばかりで自分は思わず慄^{ぞつ}とした。これはただ保養^{ひやう}に寝ていた人ではない。全くの病人である。しかも自分だけで起居^{たちい}のできないような重体の病人である。年は五十に近い。髯^{ひげ}は幾日も剃^そらないと見えてぼうぼうと延びたままである。いかな癩^{でう}

猛^{もう}も、こう憔悴^{やつれ}ると憐^{あわ}れになる。憐れになり過ぎて、逆にまた怖^{こわ}くなる。自分がこの顔を一目見た時の感じは憐れの極^{きよく}全く怖^{こわ}かつた。

病人は二人に支えられながら、釣られるように、利^きかない足を運ばして、窓の方へ近寄ってくる。この有様を見ていた、窓際の多^た人数^{にんず}は、さも面白^{はや}そうに囃^{はや}し立てる。

「よう、金^{きん}しゅう早く来いよ。今ジャンボーが通るところだ。早く来て見ろよ」

「己^{おら}あジャンボーなんか見たかねえよ」

と病人は、無^む体^{たい}に引き摺^ずられながら、気のない声で返事をするう

ちに、見たいも、見たくないもありやしない。たちまち窓の障子しょうじの角かどまで圧おしつけられてしまった。

じゃじゃん、じゃらんとジャンボ―は知らん顔で石垣の所へ現れてくる。行列はまだ尽きないのかと、また背延せいびをして見下みおろした時、自分は再び慄とした。金盥かなだらと金盥の間に、四角な早桶はやおけが挟はさまって、山道を宙に釣られて行く。上は白金巾しろかなきんで包んで、細い杉丸太を通した両端りょうたんを、水でも一荷頼いっかまれたように、容赦なく担かついでいる。その担いでいるものまでも、こっちから見ると、例の唄うたを陽気にうたってるように思われる。――自分はこの時始めてジャンボ―の意味を理解した。生涯しょうがいいかなる事があっても、けっ

して忘れられないほど痛切に理解した。ジャンボは葬式である。坑夫、シチュウ、掘子、山市に限って執行される、また執行されなければならない一種の葬式である。御経の文句を浪花節なにわぶしに唄うたって、金盥つづの潰れるほどに音楽を入れて、一荷いっかの水と同じように棺桶かんおけをぶらつかせて——最後に、半死半生の病人を、無理矢理に引き摺り起して、否いやと云うのを抑えつけるばかりにしてまで見せてやる葬式である。まことに無邪氣きよくの極で、また冷刻の極である。

「金しゅう、どうだ、見えたか、面白いだろう」と云ってる。病人は、

「うん、見えたから、床とこん所まで連れてって、寝かしてくれよ。
後生ごしょうだから」

と頼んでいる。さっきの二人は再び病人を中へ挟んで、

「よっしよいよっしよい」

と云いながら、刻きざみ足に、布団ふとんの敷いてある所まで連れて行っ
た。

この時曇った空が、粉になって落ちて来たかと思われるような
雨が降り出した。ジャンボンボーはこの雨の中を敲たたき立てて町の方へ
下くだって行く。大勢は

「また雨だ」

と云いながら、窓を立て切つて、各々囲炉裏の傍へ歸る。この混
雑紛くちまぎれに自分もいつの間にか獰猛どうもうの仲間入りをして、火の近所まで
寄る事が出来た。これは偶然の結果でもあり、また故意の所作しよさで
もあつた。と云うものは火の気がなくなつてははなはだ寒い。拾一あわせ
枚ではとても凌ぎ兼ねるほどの山の中だ。それに雨さえ降り出し
た。雨と云えば雨、霧と云えば霧と云われるくらいな微かな粒かすで
あるが、四方の禿山はげやまを罩こめ尽した上に、筒抜けつつぬの空を塗り潰つぶし
て、しとどと落ちて来るんだから、家うちの中に坐つていてさえ、糠ぬか
よりも小さい湿りしめ気が、毛穴から腹の底へ沁しみ込むような心持で
ある。火の気がなくなつてはとうていやり切れるものじゃない。

自分が好い加減な所へ席を占めて、いささかながら囲炉裏のほとぼりを顔に受けていると、今度は存外にも度外視されて、思ったよりも調戯からかわれずに済んだ。これはこっちから進んで獰猛の間入りをしたため、向うでも普通の獰猛として取扱うべき奴だと勘弁してくれたのか、それとも先刻さっきのジャンボーで不意に気が変なりゆきった成行として、自分の事をしばらく忘れてくれたのか、または冷笑ひやかしの種が尽きたか、あるいは毒突どくづくのに飽きたんだか、――何しろ自分が席を改めてから、自分の気は比較的楽になった。そうして囲炉裏の傍の話はやっぱりジャンボーで持ち切っていた。いろいろな声がこんな事を云う。――

「あのジャンボーはどこから出たんだろう」

「どこから出たって御ジャンボーだ」

「ことによると黒市組かも知れねえ。見当がそうだ」

「全体ジャンボーになったらどこへ行くもんだろう」

「御寺よ。きまつてらあ」

「馬鹿にするねえ。御寺の先を聞いてるんだあな」

「そうよ、そりや寺限で留りっこねえ訳だ。どっかへ行くに違え

ねえ」

「だからよ。その行く先はどんな所だろうってえんだ。やっぱしこんな所かしら」

「そりゃ、人間の魂の行く所だもの、大抵は似た所に違えねえ」
「己おれもそう思ってる。行くとなりゃ、どうもほかへ行く訳がねえからな」

「いくら地獄だって極楽ごくらくだって、やっぱり飯は食うんだろう」

「女もいるだろうか」

「女のいねえ国が世界にあるもんか」

ざっと、こんな談話だから、聞いているとめっちゃめっちゃである。それで始めのうちは冗談じょうだんだと思った。笑っても差支さしつかえないものと心得て、口の端はたをむずつかせながら、ちよつと様子を見渡したくらいであった。ところが笑いたいの自分だけで、囲炉裏を取

り捲まいている顔はいずれも、彫りつけたように堅くなっている。彼らは真剣の真面目で未来と云う大問題を論じていたのである。実に嘘うそとしか受け取れないほどの熱心が、各々の眉まゆの間に見えた。自分はこの時、この有様を一瞥いちべつして、さっきの笑いたかった念慮をたちまちのうちに一変した。こんな向う見ずの無鉄砲な人間が——カンテラを提さげて、シキの中へ下りれば、もう二度と目の見ない料簡りょうけんでいる人間が——人間の器械で、器械の獣けだものとも云うべきこの寧猛組どうもうぐみが、かほどに未来の事を気にしていようとは、まことに予想外であつた。して見ると、世間には、未来の保証をしてくれる宗教というものが入用いりようのはずだ。実際自分が眼を

上げて、い罫ろ裏りのぐるりにあ胡坐ぐらをかいて並んだ連中を見渡した時には、遠慮にい畏縮しゆくが手伝って、七分方しちぶがたでき上った笑いを急にく崩ずしたと云う自覚は無論なかった。ただ寄席よせを聞いてるつもりで眼を開けて見たら鼻の先にび毘沙門様しゃもんさまが大勢いて、これはと威儀を正さなければならぬ氣持であつた。一口に云うと、自分はこの時始めて、真面目な宗教心の種を見て、半獣半人の前にも厳格の念を起したんだろう。その癖自分はいまだに宗教心と云うものを持つていない。

この時さっきの病人が、向うの隅でううんとうな唸り出した。その唸り声には無論特別の意味はない。単に普通の病人の唸り声に過

ぎんのだが、ジャンボの未来に屈託している連中には、一種のあやしい響のように思われたんだろう。みんな眼と眼を見合した。

「金公きんこう苦しいのか」

と一人が大きな声で聞いた。病人は、ただ、

「ううん」

と云う。唸ってるのか、返事をしているのか判然しない。するとまた一人の坑夫が、

「そんなにかかあ鼻はなの事ばかり気にするなよ。どうせ取られちまったんだ。今更いまより唸うなったってどうなるもんか。質に入れた鼻だ。受出さな

けりや流れるなあ当り前だ」

と、やっぱり囲炉裏の傍へ坐ったまま、大きな声で慰めて^{なぐさ}いる。

慰めてるんだか、悪口^{あくぐち}を吐^ついているんだか疑わしいくらいであ

る。坑夫から云うと、どっちも同じ事なんだろう。病人はただう

うんと挨拶^{あいさつ}——挨拶にもならない声を微^{かす}かに出すばかりであつ

た。そこで大勢は懸合^{かけあい}にならない慰藉^{いしや}をやめて、囲炉裏の周^{まわり}囲^だ

けで舌^{した}の用を弁^わじていた。しかし話題はまだ金さんを離れない。

「なあに、病氣せえしなけりや、金公だつて鼻を取られずに済む

んだあな。元を云やあ、やっぱり自分が悪いからよ」

と一人が、金さんの病氣をさも罪惡のように評するや否や、

「全くだ。自分が病氣をして金を借りて、その金が返せねえから、鼻を抵当に取られちまったんだから、正直のところ文句もんくの附けようがねえ」

と賛成したものがある。

「若干いくらで抵当に入れたんだ」

と聞くと、向側むこうがわから、

「五両だ」

と誰だか、簡潔に教えた。

「それで市いちの野郎が長屋へ下がって、金しゅうと入れ代った訳か。ハハハハ」

自分は囲炉裏そばの側に坐まってるのが苦痛であつた。背中の方がぞくぞくするほど寒いのに、腋わきの下から汗が出る。

「金しゅうも早く癒なおって、鼻かかあを受け出したら好かろう」

「また、市いちと入れ代りか。世話あねえ」

「それよりか、うんと稼かせいで、もっと価ねに踏める抵当でも取つた方が、氣が利きいてらあ」

「違ちがねえ」

と一人が云い出すのを相図に、みんなどつと笑つた。自分はこの笑の中に包まれながら、どうしても笑い切れずに下を向いてしまった。見ると膝ひざを並べて畏かしこまっていた。馬鹿らしいと氣がつい

て、胡坐あぐらに組み直して見た。しかし腹の中はけっして胡坐をかくほど悠長ゆうちやうではなかった。

その内だんだん日暮に近くなつて来る。時間が移るばかりじゃない、天氣の具合と、山が囲いんでるせいで早く暗くなる。黙もくつて聞きいてみると、雨垂あまだれの音もしないようだから、ことによると、雨はもう歇やんだのかも知れない。しかしこの暗さでは、やっぱり降ふつてると云う方が当るだろう。窓は固もといり締め切つてある。戸外そとの模様は分りようがない。しかし暗くつて湿しめッぽい空氣が障子しょうじの紙を透こして、一面に囲い炉裏ろりの周圍まわりを襲おそつて来た。並ならんでいる十四五人の顔がしだいしだいに漠然ぼんやりする。同時に囲炉裏の真中まなかに山の

ようにくべた炭の色が、ほてり返って、少しずつ赤く浮き出すように思われた。まるで、自分は坑あなの底へ滅入めいりこ込んで行く、火はこれに反して坑からだんだん競り上せがって来る、——ざっと、そんな気分がした。時にぱっと部屋中が明るくなった。見ると電気灯が点ついた。

「飯でも食うべえ」

と一人が云うと、みんな忘れものを思い出したように、

「飯を食って、また交替か」

「今日は少し寒いぞ」

「雨はまだ降ってるのか」

「どうだか、表へ出て仰向あおむいて見な」

などと、口々に罵ののりながら、立って、階下段はしごだんを下りて行つた。自分は広い部屋にたった一人残された。自分のほかにいるものは病人の金さんばかりである。この金さんがやつぱり微かすかな声を出して唸うなってるようだ。自分は囲炉裏の前に手を翳かざして胡坐を組みながら、横を向いて、金さんの方を見た。頭は出ていない。足も引つ込ましている。金さんの身体からだは一枚の布団ふとんの中で、小さく平つたくなっている。気の毒なほど小さく平つたく見えた。その内唸うちうなり声こえも、どうにか、こうにかやんだようだから、また顔の向むきを易かえて、囲炉裏の中を見詰めた。ところがなんだか金さんが気に掛

かつてたまらないから、また横を向いた。すると金さんはやつぱり一枚の布団の中で、小さく平ったくなっている。そうして、森しんとしている。生きてるのか、死んでるのか、ただ森としている。

唸られるのも、あんまり気味の好いもんじゃないが、こう静かにしていられるとなお心配になる。心配の極きよくは怖こわくなつて、ちよつと立ち懸けたが、まあ大丈夫だろう、人間はそう急に死ぬもんじゃないと、度胸を据すえてまた尻を落ちつけた。

ところへ二三人、下からどやどやと階下段はしごだんを上がつて来た。もう飯を済ましたんだろうか、それにしては非常に早いかと、心持上がり段の方を眺ながめていると、思も寄らないものが、現れた。――

―黒か紺こんか色の判然はつきりしない筒服つつぽうを着ている。足は職人の穿はくような細い股引ももひきで、色はやはり同じ紺である。それでカンテラカンテラを提さげている。のみならず二人ふたありが二人とも泥だらけになって、濡ぬれてる。そうして、口を利きかない。突っ立ったまま自分の方をぎろりと見た。まるで強盗としきやあ思えない。やがて、カンテラカンテラを抛ほうり出すと、釦ボタンを外はずして、筒袖つつぽうを脱いだ。股引も脱いだ。壁に掛けてある広袖ひろそでを、めりやすの上から着て、尻の先に三尺帯をぐるりと回しながら、やっぱり無言のまま、二人してずしりずしりと降りて行った。するとまた上がって来た。今度こんだのも濡れている。泥だらけである。カンテラカンテラを抛り出す。着物を着換える。ずしんず

しんと降りて行く。とまた上がって来る。こう云う風に入代り、入代りして、何でもよほど来た。いずれも底の方から眼球めだまを光らして、一遍だけはきつと自分を見た。中には、

「手前てめえは新前しんめえだな」

と云ったものもある。自分はただ、

「ええ」

と答えて置いた。幸いさいわ今度はさっきのようにむやみには冷やかされずに、まあ無難ぶなんに済んだ。上がって来るものも、来るものも、みんな急いで降りて行くんで、調戲からかう暇がなかったんだろう。その代り一人に一度ずつは必ず睨にらまれた。そうこうしている内に、

上がって来るものがようやく絶えたから、自分はようやく寛容くつろいだ思いをして、囲炉裏いろりの炭の赤くなったのを見詰めて、いろいろ考え出した。もちろん纏まりまとようのない、かつ考えれば考えるほど馬鹿になる考えだが、火を見詰えていると、炭の中にそう云う妄想もうがちらちらちら燃えてくるんだから仕方がない。とうとう自分の魂が赤い炭の中へ拔出して、火気かつきに煽あおられながら、むやみに踊をおどってるような変な心持になった時に、突然、

「草臥くたびれたろうから、もう御休みなさい」と云われた。

見ると、さっきの婆さんが、立っている。やっぱり櫛掛たすきがけのまま

である。いつの間に上まがって来たものか、ちつとも気がつか
なかった。自分の魂が遠慮なく火の中を馳かけ廻めぐって、艶子つやこさんにな
なったり、澄江すみえさんになったり、親爺おやじになったり、金さんになつ
たり、――被布ひふやら、廂髪ひさしがみやら、赤毛布あかげつとやら、唸うなり声こえやら、揚饅あげまんじ
頭ゆうやら、華嚴けごんの滝やら――幾多無数の幻影まぼろしが、囲炉裏おどの中に躍おどり
狂くるって、立ち騰のぼる火の気の裏うちに追いつ追われつ、日向ひなたに浮かぶ塵ちり
と思おもわれるまで夥おびただしく出て来た最中に、はっと気がついたんだか
ら、眼の前にいる婆さんが、不思議なくらい変であつた。しかし
寝ろと云う注意だけは明かに耳に聞えたに違ちがないから、自分はた
だ、

「ええ」

と答えた。すると婆さんは後ろの戸棚を指して、

「布団は、あすここに這入ってるから、独で出して御掛けなさい。

一枚三銭ずつだ。寒いから二枚はいるでしょう」

と聞くから、また

「ええ」

と答えたら、婆さんは、それ限何にも云わずに、降りて行った。

これで、自分は寝てもいいと云う許可を得たから、正式に横になっても剣突を食う恐れはあるまいと思つて、婆さんの指図通り

戸棚を明けて見ると、あつた。布団がたくさんあつた。しかし

ずれも薄汚いものばかりである。自宅^{うち}で敷いていたのはまるで比較にならない。自分は一番上に乗ってるのを二枚、そつとおろした。そうして、電気灯の光で見た。地^じは浅黄^{あさぎ}である。模様は白である。その上に垢^{あか}が一面に塗りつけてあるから、六分方色^{ろくぶがた}変りがして、白い所などは、通例なら我慢のできにくいほどどろんと、化けている。その上すこぶる堅い。搗^うき立ての伸^のし餅^{もち}を、金^{かな}巾^{きん}に包んだように、綿は綿でかたまって、表布^{かわ}とはまるで縁故がないほどの、こちこちしたものである。

自分はこの布団を畳の上へ平^{ひらた}く敷いた。それから残る一枚を平く掛けた。そうして、襯衣^{シャツ}だけになって、その間に潜^{もぐ}り込んだ。

湿^{しめ}っぽい中を割り込んで、両足をうんと伸ばしたら踵^{かかと}が畳の上へ出たから、また心持引っ込みました。延ばす時も曲げる時も、不断のように軽くなやかには行かない。みしりと音がするほど、関節が窮屈に硬張^{こわば}って、動きたがらない。じっとして、布団の中に膝頭^{ひざがしら}を横たえていると、倦怠^{だるい}のを通り越して重い。腿^{もも}から下を切り取って、その代りに筋金入^{すじがねい}りの義足をつけられたように重い。まるで感覚のある二本の棒である。自分は冷たくって重たい足を苦^くに病^やんで、頭を布団の中に突っ込んだ。せめて頭だけでも暖^{あつたか}にしたら、足の方でも折れ合ってくれるだろうとの、はかない望みから出た窮策であつた。

しかしさすがに疲れている。寒さよりも、足よりも、布団の臭においよりも、煩悶はんもんよりも、厭世えんせよりも——疲れている。実に死ぬ方が楽らくなほど疲れ切っていた。それで、横になるとすぐ——畳から足を引っ込まして、頭を布団に入れるだけの所作しよさを仕遂しとげたと思うが早いか、眠ねてしまった。ぐうぐう正体なく眠てしまった。これから先きは自分の事ながらとうてい書けない。……

すると、突然針で背中を刺された。夢に刺されたのか、起きていて、刺されたのか、感じはすこぶる曖昧あいまいであつた。だからそれだけの事ならば、針だろうが刺とげだろうが、頓着とんじやくはなかつたろう。正気の針を夢の中に引摺ひきずり込んで、夢の中の刺を前後不覚の床とこの

下に埋^{うず}めてしまう分の事である。ところがそうは行かなかった。
と云うものは、刺されたなと思いつながら、針の事を忘れるほど
にうっとりとなると、また一つ、ちくりとやられた。

今度は大きな眼を開^あいた。ところへまたちくりと来た。おやと
驚^{とたん}く途端にまたちくりと刺した。これは大変だとうやく気がつ
きがけに、飛び上るほど劇^{はげ}しく股^{もも}の辺^{あたり}をやられた。自分はこの時
始めて、普通の人間に帰った。そうして身体中^{からだじゅう}至る所がちくちく
しているのを発見した。そこでそつと襯衣^{シャツ}の間から手を入れて、
背中を撫^なでて見ると、一面にざらざらする。最初指先が肌に触れ
た時は、てつきり劇烈な皮膚病に罹^{かか}ったんだと思った。ところが

指を肌に着けたまま、二三寸引いて見ると、何だか、ばらばらと落ちた。これはただ事でないとたちまち跳ね起きて、襯衣一枚の見苦しい姿ながら囲炉裏の傍へ行つて、親指と人差指の間に押えた、米粒ほどのものを、検査して見ると、異様の虫であつた。実はこの時分には、まだ南京虫を見た事がないんだから、はたしてこれがそうだとは断言出来なかつたが——何だか直覺的に南京虫らしいと思つた。こう云う下卑た所に直覺の二字を濫用しては濟まんが、ほかに言葉がないから、やむを得ず高尚な術語を使つた。さてその虫を検査しているうちに、非常に悪らしくなつて来た。囲炉裏の縁へ乗せて、ぴちりと親指の爪で押し潰したら、云

うに云われぬ青臭い虫であつた。この青臭い臭氣においを嗅ぐと、何となく好い心持になる。——自分はこんな醜い事を真面目まじめにかかねばならぬほど狂違染きちがいじみていた。実を云うと、この青臭い臭氣を嗅ぐまでは、恨うらみを霽はらしたような気がしなかったのである。それだから捕とつては潰し、捕つては潰し、潰すたんびに親指の爪を鼻へあてがつて嗅いでいた。すると鼻の奥へ詰つて来た。今にも涙が出そうになる。非常に情なさけない。それなのに、爪を嗅ぐと愉快である。この時二階下で大勢が一度にどつと笑う声がした。自分は急に虫を潰すのをやめた。広間を見渡すと誰もいない。金さんだけが、平たくなつて静かに寝ている。頭も足も見えない。そのほか

にたった一人いた。もつとも始めて気がついた時は人間とは思わなかった。向うの柱の中途から、窓の敷居へかけて、帆木綿ほもめんのよ
うなものを白く渡して、その幅のなかに包まっていたから、何だ
か気味が悪かった。しかしよく見ると、白い中から黒いものが斜はす
に出ている。そうしてそれが人間の毬栗頭いがぐりあたまであつた。――広い部
屋には、自分とこの二人を除いて、誰もいない。ただ電気灯がか
んかん点つついている。大変静かだ、と思うとまた下座敷でわつと
笑った。さっきの連中か、または作業を済まして帰って来たもの
が、大勢寄つてふざけ散らしているに違ない。自分はぼんやりし
て布団のある所まで帰って来た。そうして裸体はだかになつて、襯衣を

振るって、枕元にある着物を着て、帯を締めて、一番しまいに敷いてある布団を叮嚀ていねいに畳んで戸棚へ入れた。それから後はどうして好いか分らない。時間は何時なんじだか、夜はとうていまだ明けそうにしない。腕組をして立って考えていると、足の甲がまたむずむずする。自分は堪こらえ切れずに、

「えっ畜生」

と云いながら二三度小踊をした。それから、右の足の甲で、左の上を擦こすって、左の足の甲で右の上を擦こすって、これでもかと齒は軋ぎしりをした。しかし表へ飛び出す訳にも行かず、寝る勇氣はなし、と云って、下へ降りて、車座の中へ割り込んで見る元氣は固もりな

い。さつき毒突どくづかれた事を思い出すと、南京虫よりよっぽど厭いやだ。夜が明ければいい、夜が明ければいいと思いながら、自分は表へ向いた窓の方へ歩いて行つた。するとそこに柱があつた。自分は立ちながら、この柱に倚よつ掛つた。背中をつけて腰を浮かして、足の裏で身体を持たしていると、両足がずるずる畳の目を滑すべつてだんだん遠くへ行つちまう。それからまた真直まっすぐに立つ。またずるずる滑すべる。また立つ。まずこんな事をしていた。幸い南京虫ナンキンムシは出て来なかつた。下では時々どつと笑う。

いても立つてもと云うのは喩たとえだが、そのいても立つてもを、実際に経験したのはこの時である。だから坐るとも立つとも方かたのつ

かない運動をして、中途半端に紛^{まぎ}らかしていた。ところがその運動をいつまで根^{こん}氣にやったものか覚えていない。いとど疲れてい
る上に、なお手足を疲^{こた}らして、いかな南京虫でも応^{こた}えないほど疲
れ切ったんで、始めて寝たもんだろう。夜が明けたら、自分が摺^す
り落ちた柱の下に、足だけ延ばして、背を丸く蹲^{つずくま}踞^まっていた。

これほど苦しめられた南京虫も、二日三日と過^たつにつれて、だ
んだん痛くなくなったのは妙である。その実、一箇月ばかりした
ら、いくら南京虫がいようと、まるで米粒でも、ぞろぞろ転がっ
てるくらいに思^{おも}って、夜はいつでも、ぐっすり安眠した。もつと
も南京虫の方でも日^ひ数^{かず}を積むに従^{したが}って遠慮^{えんよ}してくるそうである。

その証拠には新来きたてのお客には、べた一面にたかつて、夜通し苛めいじるが、少し辛抱していると、向うから、愛想あいそをつかして、あまり寄りつかなくなるもんだと云う。毎日食ってる人間の肉は自然鼻につくからだとも教えたものがあるし、いや肉の方にそれだけの品格が出来て、シ・キ・臭くなるから、虫も恐れ入るんだとも説明したものがある。そうして見るとこの南京虫と坑夫とは、性質たちがよく似ている。おそらく坑夫ばかりじゃあるまい、一般の人類の傾向と、この南京虫とはやはり同様の心理に支配されてるんだろう。だからこの解釈は人間と虫けらを概括がいかつするところに面白味があつて、哲学者の喜びそうな、美しいものであるが、自分の考え

を云うと全くそうじゃないらしい。虫の方で気兼きがねをしたり、贅沢ぜいたくを云ったりするんじゃないかって、食われる人間の方で習慣の結果、無神経になるんだろうと思う。虫は依然として食ってるが、食われても平気でいるに違ない、もっとも食われて感じないのも、食われなくって感じないのも、趣おもむきこそ違え、結果は同じ事であるから、これは實際上議論をしても、あまり役に立たない話である。

そんな無用の弁は、どうでもいいとして、自分が眼を開けて見たら、夜は全く明け放れていた。下ではもうがやがや云っている。嬉しかった。窓から首を出して見ると、また雨だ。もっとも

判然^{はつきり}とは降っていない。雲の濃いのが糸になり損^{そく}なつて、なつただけが、細く地へ落ちる気色^{けしき}だ。だからむやみに濛々^{もつもつ}とはしていない。しだいしだいに雨の方に片づいて、片づくに従つて糸の間が透^すいて見える。と云つても見えるものは山ばかりである。しかも草も木も至^{とほ}つて乏^{うるおい}しい、潤のない山である。これが夏の日に照りつけられたら、山の奥でもさぞ暑かろうと思われるほど赤く禿^はげてぐるりと自分を取り捲^まいている。そうして残らず雨に濡^ぬれてゐる。潤い気^けのないものが、濡れているんだから、土器^{かわらけ}に霧を吹いたように、いくら濡れても濡れ足りない。その癖寒い気持がする。それで自分は首を引っ込めようとしたら、ちよつと眼につい

た。――手拭てぬぐいを被かぶつて、藁わらを腰に当てて、筒服つつぽうを着た男が二三
人、向うの石垣の下にあらわれた。ちようど昨日きのうジ・ヤン・ボーの
通った路を逆に歩いて来る。遠くから見ると、いかにもしよぼ
しよぼして気の毒なほど憐れである。自分も今朝からああなるん
だなと、ふと気がついて見ると、人事ひとごととは思われないほど、向へ
行く手拭てぬぐいの影――雨に濡ぬれた手拭の影が情なさけなかった。すると雨の
間からまた古帽子が出て来た。その後あとからまた筒袖姿つつそですがたがあらわれ
た。何でも朝の番に当った坑夫がシ・キ・ヘ這入はいる時間に相違ない。
自分はようやく窓から首を引き込めた。すると、下から五六人一
度にどやどやと階下段はしごだんを上あつて来る。来たなと思ったが仕方がな

いから懷手ふところをして、柱にもたれていた。五六人は見る間に、同じ出立いでたちに着更えて下りて行つた。後あとからまた上がってくる。また筒袖になつて下りて行く。とうとう飯場はんばにいる当番はことごとく出払つたようだ

こう飯場中活動して来ると、自分も安閑としちゃいられない。と云つて誰も顔を御洗いなさいとも、御飯を御上がんなさいとも云いに来てくれない。いかな坊っちゃんも、あまり手持無沙汰てもちぶさた過ぎて困つちまつたから、思い切つて、のこのこ下りて行つた。心は無論落ついぢやいないが、態度だけはまるで宿屋へ泊つて、茶代を置いた御客のようであつた。いくら恐縮しても自分には、こ

れより以外の態度が出来ないんだから全くの生息子きむすこである。下りて見ると例の婆さんが、襷たすきがけをして、草鞋わらじを一足ぶら下げて奥から駆けて来たところへ、ばったり出逢であった。

「顔はどこで洗うんですか」

と聞くと、婆さんは、ちよつと自分を見たなりで、

「あっち」

と云い捨てて門口かどぐちの方へ行つた。まるで相手にしちやいない。自分にはあ・っ・ちの見当けんとうがわからなかったが、とにかく婆さんの出て来た方角だろうと思つて、奥の方へ歩いて行つたら、大きな台所へ出た。真中に四斗樽しとだるを輪切にしたようなお櫃はちが据すえてある。あ

の中に南京米ナンキンまいの炊たいたのがいっぱい詰ってるのかと思ったら、――
――何しろ自分が三度三度一箇月食っても食い切れないほどの南京
米なんだから、食わない前からうんざりしちまった。――顔を洗
う所も見つけた。台所を下りて長い流の前へ立って、冷たい水
で、申し訳のために頬ほっぺた辺を撫なでて置いた。こうなると叮嚀ていねいに顔な
んか洗うのは馬鹿馬鹿しくなる。これが一步進むと、顔は洗わな
くつても宜いいものと度胸が坐ってくるんだろう。昨日きのうの赤毛布あかげつとや
小僧は全くこう云う順序を踏んで進化したものに違ない。

顔はようやく自力で洗った。飯はどうなる事かと、またのその
そ台所あがへ上った。ところへ幸さいわい婆さんが表から帰って来て膳ぜん立て

をしてくれた。ありがたい事に味噌汁がついていたんで、こいつを南京米の上から、ざっと掛けて、ざくざくと掻き込んだんで、今度は壁土の味を噛み分ないで済んだ。すると婆さんが、

「御飯が済んだら、初さんがシキへ連れて行くって待ってるから、早くおいでなさい」

と、箸も置かない先から急ぎ立てる。実はもう一杯くらい食わないと身体が持つまいと思ってたところだが、こう催促されて見ると、無論御代りなんか盛う必要はない。自分は、

「はあ、そうですか」

と立ち上がった。表へ出て見ると、なるほど上り口に一人掛けて

いる。自分の顔を見て、

「御前^{おめえ}か、シ・キ・へ行くなあ」

と、石でもぶつ欠くような勢いで聞いた。

「ええ」

と素直に答えたら、

「じゃ、いつしよに来ねえ」

と云う。

「この服装^{なり}でも好いんですか」

と叮嚀^{ていねい}に聞き返すと、

「いけねえ、いけねえ。そんな服装で這^へ入^えれるもんか。ここへ親

分とこれから一枚いちめえ借りて来てやったから、此服こいつを着るがいい」
と云いながら、例の筒袖つつそでを抛ほうり出した。

「そいつが上だ。こいつが股引ももひきだ。そら」

とまた股引を抛なげつけた。取りあげて見ると、じめじめする。

所々に泥が着いている。地じは小倉こくららしい。自分もとうとうこの御お

仕着しきせを着る始末になつたんだなと思ひながら、緋かすりを脱いで上下うへしたと

も紺揃こんぞろいになつた。ちよつと見ると内閣の小使のようだが、心持か

ら云うと、小使を拝命した時よりも遥はるかに不景氣であつた。これで

支度したくは出来たものと思込んで土間へ下りると、

「おつと待った」

と、初さんがまた勇み肌の声を掛けた。

「これを尻けつの所へ当てるんだ」

初さんが出してくれたものを見ると、三斗俵坊さんだらぼつちのような藁わら布団ぶとんに紐ひもをつけた変挺へんてこなものだ。自分は初さんの云う通り、これを臀部でんぶへ縛しばりつけた。

「それが、ア・テ・シ・コだ。好よしか。それから鑿のみだ。こいつを腰こしん所へ差してと……」

初さんの出した鑿を受け取って見ると、長さ一尺四五寸もあるうと云う鉄の棒で、先が少し尖とがっている。これを腰へ差す。

「ついでにこれも差すんだ。少し重いぜ。大丈夫か。しっかり受

け取らねえと怪我をする」

なるほど重い。こんな槌つちを差してよく坑あなの中が歩けるもんだと思う。

「どうだ重いか」

「ええ」

「それでも軽いうちだ。重いになると五斤ある。——いいか、差せたか、そこでちよつと腰を振って見な。大丈夫か。大丈夫ならこれを提さげるんだ」

とカンテラを出しかけたが、

「待ったり。カンテラの前に一つ草鞋わらじを穿はいちまいねえ」

草鞋わらじの新しいのが、上り口にある。さつき婆さんが振ぶら下げてたのは、大方これだろう。自分は素足すあしの上へ草鞋を穿はいた。緒おを踵かかとへ通してぐつと引くと、

「驚癡どじだなあ。そんなに締める奴があるかい。もっと指いびの股こを寛ゆるめろい」

と叱しられた。叱しられながら、どうにか、こうにか穿はいてしまう。

「さあ、これでいよいよおしまいだ」

と初さんは饅頭笠まんじゅうがさとカンテラを渡した。饅頭笠と云うのか筍笠たけのこがさと
いうのか知らないが、何でも懲役人の被かぶるような笠であつた。その笠を神妙しんぴょうに被かる。それからカンテラを提さげる。このカンテラは

提げるようにできている。恰好は二合入りの石油缶とも云うべきもので、そこへ油を注す口と、心を出す孔が開いてる上に、細長い管が食つついて、その管の先がちよつと横へ曲がると、すぐ膨らんだカップになる。このカップへ親指を突っ込んで、その親指の力で提げるんだから、指五本の代りに一本で事を済ますはなはだ実用的のものである。

「こう、穿めるんだ」

と初さんが、勝栗のような親指を、カンテラの孔の中へ突込んだ。旨い具合にはまる。

「そうら」

初さんは指一本で、カンテラを柱時計の振子のように、二三度振って見せた。なかなか落ちない。そこで自分も、同じように、調子をとって揺うごして見たがやっぱり落ちなかった。

「そうだ。なかなか器用だ。じゃ行くぜ、いいか」

「ええ、好よござんす」

自分は初さんに連れられて表へ出た。所が降っている。一番先へ笠かさへあたった。仰向あおもむいて、空模様を見ようとしたら、顎あごと、口と、鼻へぽつぽつとあたった。それからあとは、肩へもあたる。足へもあたる。少し歩くうちには、身体中じめじめして、肌へ抜けた湿気が、皮膚の活気で蒸むし返される。しかし雨の方が寒いん

で、身体のとぼりがだんだん冷めて行くような心持であつたが、坂へかかると初さんがむやみに急ぎ出したんで、濡れながらも、毛穴から、雨を弾き出す勢いで、とうとうシキの入口まで来た。

入口はまず汽車の隧道の大きいものと云つて宜しい。蒲鉾形の天辺は二間くらいの高さはあるだろう。中から軌道が出て来るところも汽車の隧道に似ている。これは電車が通う路なんだそうだ。自分は入口の前に立って、奥の方を透かして見た。奥は暗かった。

「どうだここが地獄の入口だ。這入れるか」

と初さんが聞いた。何だか嘲弄ちやうろうの語気を帯びている。さつき飯場はんばを出て、ここまで来る途中でも、方々の長屋の窓から首を出して、

「昨日きのうのだ」

「新来しんきだ」

と口々に罵ののっていたが、その様子を見ると単に山の中に閉じ込められて物珍らしさの好奇心とは思えなかった。その言葉の奥底にはきつと愚弄ぐろうの意味がある。これを布衍ふえんして云うと、一つには貴様もとうとうこんな所へ転げ込んで来た、いい気味だ、ざまあ見ろと云う事になる。もう一つは御気の毒だが来たって駄目だよ。

そんな脂やにっこい身体からだで何が勤まるものかと云う事にもなる。だから「昨日きのうのだ」「新来しんきだ」と騒ぐうちには、自分が彼らと同様の苦痛を嘗なめなければならぬほど墮落したのを快く感ずると共に、とうていこの苦痛には堪たえがたい奴だとの輕蔑けいべつさえ加わっている。彼らは他人ひとを彼らと同程度に引き摺ずり落して喝采かつさいするのみか、ひとたび引き摺り落したものを、もう一返足いっぺんの下まで蹴落けおとして、墮落は同程度だが、墮落に堪たえる力は彼らの方がかえって上だとの自信をほのめかして満足するらしい。自分は途上みちみち「昨日のだ」と聞きたんびに、懲役笠ちようえきがせで顔を半分隠しながら通り抜けて、シキの入口まで来た。そこで初さんがまた愚弄ぐろうしたんだから、自

分は少しむっとして、

「這はい入れますとも。電車さえ通かよってるじゃありませんか」

と答えた。すると初さんが、

「なに這入れる？ 豪義ごうぎな事を云うない」

と云った。ここで「這入れません」と恐れ入ったら、「それ見ろ」と直すぐこなされるにきまつてる。どっちへ転んでも駄目なんだから別に後悔もしなかった。初さんは、いきなり、シキの中へ飛び込んだ。自分も続いて這入った。這入って見ると、思ったよりも急に暗くなる。何だか足元がおっかなくなり出したには降参した。雨が降っていても外は明かるいものだ。その上軌道レールの上はと

にかく、両側はすこぶる泥ぬかっている。それなのに初ちゅうさんは中ちゅうつ腹はらでずんずん行く。自分も負けない気でずんずん行く。

「シ・キの中でおとなしくしねえと、すのこの中へ抛ほうり込まれるから、用心しなくっちゃあいけねえ」

と云いながら初はつさんは突然暗い中で立ち留どまった。初はつさんの腰には鑿のみがある。五斤の槌つちがある。自分は暗い中で小さくなって、

「はい」

と返事をした。

「よしか、分ったか。生きて出る料簡りょうけんなら生意気にシ・キなんかへ這入らねえ方が増しだ」

これは向うむきになつて、初さんが歩き出した時に、半分は独ひとり言ことのように話した言葉である。自分は少からず驚いた。坑あなの中は反響が強いので、初さんの言葉がわんわんわんと自分の耳へ跳はねつ返つて来る。はたして初さんの言う通りなら、飛んだ所へ這入ったもんだ。実は死ぬのも同然な職業であればこそ坑夫になるうと云う気も起して見たんだが、本当に死ぬなら——こんな怖こわい商売なら——殺されるんなら——すのこの中へ抛なげ込まれるなら——すのことは全体どんなもんだろうと思ひ出した。

「すのことはどんなもんですか」

「なに？」

と初さんが後を振り向いた。

「すのことはどんなもんですか」

「穴だ」

「え？」

「穴だよ。――鉋あらがねを抛ほうり込んで、纏まとめて下へ降さげる穴だ。鉋といっしよに抛り込まれて見ねえ……」

で言葉を切つてまたずんずん行く。

自分はちよつと立ち留った。振り返ると、入口が小さい月のように見える。這入はいるときは、これがシキしきなラと思つた。聞いたほどもないと思つた。ところが初さんに威嚇おどかされてから、いか

な平凡な隧道^{トンネル}も、大いに容子^{ようす}が变つて来た。懲役笠^{ちやうえきがせ}をたたく冷たい雨が恋しくなった。そこで振り返ると、入口が小さい月のように見える。小さい月のように見えるほど奥へ這入ったなと、振り返って始めて気がついた。いくら曇^{なつ}っていてもやっぱり外が懐かしい。真黒な天井^{てんじょう}が上から抑^{おさ}えつけてるのは心持のわるいものだ。しかもこの天井がだんだん低くなつて来るように感ぜられる。と思うと、軌道^{レール}を横へ切れて、右へ曲った。だらだら坂の下りになる。もう入口は見えない。振返っても真暗だ。小さい月のような浮世の窓は遠慮なくぴしゃりと閉つて、初さんと自分はだんだん下の方へ降りて行く。降りながら手を延ばして壁^{さわ}へ触つて

見ると、雨が降ったように濡ぬれている。

「どうだ、尾ついて来るか」

と、初さんが聞いた。

「ええ」

とおとなしく答えたら、

「もう少しで地獄の三丁目へ来る」

と云ったなり、また二人とも無言になった。この時行く手かたの方に一点の灯あかりが見えた。暗闇くらやみの中の黒猫の片眼のように光ってる。カ・ン・テ・ラ・の灯ひなら散らつくはずだが、ちつとも動かない。距離もよく分らない。方角も真直まっすぐじゃないが、とにかく見える。もし坑あなの

中が一本道だとすれば、この灯を目懸^{めが}けて、初さんも自分も進んで行くに違ない。自分は何にも聞かなかったが、大方これが地獄の三丁目なんだろうと思って、這入って行つた。すると、だらだら坂がようやく尽きた。路は平らに向うへ廻り込む。その突き当りに例の灯^ひが点^ついている。さつきは鼻の下に見えたが、今では眼と擦^{すれすれ}々の所まで来た。距離も間近くなつた。

「いよいよ三丁目へ着いた」

と、初さんが云う。着いて見ると、坑^{あな}が四五畳ほどの大^{おお}きさに広がって、そこに交番くらいな小屋がある。そうしてその中に電氣灯が点いている。洋服を着た役人が二人ほど、椅子の対^{むか}い合せに

洋卓^{テーブル}を隔てて腰を掛けていた。表^{おもて}には第一見張所とあつた。これは坑夫の出入^{でいり}だの労働の時間だのを検査する所だと後から聞いて、始めて分つたんだが、その当時には何のための設備だか知らなかったもんだから、六七人の坑夫が、どす黒い顔を揃^{そろ}えて無言のまま、見張所の前に立っていたのを不審に思った。これは時間を待ち合^あわして交替するためである。自分は腰に鑿^{のみ}と槌^{つち}を差してカンテラ^{カンテラ}さえ提^さげてはいるが、坑夫志願というんで、シキの様子を見に這入^{はい}っただけだから、まだ見習にさえ採用されていないと云う訳で、待ち合^あわす必要もないものと見えて、すぐこの溜^{たまり}を通り越した。その時初さんが見張所の硝子窓^{ガラスまど}へ首を突っ込んで、

ちよいと役人に断^{ことわ}ったが、役人は別に自分の方を見向もしなかった。その代り立っていた坑夫はみんな見た。しかし役人の前を憚^{はばか}ってだろう、全く一言^{ひとこと}も口を利^きいたものはなかった。

溜^なを出るや否^{あな}や坑の様子が突然変った。今までは立ってあるいても、背延^{せいの}びをしても届きそうにもしなかった天井が急に落ちて来て、真直^{まっすぐ}に歩くと時々頭へ触^{さわ}るような気持がする。これがものの二寸も低かろうものなら、岩へぶつかって眉間^{みけん}から血が出るに違^{ちが}ないと思うと、松原をあるくように、ありったけの背で、野風^{のふう}雑^{ぞう}にややって行けない。おっかないから、なるべく首を肩の中へ縮め込んで、初さんに食っついて行つた。もつともカンテラは

さつき点^っけた。

すると三尺ばかり前にいる初さんが急に四^{よつ}ん這^ばいになった。おや、滑^{すべ}って転んだ。と思つて、後^{うしろ}から突つ掛かりそうなところを、ぐつと足を踏ん張った。このくらいにして喰い留めないと、坂だから、前へのめる恐^{おそれ}がある。心持腰から上を反^そらすようにして、初さんの起きるのを待ち合^あわしていると、初さんはなかなか起きない。やっぱり這^はっている。

「どうか、しましたか」

と後から聞いた。初さんは返事もしない。——はてな——怪我でもしやしないかしら——もう一遍聞いて見ようか——すると初さ

んはこのこ歩き出した。

「何ともなかったですか」

「這うんだ」

「え？」

「這うのだてえ事よ」

と初さんの声はだんだん遠くなってしまう。その声で自分は不審を打った。いくら向うむきでも、普通なら明かに聞きとられべき距離から出るのに、急に潜^{もぐ}ってしまう。声が細いんじゃない。当り前の初さんの声が袋のなかに閉じ込められたように曖昧^{あいまい}になる。こりやただ事じゃないと気がついたから、透^{すか}して見るとよう

やく分った。今までは尋常に歩けた坑が、ここでたちまち狭くせまなつて、這わなくっちゃ抜けられなくなっている。その狭い入口から、初さんの足が二本出ている。初さんは今胴を入れたばかりである。やがて出ていた足が一本這入った。見ているうちにまた一本這入った。これで自分も四つん這いにならなくっちゃ仕方がないと諦めあきらをつけた。「這うんだ」と初さんの教えたのもけつして無理じゃないんだから、教えられた通り這った。ところが右にはカン・テラをを提さげている。左の手の平ひらだけを惜おし気もなく氷のような泥だか岩だかへな土だか分らない上へぐしゃりと突いた時は、寒さが二の腕を伝わって肩口から心臓へ飛び込んだような気持が

した。それでカンテラを下へ着けまいとすると、右の手が顔とすれすれになって、はなはだ不便である。どうしたもんだろうと、この姿勢のままじっとしていた。そうして、右の手で宙に釣っているカンテラを見た。ところへぽたりと天井てんじょうからしずくが垂れた。カンテラの灯ひがじいと鳴った。油煙あごが顎から頬へかかる。眼へも這入はいった。それでもこの灯を見詰めていた。すると遠くの方でかあん、かあん、と云う音がする。坑夫が作業をしているに違ないが、どのくらい距離があるんだか、どの見当けんとうにあたるんだか、いっこう分らない。東西南北のある浮世の音じゃない。自分はこの姿勢でともかくも二三歩歩き出した。不便は無論不便だ

が、歩けない事はない。ただ時々しずくが落ちてカンテラのじいと鳴るのが気にかかる。初さんは先へ行ってしまった。頼たよりはカンテラ一つである。そのカンテラがじいと鳴って水のために消えそうになる。かと思うとまた明かるくなる。まあよかったと安心する時分に、またぼたりと落ちて来る。じいと鳴る。消えそうになる。非常に心細い。実は今までも、しずくは始終垂しじゅうれていたんだが、灯ひが腰から下にあるんで、いっこう気がつかなかったんだろう。灯が耳の近くへ来て、じいと云う音が聞えるようになってから急に神経が起って来た。だから這う方はなお遅くなる。しかもまだ三足しか歩いぢやいない。ところへ突然初さんの声がした。

「やい、好い加減に出て来ねえか。何をぐずぐずしているんだ。

——早くしないと日が暮れちまうよ」

暗いなかで初さんはたしかに日が暮れちまうと云った。

自分は這はいながら、咽喉のどぼとけ仏の角かどを尖とがらすほどに顎あごを突き出し

て、初さんの方を見た。すると一間いっけんばかり向うに熊の穴見たよう

なものがあつて、その穴から、初さんの顔が——顔らしいものが

出ている。自分があまり手間取るんで、初さんが屈こんでこつちを

覗のぞき込こみでるところであつた。この一間をどうして抜け出した

か、今じゃ善く覚えていない。何しろできるだけ早く穴まで来

て、首だけ出すと、もう初さんは顔を引っ込まして穴の外に立つ

ている。その足が二本自分の鼻の先に見えた。自分はやれ嬉しや
と狭い所を潜り抜けた。

「何をしていたんだ」

「あんまり狭いもんだから」

「狭いんで驚いちゃ、シキへは一足だつて踏ん込めっこはねえ。

陸のように地面はねえ所だくらいは、どんな頓珍漢だつて知つて
るはずだ」

初さんはたしかに坑の中は陸のように地面のない所だと云つ
た。この人は時々思い掛けない事を云うから、今度もたしかにと
ただし書をつけて、その確実な事を保証して置くのである。自分

は何か云い訳をするたんびに、初さんから容赦なくやっつけられるんで、大抵は黙っていたが、この時はつい、

「でもカ・ン・テ・ラが消えそうで、心配したもんですから」

と云っちゃまった。すると初さんは、自分の鼻の先へカ・ン・テ・ラを差しつけて、徐に自分の顔を検査し始めた。そうして、命令を下した。

「消して見ねえ」

「どうしてですか」

「どうしても好いから、消して見ねえ」

「吹くんですか」

初さんはこの時大きな声を出して笑った。

自分は喫驚^{びっくり}して稀有^{けう}な顔をしていた。

「冗談^{じやうだん}じゃねえ。何が這入^へてると思う。種油^{たねあぶら}だよ、しずくぐらいで消^{けえ}てたまるもんか」

自分はこれでやっと安心した。

「安心したか。ハハハハ」

と初さんがまた笑った。初さんが笑うたんびに、坑^{あな}の中がみんな響き出す。その響が収まると前よりも倍静かになる。ところへかあん、かあんとどこかで鑿^{のみ}と槌^{つち}を使ってる音が伝わって来る。

「聞えるか」

と、初さんが顚あごで相図あずをした。

「聞えます」

と耳そばだを峙たててしていると、たちまち催促そそを受けた。

「さあ行こう。今度こんだあ後おくれないように跟ついて来な」

初さんはなかなか機嫌きげんがいい。これは自分が一も二もなく初さんにやられているせいだろうと思った。いくら手苛てひどくきめつけられても、初さんの機嫌きげんがいうちは結構であつた。こうなると得になる事がすなわち結構という意味になる。自分はこれほど墮落だらくして、おめおめ初さんの尻しりを嗅かいで行ったら、路が左の方に曲り込んでまた峻けわしい坂さかになった。

「おい下りるよ」

と初さんが、後^{うしろ}も向かず声を掛けた。その時自分は何となく東京の車夫を思い出して苦しいうちにもおかしかった。が初さんはそれとも気がつかず下^おり出した。自分も負けずに降りる。路は地面を刻んで段々になっている。四五間ずつに折れてはいるが、勘定したら愛宕^{あたごさま}様の高さぐらいはあるだろう。これは一生懸命になつて、いっしょに降りた。降りた時にほっと息を吐^つくと、その息が何となく苦しかった。しかしこれは深い坑^{あな}のなかで、空気の流通が悪いからとばかり考えた。実はこの時すでに身体^{からだ}も冒^{おか}されていたのである。この苦しい息で二三十間来るとまた模様が変った。

今度は初さんが仰向けあおもむに手を突いて、腰から先を入れる。腰から入れるような芸をしなければ通れないほど、坑あなの幅も高さも逼せまって来たのである。

「こうして抜けるんだ。好く見て置きねえ」

と初さんが云ったと思ったら、胴も頭もずる、ずると抜けて見えなくなった。さすが熟練の功はえらいもんだと思いながら、自分もまず足だけ前へ出して、草鞋わらじで探さぐりを入れた。ところが全く宙に浮いてるようで足掛りがちつともない。何でも穴の向うは、がっくり落おちか、それでも、よほど勾配こうばいの急な坂に違ないと見当けんとうをつけた。だから頭から先へ突っ込めばのめって怪我をするばかり

り、また足をむやみに出せば引つ繰り返るだけと覺つたから、足を棒のように前へ寝かして、そうして後へ手うしろを突いた。ところがこの所作しよさがはなはだ不味まずかつたので、手を突くと同時に、尻もべったり突いてしまった。ぴちやりと云った。ア・テ・シ・コを伝わつて臀部でんぶへ少々感じがあつた。それほど強く尻餅しりもちを搗ついたと見える。自分はしまったと思ひながらも直すぐ兩足を前の方へ出した。ずるりと一尺ばかり振ふら下げたが、まだどこへも届かない。仕方がないから、今度は手の方を前へ運ばせて、腰を押し出すように足を伸ばした。すると腿ももの所まで摺ずり落ちて、草鞋わらじの裏がようやく堅いものに乗った。自分は念のためこの堅いものをぴちやぴちや

足の裏でたた叩いて見た。大丈夫なら手を離してこの堅いものの上へ立とうと云う料簡りょうけんであつた。

「何で足ばかり、ばたばたやってるんだ。大丈夫だから、うんと踏ん張って立ちねえな。意久地いくじのねえ」

と、下から初さんの声がする。自分の胴から上は叱られると同時に、穴を抜けて真直に立った。

「まるで傘からかさの化物ばけもののようだよ」

と初さんが、自分の顔を見て云った。自分は傘の化物とは何の意味だか分らなかつたから、別に笑う気にもならなかつた。ただ

「そうですか」

と真面目に答えた。妙な事にこの返事が面白かったと見えて、初さんは、また大きな声を出して笑った。そうして、この時から態度が變つて、前よりは幾分いくぶんか親切になつた。偶然の事がどんな拍ひょう子うしで他の氣に入らないとも限らない。かえつて、氣に入つてやろうと思つて仕出しでかす芸術は大抵駄目なようだ。天巧てんこうを奪うような御世辞使はいまだかつて見た事がない。自分も我が身が可愛さに、その後ごいろいろ人の御機嫌を取つて見たが、どうも旨い結果うまいが出て来ない。相手がいくら馬鹿でも、いつか露見するから怖こわいもんだ。用意をして置いた挨拶あいさつで、この傘の化物に対する返事くらいに成功した場合はほとんどない。骨を折つて失敗するのは愚ぐ

だと悟ったから、近頃では宿命論者の立脚地から人と交際をして
いる。ただ困るのは演舌えんぜつと文章である。あいつは骨を折って準備
をしないと失敗する。その代りいくら骨を折ってもやっぱり失敗
する。つまりは同じ事なんだが、骨を折った失敗は、人の氣に入
らないでも、自分の弱点ぼろが出ないから、まあ準備をしてからやる
事になっている。いつかは初さんの氣に入ったような演説をした
り、文章を書いて見たいが、——どうも馬鹿にされそうでいけな
いから、いまだにやらずにいる。——それはここには余計な事だ
から、このくらいでやめてまた初さんの話を続けて行く。

その時初さんは、笑いながら、下から、自分に向って、

「おい、そう真面目くさらねえで、早く下りて来ねえな。日は短みじけえやな」

と云った。坑あなの中でカン・テ・ラを点けた、初さんはたしかに日は短えやなと云った。

自分が土の段を一二間下りて、初さんの立つてる所まで行くと、初さんは、右へ曲った。また段々が四五間続いている。それを降り切ると、今度は初さんが左へ折れる。そうしてまた段々がある。右へ折れたり左へ折れたり稲妻いなずまのように歩いて、段々を――さあ何町降なんちようりたか分らない。始めての道ではあるし、ことに暗い坑あなの中の事であるから自分には非常に長く思われた。ようやく

段々を降り切つて、だいぶ浮世とは縁が遠くなつたと思つたら急に五六畳の部屋に出た。部屋と云つても坑を切り広げたもので、上と下がすばまつて、腹の所が膨ふくらんでいるから、まるで酒甕さかがめの中へでも落込んだ有様である。あとから分つた話だが、これは作さ事場くじばと云うんで、技師の鑑定で、ここには鉋脈があるとなると、そこを掘り拡ひろげて作事場にするのである。だから通り路よりは自然広い訳で、この作事場を坑夫が三人一組で、請負うけおい仕事に引受ける。二週間と見積つたのが、四日で済む事もあり、高が五日くらいと踏んだ作事に半月以上食くらい込む事もある。こう云う訳で、シキのなかに路ができて、路のはたに銅脈さえ見つければ、御構おかまいな

くそこだけを掘り抜いて行くんだから、電車の通るシキの入口こそ、平らでもあり、また一条ひとすじでもあるが、下へ折れて第一見張所のあたりからは、右へも左へも条路えだみちができて、方々に作事場が建つ。その作事をしまうと、また銅脈を見つけては掘り抜いて行くんだから、シキの中は細い路だらけで、また暗い坑だらけである。ちようど蟻ありが地面を縦横に抜いて歩くようなものだろう。または書蠹のむしが本を食くらうと見立てても差し支さない。つまり人間が土の中で、銅あかがねを食くらって、食い尽すと、また銅を探し出して食いにゆくんでむやみに路がたくさんできてしまったのである。だから、いくらシキの中を通っても、ただ通るだけで作事場へ出なければ坑

夫には逢^あわない。かあんかあんという音はするが、音だけでは極^{きわ}めて淋^{さみ}しいものである。自分は初さんに連れられて、シ・キへ這^は入^いったが、ただシ・キの様子を見るのが第一の目的であつたためか、廻り道をして作事場へは寄らなかつたと見えて、坑夫の仕事をしているところは、この段々の下へ来て、初めて見た。――稲^{いな}妻^{ずま}形^{がた}に段々を下りるときは、むやみに下りるばかりで、いくら下りても尽きないのみか、人っ子一人に逢^あわないものだから、はなはだ心細かつたが、はじめて作事場へ出て、人間に逢つたら、大いに嬉しかった。

見ると丸太^{まるた}の上に腰をかけている。数は三人だつた。丸太は四^よ

つや丸太^{まるた}で、軌道^{レール}の枕木くらいなものだから、随分の重さである。どうして、ここまで運んで来たかとうてい想像がつかない。これは天井の陥落を防ぐため、少し広い所になると突っかい棒に張るために、シ・チ・ユ・ウが必要な作事場へ置いて行くんだそうだ。その上に二人腰^{ふたあり}を掛けて、残る一人が屈^{しゃが}んで丸太へ向いている。そうして三人の間には小さな木の壺^{つぼ}がある。伏せてある。一人がこの壺を上から抑^{おさ}えている。三人が妙な叫び声を出した。抑えた壺をたちまち挙げ^あげた。下から賽^{さい}が出た。——ところへ自分と初さんが這入った。

三人はひとしく眼を上げて、自分と初さんを見た。カンテラが

土の壁に突き刺してある。暗い灯が、ぎろりと光る三人の眼球を照らした。光ったものは実際眼球だけである。坑は固より暗い。明かるくなくつちやならない灯も暗い。どす黒く燃えて煙を吹いている所は、濁った液体が動いてるように見えた。濁った先が黒くなって、煙と変化するや否や、この煙が暗いものの中に吸い込まれてしまう。だから坑の中がぼうとしている。そうして動いている。

カンテラは三人の頭の上に刺さっていた。だから三人のうちで比較的判然見えたのは、頭だけである。ところが三人共頭が黒いので、つまりは、見えないのと同じ事である。しかも三つとも

集^{かたま}っていたから、なおさら変であつたが、自分が這^{はい}入るや否や、三つの頭はたちまち離れた。その間から、壺^{つぼ}が見えたのである。壺の下から賽^{さい}が見えたのである。壺と、賽と、三人の異^いな叫び声を聞いた自分は、次に三人の顔を見たのである。よくはわからない顔であつた。一人の男は頬骨^{ほおぼね}の一点と、小鼻の片傍^{かたわき}だけが、灯に映つた。次の男は額と眉^{まゆ}の半分に光が落ちた。残る一人は総体にぼんやりしている。ただ自分の持っていた、カンテラを四五尺手前から真向^{まっこう}に浴びただけである。――三人はこの姿勢で、ぎろりと眼を据^すえた。自分の方に。

ようやく人間に逢^あつて、やれ嬉^{うれ}しやと思つた自分は、この三対^{ついで}

の眼球めだまを見るや否や、思わずぴたりと立ち留った。

「手前てまえは……」

と云い掛けて、一人が言葉を切った。残る二人はまだ口を開ひらかない。自分も立ち留まったなり、答えなかった。——答えられなかった。すると

「新しんめえだ」

と、初さんが、威勢のいい返事をしてくれた。本当のところを白状すると、三人の眼球が光って、「手前は……」と聞かれた時は、初さんの傍そばにいる事も忘れて、ただおやつと思った。立すくむと云うのはこれだろう。立ちすくんで、硬かたくこわ張り掛けたと

ころへ「新めえだ」と云う声がした。この声が自分の左の耳の、
つい後^{うしろ}から出て、向うへ通り抜けた時、なるほど初さんがついて
たなと思い出した。それがため、こわ張りかけた手足も、途中で
もとへ引き返した。自分は一步傍^{わき}へ退^のいた。初さんに前へ出て
らうつもりであつた。初さんは注文通り出た。

「相変らずやつてるな」

とカン・テラを提^さげたまま、上から三人の真中に転がつてる、壺と
賽を眺^{なが}めた。

「どうだ仲間入は」

「まあよそう。今日は案内だから」

と初さんは取り合わなかった。やがて、四つや丸太の上へうんとこしょと腰をおろして、

「少し休んで行くかな」

と自分の方を見た。立ちすくむまで恐ろしかった、自分は急に嬉しくなつて元気が出て来た。初さんの側へ腰をおろす。ア・テ・シ・コの利目は、ここで始めて分つた。旨い具合に尻が乗つて、柔らかに局部へ応える。かつ冷えないで、結構だ。実はさつきから、眼が少し眩らんで——眩らんだか、眩らまないんだか、坑の中ではよく分らないが、何しろ好い気持ではなかったが、こう尻を掛けて落ちつくと、大きに楽になる。四人がいろいろな話をしてい

る。

「ひろもと広本へは新らしい玉たまが来たが知ってるか」

「うん、知ってる」

「まだ、買わねえか」

「買わねえ、お前めえは」

「おれか。おれは——ハハハハ」

と笑った。これは這入はいって来た時、顔中ぼんやり見えた男である。今でもぼんやり見える。その証拠には、笑っても笑わなくつても、顔の輪廓りんかくがほとんど同じである。

「随分手廻しがいいな」

と初さんもいささか笑っている。

「シ・キ・ヘ這入ると、いつ死ぬか分らねえからな。だれだって、そうだろう」

と云う答があつた。この時、

「御互に死なねえうちの事だなあ」

と一人が云った。その語調には妙に咏嘆の意が寓してあつた。自分
分はあまり突然のように感じた。

そうしているうちに、一間置いて隣りの男が突然自分に話しか
けた。

「御前はどこから来た」

「東京です」

「ここへ来て儲けようたつて駄目だぜ」

と他の^{ほか}が、すぐ教えてくれた。自分は長蔵さんに逢うや否や儲かる儲かるを何遍となく聞かせられて驚いたが、飯場^{はんば}へ着くが早いか、今度は反対に、儲からない儲からないで立てつづけに責められるんで、大いに辟易^{へきえき}した。しかし地の底^じではよもやそんな話も出まいと思ってここまで降りて来たが、人に逢えばまた儲からないを繰り返された。あんまり馬鹿馬鹿しいんで何とか答弁をしようかとも考えたが、滅多^{めった}な事を云えば擲^はりつけられるだけだから、まあやめにして置いた。さればと云って返事をしなければま

たやりつけられる。そこで、こう云った。

「なぜ儲からないんです」

「この銅山やまには神様がいる。いくら金を蓄ためて出ようとしたって駄目だ。金は必ず戻ってくる」

「何の神様ですか」

と聞いて見たら、

「達磨だるまだ」

と云って、四人よつたりながら面白そうに笑った。自分は黙っていた。すると四人は自分を措おいてしきりに達磨の話始めた。約十分余りも続いたろう。その間自分はほかの事を考えていた。いろいろ考

えたうちに一番感じたのは、自分がこんな泥だらけの服を着て、真暗な坑あなのなかに屈しゃがんでるところを、艶子つやこさんと澄江すみえさんに見せたらばと云う問題であつた。気の毒がるだろうか、泣くだろうか、それともあさましいと云つて愛想あいそを尽かすだろうかと疑つて見たが、これは難なく気の毒がつて、泣くに違ないと結論してしまつた。それで一目ひとめくらいはこの姿を二人に見せたいような気がした。それから昨夜ゆうべ囲炉裏いろりの傍そばでさんざん馬鹿にされた事を思い出して、あの有様を二人に見せたらばと考えた。ところが今度は正反对で、二人共傍そばにいてくれないで仕合せだと思つた。もし見られたらと想像して眼前に、意気地いけぢのない、大いに苛めいじられてい

る自分の風体ふうていと、ハイカラの女を二人描えがき出したら、はなはだ気
恥はづかしくなつて腋わきの下から汗が出そうになつた。これで見
ると、坑夫に墮落すると云う事実その物はさほど苦にならぬのみ
か、少しは得意の気味で、ただ坑夫になりたての幅はばの利きかないと
ころだけを、女に見せなくなかつた訳になる。自分の器量を下げ
るところは、誰にも隠したいが、ことに女には隠したい。女は自
分を頼るほどの弱いものだから、頼られるだけに、自分は器量の
ある男だと云う証拠をどこまでも見せたいものと思われる。結婚
前の男はことにこの感じが深いようだ。人間はいくら窮した場合
でも、時々芝居しばい気ぎを出す。自分がア・テ・シ・コしりを臀しりに敷いて、深い

坑のなかで、カンテラを提^{ひっさ}げたまま、休んだ時の考えは、全く芝居じみていた。ある意味から云うと、これが苦痛の骨休めである。公然の骨休めとも云うべき芝居は全くここから発達したものである。自分は発達しない芝居の主人公を腹の中で演じて、落胆しながら得意がっていた。

ところへ突然肺臓を打ち抜かれたと思うくらい大きな音がした。その音は自分の足の下で起ったのか、頭の上で起ったのか、尻を懸^かけた丸太^{まるた}も、黒い天井^{てんじょう}も一度に躍^{おど}り上ったから、分らない。自分の頸^{くび}と手と足が一度に動いた。縁側^{えんがわ}に脛^{はざ}をぶらさげて、膝頭^{ひざがしら}を丁^{ちよう}と叩^{たた}くと、膝から下がぴくんと跳^はねる事がある。この時

自分の身体からだの動き方は全くこれに似ている。しかしこれよりも倍以上劇烈に來たような気がした。身体ばかりじゃない、精神がその通りである。一人芝居の真最中でとんぼ返りを打って、たちまち我れに歸った。音はまだつづいている。落雷を、土中どちゆうに埋めうづて、自由の響きを束縛そくばくしたように、渋しぶって、焦いらって、陰いんに籠こもって、抑おさえられて、岩にあたって、包まれて、激して、跳はね返されて、出端でを失はって、ごうと吼ほえている。

「驚いちゃいけねえ」

と初さんが云った。そうして立ち上がった。自分も立ち上がった。三人の坑夫も立ち上がった。

「もう少しだ。やっちまうかな」

と、鑿^{のみ}を取り上げた。初さんと自分は作事場^{さくじば}を出る。ところへ煙^{けむ}が来た。煙硝^{えんしょう}の臭^{におい}が、眼へも鼻へも口へも這入^{はい}った。噎^むせつぽくって苦しいから、後^{うしろ}を向いたら、作事場ではかあん、かあんともう仕事を始めだした。

「なんですか」

と苦しい中で、初さんに聞いて見た。実はさっきの音が耳^{こた}に伝^たえた時、こりや坑内で大破裂が起ったに違ないから、逃げないと生^{いの}命^ちが危ないとまで思い詰めたくらいなのに、初さんはますます深く這入^{はい}る気色^{けしき}だから、気味が悪いとは思ったが、何しろ自由行動

のとれる身体ではなし、精神は無論独立の氣象きしやうを具そなえていないんだから、いかに先輩だつて逃げていい時分には、逃げてくれるだろうと安心して、後あとをつけて出ると、むっとするほどの煙けむが向うから吹いて来たんで、こりや迂濶うっかり深入はできないわと云う腹もあつて、かたがた後うしろを向く途端とたんに、さっきの連中がもう、煙の中でかあん、かあん、鉏あらがねを叩たたいているのが聞えたんで、それじゃやっぱり安心なのかと、不審のあまりこの質問を起して見たんである。すると初さんは、煙の中で、咳せきを二つ三つしながら、「驚かなくつてもいい。ダイナマイトだ」と教えてくれた。

「大丈夫ですか」

「大丈夫でねえかも知れねえが、シ・キ・へ這^{はい}入った以上、仕方がねえ。ダイナ・マイトが恐ろしくつちや一日だって、シ・キ・へは這入れねえんだから」

自分は黙っていた。初さんは煙の中を押し分けるようにずんずん潜^{くぐ}って行く。満^{まん}更^{ぜう}苦しくない事もないんだろうが、一つは新参の自分に対して、景気を見せるためじゃないかと思った。それとも煙は坑^{あな}から坑へ抜け切って、陸^{おか}の上なら、大抵晴れ渡った時分なのに、路が暗いんでいつまでも煙が這^はってるように感じたり噎^むせっぱく思ったのかも知れない。そうすると自分の方が悪くな

る。

いずれにしても苦いところを我慢して尾ついて行つた。また胎内たいたい潜くぐりのような穴を抜けて、三四間ずつの段々を、右へ左へ折れ尽すと、路が二股ふたまたになつてゐる。その条路えだみちの突き当りで、カラカラランと云う音がした。深い井戸へ石片いしころを抛なげ込んだ時と調子は似てゐるが、普通の井戸よりも、遙はるかに深いように思われた。と云うものは、落ちて行く間まに、側がわへ当つて鳴る音が、冴さえている。ばかりか、よほど長くつづく。最後のカラランは底の底から出て、出るにはよほど手間てまがかかる。けれども一本道を、真直まっすぐに上へ抜けるだけで、ほかに逃道がないから、どんなに暇取つても、きつ

と出てくる。途中で消えそうになると、壁の反響が手伝って、底で出ただけの響は、いかに微かすかな遠くであつても、洩もらすところなく上まで送り出す。――ざつとこんな音である。カラララン。カラアン。……

初さんが留とまった。

「聞えるか」

「聞えます」

「ス・ノ・コへ鉋を落してる」

「はああ……」

「ついでだからス・ノ・コを見せてやろう」

と、急に思いついたような調子で、勢いよく初さんが、一足後へ引いて草鞋わらじの踵かかとを向け直した。自分が耳の方へ気を取られて、返事もしないうちに、初さんは右へ切れた。自分も続いて暗いなかへ這入る。

折れた路はわずか四尺ほどで行き当る。ところをまた右へ廻り込むと、一間ばかり先が急に薄明るく、縦にも横にも広がっている。その中に黒い影が二つあった。自分達そがその傍そばまで近づいた時、黒い影の一つが、左の足と共に、精一杯前へ出した力を後うしろへ抜く拍子ひょうしに、大きな箕みを、斜はすに抛なげ返した。箕は足掛りの板の上に落ちた。カカン、カラカランと云う音が遠くへ落ちて行く。一

尺前は大きな穴である。広さは畳二畳敷ぐらいはあるだろう。箕に入れたばらの鉋を、掘子が抛げ込んだばかりである。突き当りの壁は突立っている。微かなカンテラに照らされて、色さえしつかり分らない上が、一面に濡れて、濡れた所だけがきらきら光っている。

「覗いて見ろ」

初さんが云った。穴の手前が三尺ばかり板で張り詰めてある。

自分は板の三分の一ほどまで踏み出した。

「もっと、出ろ」

と初さんが後から催促する。自分は躊躇した。これでさえ踏板が

外れれば、どこまで落ちて行くか分らない。ましてもう一尺前へ出れば、いざと云う時、土の上へ飛び退く手間が一尺だけ遅くなる。一尺は何でもないようだが、ここでは平地の十間にも当る。自分は何分にも躊躇した。

「出ろやい。吝な野郎だな。そんな事で掘子が勤まるかい」

と云われた。これは初さんの声ではなかった。黒い影の一人が云ったんだろう。自分は振り返って見なかった。しかし依然として足は前へ出なかった。ただ眼だけが、露で光った薄暗い向うの壁を伝わって、下の方へ、しだいに落ちて行くと、約一間ばかりは、どうにか見えるが、それから先は真暗だ。真暗だからどこま

で視線に這入るんだか分らない。ただ深いと思えば際限もなく深い。落ちちゃ大変だと神経を起すと、後から背中を突かれるような気がする。足は依然としてもとの位地を持ち応えていた。すると、

「おい邪魔だ。ちよつと退きな」

と声を掛けられたんで、振り向くと、一人の掘子が重そうに俵を抱えて立っている。俵の大きさは米俵の半分ぐらいしかない。しかし両手で底を受けて、幾分か腰で支えながら、うんと気合を入れているところは、全く重そうだ。自分はこの体を見て、すぐ傍へ避けた。そうして比較的安全な、板が折れても差支なく地面へ

飛び退けるほどの距離まで退いた。^{しりぞ}掘子は、俵で眼先がつかえてるから定めし剣呑^{けんのん}がるだろうと思いのほか、容赦なく重い足を運ばして前へ出る。縁^{ふち}から二尺ばかり手前まで出て、足を揃^{そろ}えたから、もう留まるだろうと見ていると、また出した。余る所は一尺しきやあない。その一尺へまた五寸ほど切り込んだ。そうして行儀よく右左を揃えた。そうして、うんと云った。胸と腰が同時に前へ出た。危ない。のめったと思う途端^{とたん}に、重い俵は、とんぼ返りを打って、掘子の手を離れた。掘子はもとの所へ突っ立っている。落ちた俵はしばらく音沙汰^{おとさた}もない。と思うと遠くでどさつと云った。俵は底まで落切ったと見える。

「どうだ、あの芸が出来るか」

と初さんが聞いた。自分は、

「そうですねえ」

と首を曲げて、恐れ入ってた。すると初さんも掘子ほりこもみんな笑い出した。自分は笑われても全く致し方がないと思って、依然として恐れ入ってた。その時初さんがこんな事を云って聞かした。

「何になっても修業は要いるもんだ。やって見ねえうちは、馬鹿にや出来ねえ。お前めえが掘子になるにしたって、おっかながって、手先ばかりで抛なげ込んで見ねえ。みんな板の上へ落ちちまつて、肝心かんじんの穴へは這はい入りやしねえ。そうして、鉤あがつねの重みで引っ張り込

まれるから、かえって剣呑^{けんのん}だ。ああ思い切って胸から突き出して
かからにや……」

と云い掛けると、ほかの男が、

「二三度スノコへ落ちて見なくっちゃ駄目だ。ハハハハ」
と笑った。

後戻^{あともどり}をして元の路^{みち}へ出て、半町ほど行くと、掘子は右へ折れ
た。初さんと自分は真直に坂を下りる。下り切ると、四五間平ら
な路を縫うように突き当った所で、初さんが留まった。

「おい。まだ下りられるか」

と聞く。実はよほど前から下りられない。しかし途中で降参^{こうさん}した

ら、落第するにきまつてるから、我慢に我慢を重ねて、ここまで来たようなものの、内心ではその内もうどん底へ行き着くだろうくらいの目算はあった。そこへ持つて来て、相手がぴたりと留まって、一段落つけた上、さて改めて、まだ下りる気かと正式に尋ねられると、まだ下りるべき道程はけっして一丁や二丁でないと云う意味になる。——自分は暗いながら初さんの顔を見て考えた。御免蒙ろうかしらと考えた。こう云う時の出処進退は、全く相手の思わく一つできまる。いかな馬鹿でも、いかな利口でも同じ事である。だから自分の胸に相談するよりも、初さんの顔色で判断する方が早く片がつく。つまり自分の性格よりも周囲の事情

が運命を決する場合である。性格が水準以下に下落する場合である。平生^{へいぜい}築き上げたと自信している性格が、めちやくちやに崩れ^{くず}る場合のうちでもっとも顕著^{けんちよ}なる例である。——自分の無性格論はここからも出ている。

前^{ぜん}申す通り自分は初さんの顔を見た。すると、下^おりようじやないかと云う親密な情合^{じやうあい}も見えない。下りなくつちや御前のためにならないと云う忠告の意も見えない。是非下ろして見せると云う威嚇^{おどし}もあらわれていない。下りたかろうと焦^じらす気色^{けしき}は無論ない。ただ下りられまいと云う侮辱^{ぶべつ}の色で持ち切っている。それは何ともなかった。しかしその色の裏面には落第と云う切実な問題

が潜^{ひそ}んでいる。この場合における落第は、名誉より、品性より、何よりも大事件である。自分は窒息しても下りなければならぬ。
い。

「下りましょう」

と思い切って、云った。初さんは案に相違の様子であつたが、

「じゃ、下りよう。その代り少し危ないよ」

と穩かに同意の意を表^{ひょう}した。なるほど危ないはずだ。九十度の角度で切っ立った、屏風^{びょうぶ}のような穴を真直に下りるんだから、猿の仕事である。梯子^{はしご}が懸^かってる。勾配^{こうばい}も何にもない。こちらの壁にぴったり食^くつついて、棒を空^{くう}にぶら下げたように、覗^{のぞ}くと端^{さき}が見

えかねる。どこまで続いてるんだか、どこで縛りつけてあるんだか、まるで分らない。

「じゃ、己おれが先へ下りるからね。気をつけて来たまえ」

と初さんが云った。初さんがこれほど丁寧な言葉を使おうとは思
いも寄らなかつた。おおかた神妙しんびように下りましようと思つたので、幾
分か憐愍れんみんの念を起したんだろう。やがて初さんは、ぐるりと引つ
繰り返つて、正式に穴の方へ尻を向けた。そうして屈しゃがんだ。と思
うと、足からだんだん這入はいって行く。しまいには顔だけが残つ
た。やがてその顔も消えた。顔が出ている間は、多少の安心も
あつたが、黒い頭の先までが、ずぼりと穴へはまつた時は、さす

がに心配なのと心細いので、じっとしていられなくって、足を
つま立てるようにして、上から見下した。初さんは下りて行く。
黒い頭とカンテラの灯だけが見える。その時自分は気味の悪い
ちにも、こう考えた。初さんの姿が見えるうちに下りてしまわな
いと、下り損なうかも知れない。面目ない事が出来る。早くす
るに越した分別はないと決心して、いきなり後ろ向になつて初さ
んのように、膝を地につけて、手で摺り下りながら、草鞋の底で
段々を探った。

両手で第一段目を握って、足を好加減な所へ掛けると、背中が
海老のように曲った。それから、そろそろ足を伸ばし出した。真

直に立つと、カンテラの灯が胸の所へ来る。じっとしていると燦されてしまう。仕方がないから、片足下げる。手もこれに应じて握り更えなくっちゃならない。おろそうとすると、指で提げてるカンテラが、とんだところで、始末の悪いように動く。滅多に振ると、着物が焼けそうになる。大事を取ると壁へぶつかって灯が揉み潰されそうになる。親指へカップを差し込んで、振子のように動かした時は、はなはだ軽便な器械だと思ったが、こうなると非常に邪魔になる。その上梯子の幅は狭い。段と段の間がすこぶる長い。一段さがるに、普通の倍は骨が折れる。そこへもって来て恐怖が手伝う。そうして握り直すたんびに、段木がぬらぬらす

る。鼻を押しつけるようにして、乏しい灯で透^すかして見ると、へな土が一面に粘^っいている。上^{のぼ}り下^{さが}りの草鞋で踏つけたものと思われる。自分は梯子の途中で、首を横へ出して、下を覗^{のぞ}いた。よせば善かったが、つい覗いた。すると急にぐらぐらと頭が廻^まって、かたく握った手がゆるんで来た。これは死ぬかも知れない。死んじゃ大変だと、噛^{かじ}りついたなり、いきなり眼を閉^{ねむ}った。石^{シャボン}鹸球の大きなのが、ぐるぐる散らついてるうちに、初さんが降りて行く。本当を云うと、下を覗いた時にこそ、初さんの姿が見えれば見えるんで、ねぶった眼の前に湧^わいて出る石^{シャボン}鹸球の中に、初さんがいる訳がない。しかし現にいる。そうして降りて行く。いかに

も不思議であつた。今考えると、目舞めまいのする前に、ちらりと初さんを見たに違いないのだが、ぐらぐらと咄癡とつちて、死ぬ方が怖こわくなつたもんだから、初さんの影は網膜に映じたなり忘れちまつたのが、段木に噛りついて眼を閉るや否や生き返つたんだろう。ただしそう云う事が学理上あり得るものか、どうか知らない。その当時は夢中である。坑あなは暗い、命は惜しい、頭は乱れている。生きてるか死んでるか判然しない。そこへ初さんが降りて行く。眼の中で降りて行くんだか、足の下で降りて行くんだかめちやくちゃであつた。が不思議な事に、眼を開けるや否やまた下を見た。するとやはり初さんが降りている。しかも切っ立った壁の向う側を

降りているようだ。今度は二度目のせいか、落ちるほど眩暈めまいもしなかつたんで、よくよく眸ひとみを据すえて見ると、まさに向う側を降りて行く。はてなと思った。ところへカンテラがまたじいと鳴った。保証つきの灯火あかりだが、こうなるとまた心細い。初さんはずんずん行くようだ。自分もここに至れば、全速力で降りるのが得策だと考えついた。そこでぬるぬるする段木だんぎを握り更かえ、握り更えてようやく三間ばかり下がると、足が土の上へ落ちた。踏んで見たがやッぱり土だ。念のため、手を離さずに足元の様子を見ると、梯子はしごは全く尽きている。踏んでいる土も幅一尺で切れている。あとは筒拔つつぬけの穴だ。その代り今度は向側むこうがわに別の梯子がついて

いる。手を延ばすと届くように懸^かけてある。仕方がないから、自分
分はまたこの梯子へ移った。そうして出来るだけ早く降りた。長
さは前と同様である。するとまた逆の方向に、依然として梯子
が懸けてある。どうも是非に及ばない。また移った。やっとの思
いでこれも片づけると、新しい梯子はものごとく向側に懸って
いる。ほとんど際限がない。自分が六つめの梯子まで来た時は、
手が怠^{だる}くなって、足が悸^{ふる}え出して、妙な息が出て来た。下を見る
と初さんの姿はとくの昔に消えている。見れば見るほど真闇^{まっくら}だ。
自分のカンテラへはじいじいと点滴^{しずく}が垂れる。草鞋^{わらじ}の中へは清水^{しみず}
がしみ込んで来る。

しばらく休んでいたら、手が抜けそうになった。下り出すと足を踏み外しかねぬ。けれども下りるだけ下りなければ、のめって逆さに頭を割るばかりだと思うと、どうか、どうか、段々を下り切る力が、どっかから出て来る。あの力の出所はとうてい分らない。しかしこの時は一度に出ないで、少しずつ、腕と腹と足へ煮染み出すように来たから、自分でも、ちゃんと自覚していた。ちようと試験の前の晩徹夜をして、疲労の結果、うっとりして急に眼が覚めると、また五六頁は読めると同じ具合だと思う。こう云う勉強に限って、何を読んだか分らない癖に、とにかく読む事は読み通すものだが、それと同じく自分もたしかに降りたとは断

言しにくいが、何しろ降りた事はたしかである。下読したよみをする書物の内容は忘れても、頁の数は覚えていくごとく、梯子段の数だけは明かに記憶していた。ちょうど十五あった。十五下り尽しても、まだ初さんが見えないには驚いた。しかし幸いさいわ一本道だったから、どぎまぎしながらも、細い穴を這い出すと、ようやく初さんがいた。しかも、例のように無敵な文句は並べずに、

「どうだ苦しかったか」

と聞いてくれた。自分は全く苦しいんだから、

「苦しいです」

と答えた。次に初さんが、

「もう少しだ我慢しちゃ、どうだ」

と奨励^{しょうれい}した。次に自分は、

「また梯子があるんですか」

と聞いた。すると初さんが、

「ハハハハもう梯子はないよ。大丈夫だ」

と好意的^{えみ}の笑^もを洩^もらした。そこで自分も我慢のしついでだと観念

して、また初さんの尻について行くと、また下りる。そうして下

りるに従って路へ水が溜^ひって来た。ぴちゃぴちゃと云う音がす

る。カンテラの灯^ひで照らして見ると、下谷^{したや}辺の溝渠^{どぶ}が溢^{あふ}れたよう

に、薄鼠^{うすねずみ}になっただぶだぶしている。その泥水がまた馬鹿に冷た

い。指の股が切られるようである。けれども一面の水だから、せつかく水を抜いた足を、また無惨むざんにも水の中へ落さなくっちゃならない。片足を揚げると、五位ごい鷺さぎのようにそのまま立っていなくなる。それでも仕方なしに草鞋わらじの裏を着けるとぴちやりと云うが早いか、水際から、魚の鰭ひれのような波が立つ。その片側がカ・ン・テ・ラの灯できらきらと光るかと思うと、すぐ落ちついてもとに帰る。せつかく平たいらになった上をまたぴちやりと踏み荒らす。魚の鰭がまた光る。こう云う風にして、奥へ奥へと這はい入って行くと、水はだんだん深くなる。ここを潜くぐり抜けたら、乾いた所へ出られる事かと、受け合われない行先をあてにして、ぐるりと廻ると、

足の甲でとまってた水が急に脛すねまで来た。この次にはと、辛抱して、右に折れると、がつくり落ちがして膝ひざまで漬つかつちまう。こうなると、動きたんびにぎぶぎぶ云う。膝で切る波が渦うずを捲まいて流れる。その渦がだんだん股ももの方へ押し寄せてくる。全く危険だと思った。ことによれば、何かの原因で水が出たんだから、今に坑あなのなかで、いっぱいになりやしないかと思うと急に腰から腹ていの中までが冷たくなって来た。しかるに初さんは辟易へきえきした体ていもなく、さっさと泥水を分けて行く。

「大丈夫なんですか」

と後うしろから聞いて見たが、初さんは別に返事もせずに、依然とし

て、ざぶりざぶりと水を押し分けて行く。自分の考えるところによると、いくら銅山でも水に漬^つかっているは、仕事ができるはずがない。こうどぶつく以上は、何か変事でもあるか、または廃坑へでも連れ込まれたに違いない。いずれにしても災難だと、不安の念に冒^{おか}されながら、もう一遍初さんに聞こうかしらと思ってるうち、水はとうとう腰まで来てしまった。

「まだ這入るんですか」

と、自分はたまらなくなっただから、後^{うしろ}から初さん呼び留めた。この声は普通の質問の声ではない。吾^{わがみ}身を思うの余り、命が口から飛び出したようなものである。だから、いざと云う間^{まぎわ}際には単^{たん}

音の叫声いんとなつてあらわれるところを、まだ初さんの手前を憚はばかるだけの余裕があるから、しばらく恐怖の質問と姿を変じたまでである。この声を聞きつけた時は、さすがの初さんも水の中で留まったなり、振り返った。カンテラを高く差し上げる。眸ひとみを据すえると初さんの眉まゆの間に八の字が寄つて来た。しかも口元は笑っている。

「どうした。降参したか」

「いえ、この水が……」

と自分は、腰の辺あたりを、物凄ものすごそうに眺ながめた。初さんは毫ごうも感心しない。やっぱりここにこしている。出で水みづの往来を、通行人が尻をま

くって面白そうに渉わたる時のように見えた。自分もこれで疑いは晴れたが、根が臆病だから、念のため、もう一度、

「大丈夫でしょうか」

を繰返した。この時初さんはますます愉快そうな顔つきだったが、やがて真面目まじめになつて、

「八番坑だ。これがどん底だ。水ぐらいあるなあ当前あたりめえだ。そんなに、おっかながるにや当らねえ。まあ好いからこつちへ来ねえ」となかなか承知しないから、仕方なしに、股またまで濡ぬらしてついで行つた。たださえ暗い坑あなの中だから、思い切つた喩たとえを云えば、頭から暗闇くらやみに濡れてると形容しても差支さしかえない。その上本当の水、し

かも坑と同じ色の水に濡れるんだから、心持の悪い所が、倍悪くなる。その上水は踝くるぶしからだんだん競りせ上がって来る。今では腰まで漬つかっている。しかも動きたんびに、波が立つから、実際の水際以上までが濡れてくる。そうして、濡れた所は乾かないのに、波はことによると、濡れた所よりも高く上がるから、つまりは一寸二寸と身体からだが腹まで冷えてくる。坑で頭から冷えて、水で腹まで冷えて、二重に冷え切って、不知案内ふちあんないの所を海鼠なまこのようについて行つた。すると、右の方に穴があつて、洞ほらのように深く開ひらいてる中から、水が流れて来る。そうしてその中でかあんかあんと云う音がする。作事場さくじばに違ちがいない。初さんは、穴の前に立つたま

ま、

「そうら。こんな底でも働いてるものがあるぜ。真似ができるか」

と聞いた。自分は、胸が水に浸るまで、屈んで洞の中を覗き込んだ。すると奥の方が一面に薄明るく——明るくと云うが、締りのない、取り留めのつかない、微な灯を無理に広い間へ使って、引っ張り足りないから、せつかくの光が暗闇に圧倒されて、茫然と濁っている体であつた。その中に一段と黒いものが、斜めに岩へ吸いついている辺から、かあんかあんと云う音が出た。洞の四面へ響いて、行き所のない苦しまぎれに、水に跳ね返ったもの

が、纏まとまって穴の口から出て来る。水も出てくる。天井の暗い割には水の方に光がある。

「這へえ入って見るか」

と云う。自分はぞっと寒気がした。

「這入らないでも好いです」

と答えた。すると初さんが、

「じゃ止やめにして置おこう。しかし止めるなあ今日だけだよ」

と但ただし書がきをつけて、一応自分の顔をとくと見た。自分は案あんの定釣じやうつり出された。

「明日あしたっから、ここで働くんでしょうか。働くとすれば、何時間

水に漬かってる——漬かってれば義務が済むんですか」

「そうさなあ」

と考えていた初さんは、

「一昼夜に三回の交替だからな」

と説明してくれた。一昼夜に三回の交替ならひとくぎり八時間になる。自分は黒い水の上へ眼を落した。

「大丈夫だ。心配しなくってもいい」

初さんは突然慰めてくれた。気の毒になったんだろう。

「だって八時間は働かなくっちゃならないんでしょ」

「そりゃきまりの時間だけは働かせられるのは知れ切ってらあ。

だが心配しなくってもいい」

「どうしてですか」

「好^いいてえ事よ」

と初さんは歩き出した。自分も黙って歩き出した。二三歩水をざぶざぶ云わせた時、初さんは急に振り返った。

「新前^{しんめえ}は大抵二番坑か三番坑で働くんだ。よっぽど様子が分らないくっちゃ、ここまで下りちゃ来られねえ」

と云いながら、にやにやと笑った。自分もにやにやと笑った。

「安心したか」

と初さんがまた聞いた。仕方がないから、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんは大得意であつた。時にどぶどぶ動く水が、急に膝まで減つた。爪先で探ると段々がある。一つ、二つと勘定すると三つ目で、水は踝くるぶしまで落ちた。それで平らに続いている。意外に早く高い所へ出たんで、非常に嬉うれしかった。それから先は、とんとん拍子びょうしに嬉しくなつて、曲れば曲るほど地面が乾いて来る。しまいにはぴちやりとも音のしない所へ出た。時に初さんが器械を見る気があるかと尋ねたが、これは諸方のスノコから落ちて来た鉋あらがねを聚あつめて、第一坑へ揚げて、それから電車でシキの外へ運び出す仕掛を云うんだと聞いて、頭から御免蒙ごめんこうむつた。

いくら面白く運転する器械でも、明日^{あす}の自分に用のない所は見る
気にならなかった。器械を見ないとするとこれで、まあ坑内の模
様を一応見物した訳になる。そこで案内の初さんが帰るんだと云
う通知を与えてくれた。腰きり水に漬^つかるのは、いかな初さんも
一度でたくさんだと見えて、帰りには比較的濡^ぬれないで済む路を
通ってくれた。それでも十間ほどは腫^{ふく}ら脛^{はざ}まで水が押し寄せた。
この十間を通るときに、様子を知らない自分はまた例の所へ来た
なと感じて、往きに臍^{へそ}の近所が氷りつきそうであつた事を思い
出しつつ、今か今かと冷たい足を運んで行つたが、鵜^{いすか}の嘴^{はし}と善^いい
方へばかり、食い違つて、行けば行くほど、水が浅くなる。足が

軽くなる。ついにはまた乾いた路へ出てしまった。初さんに、

「もう済んだでしょうか」

と聞いて見ると、初さんはただ笑っていた。その時は自分も愉快だったが、しばらくすると、例の梯子はしごの下へ出た。水は胸までく
らい我慢するがこの梯子には、――せめて帰り路だけでも好いか
ら、遁のがれたかったが、やっぱりちようどその下へ出て来た。自分
は蜀しよくの栈道さんどうと云う事を人から聞いて覚えていた。この梯子は、栈
道を逆さかに釣さるして、未練なく傾斜の角度を抜きにしたものであ
る。自分はそこへ来ると急に足が出なくなつた。突然脚か氣けに罹かつ
たような心持になると、思わず、腰うしろを後へ引つ張られた。引つ張

られたのは初さんに引っ張られたのかと思う読者もあるかもしれないが、そうじゃない。そう云う気分が起ったんで、強いて形容すれば、疝氣せんきに引っ張られたとでも叙じよしたら善かろう。何しろ腰が伸のせない。もっともこれは逆棧道さかさんどうの崇たたりだと一概に断言する気でもない、さつきから案内の初さんの方で、だいぶ御機嫌ごきげんが好いので、相手の寛大な御情おなさけにつけ上って、奮発たがの箍たががしだいしだいに緩ゆるんだのもたしかな事実である。何しろ歩けなくなった。この腰附を見ていた初さんは、

「どうだ歩けそうもねえな。まるで屁へっぴり腰だ。ちっと休むが好い。おれは遊びに行つて来るから」

と云ったぎり、暗い所を潜^{くぐ}つて、どこへか出て行つた。

あとは云うまでもなく一人になる。自分はべつとりと、尻を地
びたへ着けた。ア・テ・シ・コはこう云うときに非常に便利になる。御^{おか}
蔭^げで、岩で骨が痛んだり、泥で着物が汚^{よご}れたりする憂いがないだ
け、惨^み憺^{じめ}なうちにも、まだ嬉しいところがあつた。そうして、硬
く曲つた背中を壁へ倚^もたせた。これより以上は横のものを豎^{たて}にす
る気もなかった。ただそのままの姿勢で向うの壁を見詰めてい
た。身体^{からだ}が動かないから、心も働かないのか、心が居坐りだか
ら、身体が怠けるのか、とにかく、双方^{あい}相^あひ合^あつて、生死^{せいし}の間に
彷徨^{ほうこう}していたと見えて、しばらくは万事^{ふめいりよう}が不明瞭であつた。始め

は、どうか一尺立方でもいいから、明かるい空気が吸って見たい
ような気がしたが、だんだん心が昏くらくなる。と坑あなのなかの暗いの
も忘れてしまう。どっちがどっちだか分らなくなつて朦朧もろうのうち
に合体稠がったいちゆうわ和して来た。しかしけつして寝たんじやない。しんとし
て、意識が稀薄になつたまでである。しかしその稀薄な意識は、
十倍の水に溶いた娑婆しゃば気であるから、いくら不透明でも正気は失
わない。ちょうど差し向いの代りに、電話で話しをするくらいの
程度——もしくはこれよりも少しく不明瞭な程度である。かよう
に水平以下に意識が沈んでくるのは、浮世はげの日が烈し過ぎて困る
自分には——東京にも田舎いなかにもおり終おせない自分には——煩悶はんもんの

解熱剤げねつざいを頓服とんぷくしなければならない自分には——神経纖維の端はじの端まで寄って来た過度の刺激を散らさなければならぬ自分には——必要であり、願望であり、理想である。長蔵さんに引張られながら、道々空想に描いた坑夫生活よりも、たしかに上等の天国である。もし駆落かけおちが自滅の第一着なら、この境界きょうがいは自滅の——第何着か知らないが、とにかく終局地を去る事遠からざる停車場ステーションである。自分は初さんに置いて行かれた少時しばしの休憩時間内に、図はからずもこの自滅の手前まで、突然釣り込まれて、——まあ、どんな心持がしたと思う。正直に云えば嬉しかった。しかし嬉しいと云う自覚は十倍の水に溶き交ぜられた正気の中に遊離しているんだか

ら、ほかの娑婆氣と同じく、劇烈には来ない。やっぱり稀薄である。けれど自覚はたしかにあった。正氣を失わないものが、嬉しいと云う自覚だけを取り落す訳がない。自分の精神状態は活動の区域を狭められた片輪の心的現象とは違う。一般の活動を恣にする自由の天地はもとのごとくに存在して、活動その物の強度が減却して来たのみだから、平常の我とこの時の我との差はただ濃淡の差である。その最も淡い生涯の中に、淡い喜びがあった。

もしこの状態が一時間続いたら、自分は一時間の間満足していただろう。一日続いたら一日の間満足したに違ない。もし百年続いたにしても、やっぱり嬉しかったらう。ところが——ここでまた

新しい心の活作用に現参げんざんした。

というのはあいにく、この状態が自分の希望通同じ所に留とどめていてくれなかった。動いて来た。油の尽きかかったラン・プの灯ひのよう動いて来た。意識を数字であらわすと、平生へいぜい十のものが、今は五になって留とどまっていた。それがしばらくすると四になる。三になる。推して行けばいつか一度は零れいにならなければならぬ。自分はこの経過に連れて淡くなりつつ変化する嬉うれしさを自覚していた。この経過に連れて淡く変化する自覚の度において自覚していた。嬉しさをどこまで行っても嬉しいに違ちがない。だから理り窟くつから云うと、意識がどこまで降さがって行こうとも、自分は嬉しい

とのみ思つて、満足するよりほかに道はないはずである。ところがだんだんと競り^せおろして来て、いよいよ零に近くなつた時、突然として暗中^{あんちゆう}から躍り^{おど}出した。こいつは死ぬぞと云う考えが躍り出した。すぐに続いて、死んじや大變だと云う考えが躍り出した。自分は同時に、かつと眼を開いた^あ。

足の先が切れそうである。膝から腰までが血が通^{かよ}つて氷りついている。腹は水でも詰めたようである。胸から上は人間らしい。眼を開けた時に、眼を開けない前の事を思うと、「死ぬぞ、死んじや大變だ」までが順々につながつて来て、そこで、ふつりと切れている。切れた次ぎは、すぐ眼を開いた所作^{しよさ}になる。つまり

「死ぬぞ」で命の方向転換をやって、やってからの第一所作が眼を開いた訳になるから、二つのものは全く離れている。それで全く続いている。続いている証拠しょうこには、眼を開いて、身の周囲まわりを見た時に、「死ぬぞ……」と云う声が、まだ耳に残っていた。たしかに残っていた。自分は声だの耳だのと云う字を使うが、ほかには形容しようがないからである。形容どころではない、実際には「死ぬぞ……」と注意してくれた人間があつたとしきや受け取れなかった。けれども、人間は無論いるはずはなし。と云って、神——神は大嫌だいきらひだ。やっぱり自分が自分の心に、あわてて思い浮べたまでであろうが、それほど人間が死ぬのを苦に病んでいようと

は夢にも思い浮べなかった。これだから自殺などはできないはずである。こう云う時は、魂の段取だんどりが平生と違うから、自分で自分の本能に支配されながら、まるで自覚しないものだ。気をつけべき事と思う。この例なども、解釈のしようでは、神が助けてくれたともなる。自分の影身かげみにつき添っている——まあ恋人が多いようだが——そう云う人々の魂が救ったんだともなる。年の若い割に、自分がこの声を艶子さんとも澄江さんとも解釈しなかったのは、己惚うぬぼれの強い割には感心である。自分は生れつきそれほど詩的でなかったんだろう。

そこへ初さんがひょっくり帰って来た。初さんを見るが早い

か、自分の意識はいよいよ明瞭めいりょうになった。これから例の逆棧道さかさんどうを登らなくっちゃならない事も、明日あしたから、鑿のみと槌つちでかあんかあんやらなくっちゃならない事も、南京米ナンキンまいも、南京虫ナンキンむしも、ジャンボーも達磨だるまも一時に残らず分ってしまい、そうして最後に自分の墮落がもつとも明かに分った。

「ちったあ気分は好いか」

「ええ少しは好いようです」

「じゃ、そろそろ登ってやろう」

と云うから、礼を云って立っていると、初さんは景氣よく段木だんぎを捕つかえて片足踏ふん掛がけながら、

「登りは少し骨が折れるよ。そのつもりで尾^ついて来ねえ」

と振り返って、注意しながら登り出した。自分は何となく寒々しい心持になって、下から見上げると、初さんは登って行く。猿のように登って行く。そろそろ登ってくれる様子も何もありやしな^い。早くしないとまた置いてきぼりを食う恐れがある。自分も思い切って登り出した。すると二三段足を運ぶか運ばないうちになるほどと感心した。初さんの云う通り非常に骨が折れる。全く疲れているばかりじゃない。下りる時には、胸から上が比較的前へ出るんで、幾分か背の重みを梯子^{はしご}に託する事ができる。しかし上りになると、全く反対で、ややともすると、身体が後^{うしろ}へ反^それる。

反れた重みは、両手で持ち^{こた}えなければならぬから、二の腕から肩へかけて一段ごとに余分の税がかかる。のみならず、手の平^{ひら}と五本の指で、この^{しめだか}×高を握らなければならない。それが前に云った通りぬるぬるする。梯子を一つ片づけるのは容易の事ではない。しかもそれが十五ある。初さんは、とつくの昔に消えてなくなった。手を離しさえすれば真暗闇^{まつくらやみ}に逆落^{さかおと}しになる。離すまいとすれば肩が抜けるばかりだ。自分は七番目の梯子の途中で火焰^{かえん}のような息を吹きながら、つくづく労働の困難を感じた。そうして熱い涙で眼がいつぱいになった。

二三度上^{うわまぶた}瞼と下瞼を打ち合して見たが、依然として、視覚はぼ

うつとしている。五寸と離れない壁さえたしかには分らない。手の甲で擦ろうと思うが、あやにく両方とも塞がっている。自分は口惜くなった。なぜこんな猿の真似をするように零落れたのかと思った。倒れそうになる身体を、できるだけ前の方にのめらして、梯子に倚れるだけ倚れて考えた。休んだと註釈する方が適當かも知れない。ただ中途で留まったと云い切ってもよろしい。何しろ動かなくなった。また動けなくなった。じっとして立っていた。カンテラのじいと鳴るのも、足の底へ清水が沁み込むのも、全く気がつかなかった。したがって何分過ったのかとんと感じに乗らない。するとまた熱い涙が出て来た。心が存外たしかである

のに、眼だけが霞かすんでくる。いくら瞬まばたきをしても駄目だ。湯の中に眸ひとみを漬つけてるようだ。くしゃくしゃする。焦心じれつたくなる。癇かんが起る。奮興ふんこうの度が烈はげしくなる。そうして、身体は思うように利きかない。自分は齒を食い締しばって、両手で握った段木を二三度揺り動かした。無論動きやしない。いつその事、手を離しちまおうかしらん。逆さに落ちて頭から先へ砕ける方が、早く片がついていい。とむらむらと死ぬ気が起った。――梯子の下では、死んじゃ大変だと飛び起きたものが、梯子の途中へ来ると、急に太い短い無分別しやうがいを起して、全く死ぬ気になったのは、自分の生涯しやうがいにおける心理推移の現象のうちで、もっとも記憶すべき事実である。自分は心

理学者でないから、こう云う変化を、どう説明したら適切であるか知らないけれども、心理学者はかえって、実際の経験に乏しいようにも思うから、杜撰ずさんながら、一応自分の愚見だけを述べて、参考にした。

ア・テ・シ・コを尻に敷いて、休息した時は、始めから休息する覚悟であつた。から心に落ちつきが有る。刺激が少い。そう云う状態で壁へ倚よりかかっていると、その状態がなだらかに進行するか、自然の勢いとしてだんだん気が遠くなる。魂が沈んで行く。こう云う場合における精神運動の方向は、いつもきまつたもので、必ず積極から出立してしだいに消極に近づくけいろ径路を取るのが

普通である。ところがその普通の径路を行き尽くして、もうこれがどん詰しまだと云う間際まぎわになると、魂が割れて二様の所作しよさをする。第一は順風に帆を上げる勢いで、このどん底まで流れ込んでしまふ。するとそれぎり死ぬ。でなければ、大切おおぎりの手前まで行つて、急に反対の方角に飛び出してくる。消極へ向いて進んだものが、突如として、逆さまに、積極の頭へ戻る。すると、命がたちまち確實になる。自分が梯子はしごの下で経験したのはこの第二に当る。だから死に近づきながら好い心持に、三途さんずのこちら側まで行つたものが、順路をてくてく引き返す手数てすうを省はぶいて、急に、娑婆しゃばの真中に出現したんである。自分はこれを死を転じて活に歸す経験と名

づけている。

ところが梯子の中途では、全くこれと反対の現象に逢^あった。自分は初さんの後^{あと}を追っ懸けて登らなければならない。その初さんは、とつくに見えなくなってしまった。心は焦^{あせ}る、気は揉^もめる、手は離せない。自分は猿よりも下等である。情ない。苦しい。――万事が痛切である。自覚の強度がしだいしだいに劇^{はげ}しくなるばかりである。だからこの場合における精神運動の方向は、消極より積極に向って登り詰める状態である。さてその状態がいつまでも進行して、奮興^{ふんこう}の極度に達すると、やはり二様の作用が出る訳だが、とくに面白いと思うのはその一つ、――すなわち積極の頂

点からとんぼ返りを打って、魂が消極の末端にひよつくり現われる奇特である。平たく云うと、生きてる事実が明瞭になり切った途端に、命を棄てようと決心する現象を云うのである。自分はこれを活上より死に入る作用と名けている。この作用は矛盾のごとく思われるが実際から云うと、矛盾でも何でも、魂の持前だから存外自然に行われるものである。論より証拠発奮して死ぬものは奇麗に死ぬが、いじけて殺されるものは、どうも旨く死に切れないうだ。人の身の上はとにかく、こう云う自分が好い証拠である。梯子の途中で、ええ忌々しい、死んじまえと思った時は、手を離すのが怖くも何ともなかった。無論例のごとくとき金などと

はけっしてしなかった。ところがいざ死のうとして、手を離しかけた時に、また妙な精神作用を承当した。

自分は元来が小説的の人間じゃないんだが、まだ年が若かったから、今まで浮気に自殺を計画した時は、いつでも花々しくやつて見せたいと云う念があつた。短銃でも九寸五分でも立派に——つまり人が賞めてくれるように死んでみたいと考えていた。できるならば、華嚴の瀑まででも出向きたいなどと思った事もある。しかしどうしても便所や物置で首を縊るのは下等だと断念していた。その虚栄心が、この際突然首を出した。どこから出したか分らないが、出した。つまり出すだけの余地があつたから出したに

相違あるまいから、自分の決心はいかに真面目であつたにしても、さほど差し逼つてはいなかつたんだろう。しかしこのくらい断乎として、現に梯子段から手を離しかけた、最中に首を出すくらいだから、相手もなかなか深い勢力を張っていたに違ない。もつともこれは死んで銅像になりたがる精神と大した懸隔もあるまいから、普通の人間としては別に怪しむべき願望とも思わないが、何しろこの際の自分には、ちと贅沢過ぎたようだ。しかしこの贅沢心のために、自分は発作性の急往生を思いとまつて、不束ながら今日まで生きている。全く今はの際にも弱点を引張つていた御蔭である。

話すところなる。——いよいよ死んじまえと思つて、体を心持
後へ引いて、手の握をゆるめかけた時に、どうせ死ぬなら、ここ
で死んだって冴えない。待て待て、出てから華嚴の瀑へ行けと云
う号令——号令は変だが、全く号令のようなものが頭の中に響き
渡った。ゆるめかけた手が自然と緊った。曇った眼が、急に明か
るくなった。カンテラが燃えている。仰向くと、泥で濡れた梯子
段が、暗い中まで続いている。是非共登らなければならぬ。も
し途中で挫折すれば犬死になる。暗い坑で、誰も人のいない所
で、日の目も見ないで、鉋と同じようにころげ落ちて、それっき
り忘れられるのは——案内の初さんにさえ忘れられるのは——よ

し見つかつて半獸半人の坑夫共に輕蔑けいべつされるのは無念である。
是非共登り切っちまわなければならぬ。カンテラは燃えてい
る。梯子は続いている。梯子の先には坑が続いている。坑の先
は太陽が照り渡っている。広い野がある、高い山がある。野と山
を越して行けば華嚴の瀑がある。——どうあつても登らなければ
ならない。

左の手を頭の上まで伸ばした。ぬらつく段木を指の痕あとのつくほ
ど強く握った。濡れた腰をうんと立てた。同時に右の足を一尺上
げた。カンテラの灯ひは暗い中を豎たてに動いて行く。坑は層そう一層いっそうと明
かるくなる。踏み棄すてて去る段々はしだいしだいに暗い中に落ち

て行く。吐く息が黒い壁へ当る。熱い息である。そうして時々は白く見えた。次には口を結んだ。すると鼻の奥が鳴った。梯子はまだ尽きない。懸崖けんがいからは水が垂れる。ひらりとカンテラひるがを翻えすと、崖がけの面を掠おもてめて弓形にじいと、消えかかって、手の運動の止まる所へ落ちついた時に、また真直に油煙を立てる。また翻えひるがす。灯ひは斜めに動く。梯子の通る一尺幅を外はずれて、がんがらがんの壁が眼に映うつる。ぞっとする。眼が眩くらむ。眼を閉ねむって、登る。灯も見えない、壁も見えない。ただ暗い。手と足が動いている。動く手も動く足も見えない。手障足障てざわりあしざわりだけで生きて行く。生きて登って行く。生きると云うのは登る事で、登ると云うのは生きる

事であつた。それでも——梯子はまだある。

それから先はほとんど夢中だ。自分で登ったのか、天佑てんゆうで登ったのかほとんど判然しない。ただ登り切つて、もう一段も握る梯子がないと云う事を覚さとつた時に、坑の中へぴたりと坐つた。

「どうした。上がつて来たか。途中で死にやしねえかと思つて、

——あんまり長えから。見に行こうかと思つたが、一人じゃ気味がわるいからな。けども、好く上がつて来たな。えらいや」

と待ちかねて、もじもじしていた初さんが大いに喜んでくれた。

何でも梯子はしごの上でよつぽど心配していたらしい。自分はただ、

「少し気分が悪わるかったから途中で休んでいました」

と答えた。

「気分が悪い？ そいつあ困ったろう。途中って、梯子の途中か」

「ええ、まあそうです」

「ふうん。じゃ明日あすは作業もできめえ」

この一言いちごんを聞いた時、自分は糞くそでも食くらえと思った。誰もぐらもちが土竜の真似なんかするものかと思った。これでも美しい女に惚ほれられたんだと思った。坑あなを出れば、すぐ華嚴けごんの瀑たきまで行くんだと思った。そうして立派に死ぬんだと思った。最後に半時もこんな獣けだものを相手にしていられるものかと思った。そこで、自分は初さんに

向って、簡単に、

「よければ上がりましょう」

と云った。初さんは怪訝けげんな顔をした。

「上がる？　元気だなあ」

自分は「馬鹿にするねえ、この明盲あきめくら目め。人を見損みそくなやがつて」と云いたかった。しかし口だけは叮嚀ていねいに、一言ひとこと、

「ええ」

と返事をして置いた。初さんはまだぐずぐずしている。驚いたと云うよりも、やっぱり馬鹿にしたぐずつき方かたである。

「おい大丈夫かい。冗談じよつたんじゃねえ。顔色が悪いぜ」

「じゃ僕が先へ行きましょう」

と自分はむっとして歩き出した。

「いけねえ、いけねえ。先へ行っちゃいけねえ、後あとから尾ついて来ねえ」

「そうですか」

「あたりめえ当前あただあな。人つけ。誰が案内を置おき去ざりにして、先へ行く奴があるかい、何でい」

と初さんは、自分を払い退のけないばかりにして、先へ出た。出たと思うと急に速力を増した。腰を折ったり、四つに這はったり、背中を横よこつ丁ちよにしたり、頭あたまだけ曲げたり、坑かの恰好かつこうしだいでいろいろ

ろに変化する。そうして非常に急ぐ。まるで土の中で生れて、銅脈の奥で教育を受けた人間のようなのである。畜生中ちゅうじゅうつ腹はらで急ぎやがるなど、こっちも負けない気で歩き出したが、そこへ行くと、いくら気ばかり張っていても駄目だ。五つ六つ角を曲って、下りたり上あがったり、がたつかせているうちに、初さんは見えなくなつた。と思うと、何とかして、何とか、ててててと云う歌を唄うたう。初さんの姿が見えないのに、初さんの声だけは、坑の四方へ反響して、籠こもったように打ち返してくる。意地の悪い野郎だと思つた。始めのうちこそ、追つついてやるから今に見ていろと云う勢いきおいで、根限こんかぎり這かったり屈かんだりしたが、残念な事には初さんの

歌がだんだん遠くへ行ってしまう。そこで自分は追いつく事はひとまず断念して、初さんのてててててを道案内にして進む事にした。当分はそれで大概の見当けんとうがついたが、しまいにはそのてててても怪しくなつて、とうとうまるで聞えなくなつた時には、さすがに茫然ぼうぜんとした。一本道なら初さんなどを頼りにしなくつても、自力じりきで日の当る所まで歩いて出て見せるが、何しろ、長年掘荒あなした坑だから、まるで土蜘蛛つちぐもの根拠地みたようにいろいろな穴が、とんでもない所に開あいている。滅多めったな穴へ這入はいるとまた腰きり水に漬つかる所か、でなければ、例の逆さの栈道さんどうへ出そうで容易に踏み込めない。

そこで自分は暗い中に立ち留つて、カンテラの灯を見詰めながら考えた。往きには八番坑まで下りて行つたんだから帰りには是非共電車の通る所まで登らなければならない。どんな穴でも上りならば好いとする。その代り下りなら引返して、また出直す事にする。そうして迂路ついていたら、どこかの作事場へ出るだろう。出たら坑夫に聞くとしよう。こう決心をして、東西南北の判然しない所を好い加減に迷ついていた。非常に気が急いて息が切れたが、めっちゃめっちゃに歩いたために足の冷たいのだけは癒つた。しかしなかなか出られない。何だか同じ路を往つたり来たりするような案排で、あんまり、もどかしものだから、壁へ頭をぶ

つけて割っちまいたくなった。どっちを割るんだと云えば無論頭を割るんだが、幾分か壁の方も割れるだろうくらいの疳癩かんしゃくが起つた。どうも歩けば歩くほど天井てんじょうが邪魔になる、左右の壁が邪魔になる。草鞋わらじの底で踏む段々が邪魔になる。坑総体が自分を閉じ込めて、いつまで立っても出してくれないのがもつとも邪魔になる。この邪魔ものの一局部へ頭を擲たきつけて、せめて罅ひびでも入らしてやろうと——やらないまでも時々思うのは、早く華嚴けごんの瀑たきへ行きたいからであつた。そうこうしているうちに、向うから一人の掘子ほりこが来た。ばらの銅あかがねをスノコへ運ぶ途中と見えて例の箕みを抱だいてよちよちカンテラを揺ゆりながら近づいた。この灯を見つけた

時は、嬉しくって胸がどきりと飛び上がった。もう大丈夫と勇んで近寄って行くと、近寄るがものはない、向うでもこっちへ歩いて来る。二つのカンテラが一間ばかりの距離に近寄った時、待ち受けたように、自分は掘子の顔を見た。するとその顔が非常な蒼あおん蔵ぞうであつた。この坑のなかですら、只事ただごととは受取れない蒼ん蔵である。あかるみへ出して、青い空の下で見たら、大変な蒼ん蔵に違ちがない。それで口を利きくのが厭いやになった。こんな奴の癖に人に調戯からかったり、黽なぶつたり、辱はづかしめたりするのかと思つたら、なおなお道を聞くのが厭いやになった。死んだって一人で出て見せると云う気になった。手前共に口を聞くような安っぽい男じゃないと、腹

の中でたしかに申し渡して擦れ違^すった。向うは何にも知らないから、これは無論だまって擦れ違^すった。行く先は暗くな^った。カン・テラは一つにな^った。気はますます焦^い慮^らつて来^た。けれどもなかなか出^なない。ただ道はどこまでもある。右にも左にもある。自分^は右にも這入^った、また左にも這入^った、また真直にも歩^いて見^た。しかし出^られない。いよいよ出^られないのかと、少^しく途方^に暮^れてい^る鼻^の先^で、かあ^んかあ^んと鳴^り出^した。五^六歩^で突^き当^つて、折^れ込^むと、小^さな作^事場^があ^つて、一^人の坑^夫がし^きりに槌^{つち}を振^り上^げて鑿^{のみ}を敲^{たた}いてい^る。敲^くたん^びに鉋^{あらがね}が壁^かから落^ちて来^る。その傍^{そば}に俵^はがある。これ^ははさ^つきスノコ^へ投^げ込^ん

だ俵と同じ大きさで、もういっぱい詰っている。掘子ほりこが来て担かついで行くばかりだ。自分は今度こそいつに聞いてやろうと思つた。が肝心かんじんの本人が一生懸命にかあんかあん鳴らしている。おまけに顔もよく見えない。ちょうどいいから少し休んで行こうと云う気が起つた。幸い俵がある。この上へ尻をおろせば、持って来いの腰掛になる。自分はどさつとア・テ・シ・コを俵の上に落した。すると突然かあんかあんがやんだ。坑夫の影が急に長く高くなつた。鑿のみを持ったままである。

「何をしやがるんでい」

鋭い声が穴いっぱいに響いた。自分の耳には敲たたき込まれるよう

に響いた。高い影は大股に歩いて来る。

見ると、足の長い、胸の張った、体格の逞たくましい男であつた。顔は背の割に小さい。その輪廓りんかくがやや判然する所まで来て、男は留まつた。そうして自分を見下みおろした。口を結んでいる。二重瞼ふたえまぶたの大きな眼を見張っている。鼻筋が真直まつすぐに通っている。色が赭黒あかぐろい。ただの坑夫ではない。突然として云つた。

「貴様は新前しんめえだな」

「そうです」

自分の腰はこの時すでに俵を離れていた。何となく、向うから近づいてくる坑夫が恐ろしかった。今まで一万余人の坑夫を畜生

のように軽蔑^{けいべつ}していたのに、——誓^{ちか}って死んでしまおうと覚悟を
していたのに、——大股に歩いて来た坑夫がたちまち恐ろしく
なった。しかし、

「何でこんな所を迷子^{まご}ついてるんだ」

と聞き返された時には、やや安心した。自分の様子を見て、故意
に俵の上へ腰をおろしたんでないと見極^{みきわ}めた語調である。

「実は昨夕飯場^{ゆうべはんば}へ着いて、様子を見に坑^{あな}へ這入^{はい}ったばかりです」

「一人でか」

「いいえ、飯場頭^{はんばがしら}から人をつけてくれたんですが……」

「そうだろう、一人で這入れる所じゃねえ。どうしたその案内

は」

「先へ出ちまいしました」

「先へ出た？ 手前てまえを置き去りにしてか」

「まあ、そうです」

「太えふて野郎だ。よしよし今に己おれが送り出してやるから待ってる」

と云ったなり、また鑿のみと槌つちをかあんかあん鳴らし始めた。自分は

命令の通り待っていた。この男に逢あったら、もう一人で出る気がなくなった。死んでも一人で出て見せると威張った決心が、急にどこへか行ってしまった。自分はこの変化に気がついていていた。それでも別に恥かしいとも思わなかった。人に公言した事でないか

ら構わないと思った。その後人に公言したために、やらないでも済む事、やってはならない事を毎度やった。人に公言すると、しないのとは大変な違があるもんだ。その内かあんかあんがやんだ。坑夫はまた自分の前まで来て、胡坐をかきながら、

「ちよつと待ちねえ。一服やるから」

と、煙草入を取り出した。茶色の、皮か紙が判然しないもので、股引に差し込んである上から筒袖が被さっていた。坑夫は旨そうに腹の底まで吸った煙を、鼻から吹き出している間に、短い羅宇の中途を、煙草入の筒でぽんと払いた。小さい火球が雁首から勢いよく飛び出したと思ったら、坑夫の草鞋の爪先へ落ちてじゅう

と消えた。坑夫は殻からになつた煙管きせるをぶつと吹く。羅宇の中に籠こもつた煙が、一度に雁首から出た。坑夫はその時始めて口を利きいた。
「御前おめえはどこだ。こんな所へ全体何しに来た。身体からだつきは、すらりとしているようだが。今まで働いた事はねえんだろう。どうして来た」

「実は働いた事はないんです。が少し事情があつて、来たんです。……」

とまでは云つたが、坑夫には愛想が尽きたから、もう、歸るんだとは云わなかった。死ぬんだとはなおさら云わなかった。しかし今までのように、腹なかの内なかで畜生あつかいにして、口先くちばかり叮嚀ていねい

にしていたのとはだいぶん趣が違おもむきう。自分はただ洗い攪ざい自分の
思おもわくを話してしまわないだけで、話しただけは真面目に話した
のである。すこしも裏表はない。腹から叮嚀ていねいに答えた。坑夫はし
ばらくの間黙もくって雁首を眺ながめていた。それからまた煙草を詰め
た。煙が鼻から出だした真最中に口を開ひらいた。

自分がその時この坑夫の言葉を聞いて、第一に驚いたのは、彼
の教育である。教育から生ずる、上品な感情である。見識であ
る。熱誠である。最後に彼の使った漢語である。――彼かれは坑夫
などの夢にも知りようはうはない漢語を安々と、あたかも家庭の
間で昨日きのうまで常住坐臥じょうじゅうざが使つかっていたかのごとく、使った。自分はそ

の時の有様をいまだに眼の前に浮べる事がある。彼れは大きな眼を見張ったなり、自分の顔を熟視したまま、心持頸くびを前の方に出して、胡坐の膝ひざへ片手を逆ぎやくに突いて、左の肩を少し聳そびして、右の指で煙管を握って、薄い唇くちびるの間から奇麗きれいな齒を時々あらわして、——こんな事を云った。句の順序や、単語の使い方は、たしかな記憶をそのまま写したものである。ただ語声だけはどうしようもない。——

「亀の甲より年の功と云うことがあるだろう。こんな賤いやしい商売はしているが、まあ年長者の云う事だから、参考に聞くがいい。青年は情じやうの時代だ。おれも覚おぼえがある。情の時代には失敗するもん

だ。君もそうだろう。己おれもそうだ。誰でもそうにきまつてる。だから、察している。君の事情と己おれの事情とは、どのくらい違うか知らないが、何しろ察している。咎とがめやしない。同情する。深い事故わけもあるだろう。聞いて相談になれる身体からだなら聞きもするが、シキから出られない人間じゃ聞いたって、仕方なし、君も話してくれない方がいい。おれも……」

と云い掛けた時、自分はこの男の眼つきが多少異様にかがやいていたと云う事に気がついた。何だか大変感じている。これが当人の云うごとくシキを出られないためか、または今云い掛けたおれも。その後へ出て来る話のためか、ちよつと分りにくいが、何しろ妙

な眼だった。しかもこの眼が鋭く自分をも見詰めている。そうしてその鋭いうちに、懐旧かいきゅうと云うのか、沈吟ちんぎんと云うのか、何だか、人を引きつけるなつかしみがあつた。この黒い坑あなの中で、人気ひとけはこの坑夫だけで、この坑夫は今や眼だけである。自分の精神の全部はたちまちこの眼球めだまに吸いつけられた。そうして彼の云う事を、とつくり聞いた。彼はおれもを二遍繰り返した。

「おれも、元は学校へ行つた。中等以上の教育を受けた事もある。ところが二十三の時に、ある女と親しくなつて——詳しい話はないが、それが基もとで容易ならん罪を犯した。罪を犯して気がついて見ると、もう社会に容れられない身体からだになつていた。もと

より酔興すいきようでした事じゃない、やむを得ない事情から、やむを得ない罪を犯したんだが、社会は冷刻なものだ。内部の罪はいくらでも許すが、表面の罪はけっして見逃みのがさない。おれは正しい人間だ、曲った事が嫌きらいだから、つまりは罪を犯すようにもなったんだが、さて犯した以上は、どうする事もできない。学問も棄すてなければならぬ。功名も抛なげたなければならぬ。万事が駄目だ。口く惜やしいけれども仕方がない。その上制裁の手に捕とらえられなければならぬ。（故意か偶然か、彼はとくに制裁の手と云う言語を用した。）しかし自分が悪い覚おぼえないのに、むやみに罪を着るなあ、どうしても己おれの性質としてできない。そこで突っ走った。逃

げられるだけ逃げて、ここまで来て、とうとうシキの中へ潜り込んだ。それから六年というもの、ついに日光を見た事がない。毎日坑の中でかんかん敲いているばかりだ。丸六年敲いた。来年になればもうシキを出たって構わない、七年目だからな。しかし出ない、また出られない。制裁の手には捕まらないが、出ない。こうなりや出たって仕方がない。娑婆へ帰れたって、娑婆でした所業は消えやしない。昔は今でも腹ん中にある。なあ君昔は今でも腹ん中にあるだろう。君はどうだ……」

と途中で、いきなり自分に質問を掛けた。

自分は藪から棒の質問に、用意の返事を持ち合せなかったか

ら、はっと思った。自分の腹ん中にあるのは、昔むかしどころではない。一二年前から一昨日おとといまで持ち越した現在に等しい過去である。自分はいつその事自分の心事をこの男の前に打ち明けてしまおうかと思った。すると相手は、さも打ち明けさせまいと自分を遮さへぎるごとくに、話の続きを始めた。

「六年ここに住んでいるうちに人間の汚ないところは大抵見み悉つくした。でも出る気にならない。いくら腹が立っても、いくら嘔吐おうとを催もよおしそうでも、出る気にならない。しかし社会には、——日の当る社会には——ここよりまだ苦しい所がある。それを思うと、辛抱も出来る。ただ暗くって狭せまい所だと思えばそれで済む。身体も

今じゃ銅臭あかがねくさくなつて、一日もカンテラの油を嗅かがなくなつちやいら
れなくなつた。しかし——しかしそりやおれの事だ。君の事じゃ
ない。君がそうなつちや大變だ。生きてる人間が銅臭くなつちや
大變だ。いや、どんな決心でどんな目的を持って来ても駄目だ。
決心も目的もたつた二三日にさんちで突ツつき殺されてしまふ。それが氣
の毒だ。いかにも可哀想かわいそうだ。理想も何にもない鑿のみと槌つちよりほかに
使う術すべを知らない野郎なら、それで結構だが。しかし君のような
——君は学校へ行つたろう。——どこへ行つた。——ええ？ ま
あどこでもいい。それに若いよ。シキシキへ抛ほうり込まれるには若過ぎ
るよ。ここは人間の屑くずが抛り込まれる所だ。全く人間の墓所はかしよだ。

生きて葬ほうごられる所だ。一度踏ふん込んだが最後、どんな立派な人間でも、出られっこのない陷おとし穽あなだ。そんな事とは知らずに、大方ポ
ン引びきの言いなりしだいになって、引張られて来たんだろう。それ
を君のために悲しむんだ。人一人を墮落させるのは大事件だ。殺
しちまう方がまだ罪が浅い。墮落した奴はそれだけ害をする。他
人に迷惑を掛ける。——実はおれもその一人いちにんだ。が、こうなっ
ちや墮落しているよりほかに道はない。いくら泣いたって、悔くやん
だって墮落しているよりほかに道はない。だから君は今のうち早
く帰るがいい。君が墮落すれば、君のためにならないばかりじゃ
ない。——君は親があるか……」

自分はただ一言あると答えた。

「あればなおさらだ。それから君は日本人だろう……」

自分は黙っていた。

「日本人なら、日本のためになるような職業にいたらよかるう。学問のあるものが坑夫になるのは日本の損だ。だから早く帰るがよからう。東京なら東京へ帰るさ。そうして正当な——君に適当な——日本の損にならないような事をやるさ。何と云ってもここはいけない。旅費がなければ、おれが出してやる。だから帰れ。分つたろう。おれは山中組にいる。山中組へ来て安さんと聞きゃあすぐ分る。尋ねて来るが好い。旅費はどうでも都合してや

る」

安さんの言葉はこれで終った。坑夫の数は一万人と聞いていた。その一万人はことごとく理^り非^ひ人^に情^{んじ}を解^{よう}しない畜類の発達した化物とのみ思い詰めたこの時、この人に逢^あったのは全くの小説である。夏の土用に雪が降ったよりも、坑^{あな}の中で安さんに説諭された方が、よほどの奇蹟^{きせき}のように思われた。大晦^{おおみそ}日を越^こすとお正月が来るくらいは承知していたが、地獄で仏と云^{こと}う諺^{わざ}も記憶していたが、窮^{きわ}まれれば通ずという熟語も習った事があるが、困った時は誰か来て助けてくれそうなものだけに思つて、芝居気を起しては困っていた事もたびたびあるが、——この時はまるで違う。

真から一万人を畜生と思い込んで、その畜生がまたことごとく自分の敵だと考え詰めた最強度の断案を、忘るべからざる痛忿つうふんの焰ほのおで、胸に焼きつけた折柄だから、なおさらこの安さんに驚かされた。同時に安さんの訓戒が、自分の初志を一度に翻えひるがし得るほどの力をもって、自分の耳に応こたえた。

しばらくは二人して黙っていた。安さんは一応云うだけの事を云ってしまったんだから、口を利きかないはずであるが、自分は先方に対して、何とか返事をする義務がある。義務をかいては安さんに済まない。心底しんそこから感謝の意を表ひょうした上で、自分の考えも少し聞いてもらいたいのは山々であつたが、何分にも鼻の奥が詰つ

て不自由である。しかも強^しいて言葉を出そうとすると、口へ出ないで鼻へ抜けそうになる。それを我慢すると、唇の両端^{りょうはし}がむずむずして、小鼻がぴくついて来る。やがて鼻と口を塞^せかれた感動が、出端^でを失^はつて、眼の中にたまつて来た。睫^{まつげ}が重くなる。瞼^{まぶた}が熱くなる。大に困^{おおい}つた。安さんも妙な顔をしている。二人ともばつが悪くなつて、差し向いで胡坐^{あぐら}をかいたまま、黙っていた。その時次の作事場^{さくじば}で鉋^{あらがね}を敲^{たた}く音がかあなかあん鳴った。今考えると、自分と安さんが默然^{もくねん}と顔を見合せていた場所は、地面の下何百尺くらいな深さだが、それを正確に知って置きたかった。都会でも、こんな奇遇は少い。銅山^{やま}の中では有ろうはずがない。日の

照らない坑あなの底で、世から、人から、歴史から、太陽からも、忘れられた二人が、ありがたい誨おしえを垂れて、尊たつとい涙を流した舞台があるうとは、胡坐をかいて、默然と互に顔を見守っていた本人よりほかに知るものはあるまい。

安さんはまた煙草たばこを呑み出した。ぷかりぷかりと煙けむが出た。その煙が濃く出ては暗がりに消え、濃く出ては暗がりに消える間に、自分はようやく声が自由になった。

「ありがたいです。なるほどあなたのおっしゃる通り人間のいる所じゃないでしょう。僕もあなたに逢あうまでは、今日限り銅山きょうやまを出ようかと思ってたんです。……」

さすが山を出て死ぬつもりだったとは云いかねたから、ここでちよつと句を切ったら、

「そりやなおさらだ。さつそく帰るがいい」

と、安さんが勢いをつけてくれた。自分はやっぱり黙っていた。すると、

「だから旅費はおれが^{こしら}えやるから」

と云う。自分はさつきから旅費旅費と聞かされるのを、ただ善意に解釈していたが、さればと云って毫^{ごう}も貰う気は起らなかった。

昨日飯場頭^{きのうはんばがしら}の合力^{ごうりよく}を断った時の料簡^{りょうけん}と同じかと云うと、それとも違^{ちが}う。昨日は是非貰^じいたかつた、地平^{へい}へ手を突いてまで貰^たいた

かった。しかし草鞋錢わらじせんを貰うよりも、坑夫になる方が得だと勘定したから、手を出して頂きたいところを、無理に断ったのである。安さんの旅費は始めから貰いたくない。好意を空むなしくすると云う点から見れば、貰わなければ済まないし、坑夫をやめるとすれば貰う方が便利だが、それにもかかわらず貰いたくなかった。これは今から考えると、全く向うの人格に対して、貰っては恥ずべき事だ、こちらの人格が下がるという念から萌きざしたものらしい。先方がいかにも立派だから、こっちも出来るだけ立派にしたい、立派にしなければ、自分の体面を損そこなう虞おそれがある。向うの好意を享うけて、相当の満足を先方に与えるのは、こちらこちらも悦よろこばしい

が、受けるべき理由がないのに、濫^{みだ}りに自己の利得のみを標準^{めやす}に置くのは、乞食と同程度の人間である。自分はこの尊敬すべき皆さんの前で、自分は乞食である、乞食以上の人物でないと云う事実上の証明を与えるに忍びなかった。年が若いと馬鹿な代りに存外奇麗^{きれい}なものである。自分は

「旅費は頂きません」

と断った。

この時安さんは、煙草を二三ぶく吸^{ふか}して、煙管^{きせる}を筒^{つつ}へ入れかけていたが、自分の顔をひよいと見て

「こりゃ失敬した」

と云ったんで、自分は非常に気の毒になった。もしやるから貰って置けとでも強いられたならきつと受けたに違ない。その後^ご気をつけて、人が金を貰うところを見ると、始めは一応辞退して、後では大抵^{ぶっしん}懐へ入れるようだが、これは全くこの心理状態の発達した形式に過ぎないんだろうと思う。幸い安さんがえらい男で、「こりゃ失敬した」と云ってくれたんで、自分はこの形式に陥^{おちい}らずに済んだのはありがたかった。

安さんはすぐさま旅費の件を撤回して

「だが東京へは帰るだろうね」

と聞き直した。自分は、死ぬ決心が少々鈍^{にぶ}った際だから、ことに

よれば、旅費だけでも溜めた上、帰る事にしようと言ふ腹もあつたんで、

「よく考えて見ましょう。いずれその中^{うち}また御相談に参りますから」

と答えた。

「そうか。それじゃ、とにかく路の分る所まで送つてやろう」

と煙草^{たばこ}入^{いれ}を股引^{ももひき}へ差し込んで、上から筒服^{つつぽう}の胴^{かぶ}を被^かせた。自分は

カンテラ^さを提^さげて腰を上げた。安さんが先へ立つ。坑^{あな}は存外登り

安かった。例の段々を四五遍通り抜けて、二度ほど四つん這^ばいに

なったら、かなり天井^{てんじやう}の高い、真直^{まっすぐ}に立って歩けるような路へ出

た。それをだらだらと廻り込んで、右の方へ登り詰めると、突然第一見張所の手前へ出た。安さんは電気灯の見える所で留った。

「じゃ、これで別れよう。あれが見張所だ。あすこの前を右へついて上がると、軌道レールの敷いてある所へ出る。それから先は一本道だ。おれはまだ時間が早いから、もう少し働いてからでなくっちゃあ出られない。晩には帰る。五時過ならいるから、暇があったら来るがいい。気をつけて行きたまえ。さようなら」

安さんの影はたちまち暗い中へ這入はいった。振り向いて、一口ひとくち礼を云った時は、もうカンテラが角を曲っていた。自分は一人でシキの入口を出た。ふらふら長屋まで帰って来る。途中でいろいろ

考えた。あの安さんと云う男が、順当に社会の中で伸びて行ったら、今頃は何に成っているか知らないが、どうしたって坑夫より出世しているに違ない。社会が安さんを殺したのか、安さんが社会に対して済まない事をしたのか——あんな男らしい、すつきりした人が、そうむやみに乱暴を働く訳がないから、ことによると、安さんが悪いんでなくって、社会が悪いのかも知れない。自分^{じゃくねん}は若年であつたから、社会とはどんなものか、その当時明瞭^{めいりょう}に分らなかつたが、何しろ、安さんを追い出すような社会だから碌^{ろく}なもんじゃなかうと考えた。安さんを臍^{ひいき}尻にするせいか、どうも安さんが逃げなければならぬ罪を犯したとは思われない。社

会の方で安さんを殺したとしてしまわなければ気が済まない。その癖今云う通り社会とは何者だか要領を得ない。ただ人間だと思っていた。その人間がなぜ安さんのような好人を殺したのかなおさら分らなかった。だから社会が悪いんだと断定はして見たが、いっこう社会が憎らしくならなかった。ただ安さんが可哀想であつた。できるなら自分と代ってやりたかつた。自分は自分の勝手で、自分を殺しにここまで来たのである。厭いやになれば帰つても差支さしかえない。安さんは人間から殺されて、仕方なしにここに生きているのである。帰ろうたつて、帰る所はない。どうしても安さんの方が気の毒だ。

安さんは墮落したと云った。高等教育を受けたものが坑夫になつたんだから、なるほど墮落に違ない。けれどもその墮落がただ身分の墮落ばかりでなくって、品性の墮落も意味しているようだから痛ましい。安さんも達磨だるまに金を注ぎ込むのかしら、坑の中あなで一六勝負いちろくしやうぶをやるのかしら、ジャン・ボーを病人に見せて調戲からかうのかしら、女房を抵当に——まさか、そんな事もあるまい。昨日きのう着き立ての自分を見て愚弄ぐろうしないものがないうちで、安さんだけは暗い穴の底ながら、十分自分の人格を認めてくれた。安さんは坑夫の仕事はしているが、心しんまでの坑夫じゃない。それでも墮落したと云った。しかもこの墮落から生涯しやうがい出る事ができないと云っ

た。墮落の底に死んで生きてるんだと云った。それほど墮落したと自覚していながら、生きて働いている。生きてかんかん敲たたいている。生きて——自分を救おうとしている。安さんが生きてる以上は自分も死んではならない。死ぬのは弱い。……

こう決心をして、何でも構わないから、ひとまず坑夫になった上として、できるだけ急ぎ足で帰って来ると、長屋の半丁ばかり手前に初さんが石へ腰を掛けて待っている。雨は歇やんだ。空はまだ曇っているが、濡ぬれる気遣きづかいはない。山から風が吹いて来る。寒くても、世界の明かるいのが、非常に嬉しい。自分が嬉しさの余り、疲れた足を擦すりながら、いそいそ近づいてくると、初さんは

奇怪な顔をして、

「やあ出て来たな。よく路が分ったな」

と云った。自分が案内につけられながら、他を置き去りにして、何とかして何とか、ててててと云う唄をうたって、大いに焦して置いて、他が大迷つきに、迷ついて、穴の角へ頭をぶつつけて割って見ようとまで思ったあげく、やっとの事で安さんの御情で出て来れば、「よく路が分ったな」と空とぼけている。その癖親方が怖いものだから、途中で待ち合せて、いっしょに連れて帰ろうと云う目算である。自分は石へ腰を掛けて薄笑いをしているこの案内の頭の上へ唾液を吐きかけてやろうかと思った。しかし自

分は死ぬのを断念したばかりである。当分はここに留^{とど}まらなくつちやならない身体^{からだ}である。唾液を吐きかければ、喧嘩^{けんか}になるだけである。喧嘩をすれば負けるだけである。負けた上にス・ノ・コの中へぶちこまれてはせつかく死ぬのを断念した甲斐^{かい}がない。そこで、こう云う答をした。

「どうか、こうか出て来ました」

すると初さんはなおさら不思議な顔をして、

「へえ。感心だね。一人で出て来たのか」

と聞いた。その時自分は年の割にはうまくやった。旨^{うま}くやったと云うくらいだから、ただ自分の損にならないようにと云うだけ

で、それより以外に賞める価値のある所作じゃないが、とにかく十九にしては、なかなか複雑な曲者だくせものと思う。と云うのは、こう聞かれた時に、安さんの名前がつい咽喉のどの先まで出たのである。ところをとうとう云わずにしまったのが自慢なのだ。随分くだらない自慢だが訳を話せば、こんな料簡りょうけんであつた。山中組の安さんは勢力のある坑夫に違ない。この安さんがわざわざ第一見張所の傍そばまで見ず知らずの自分を親切に連れて来てくれたと云う事が知れ渡れば、この案内者は面目を失うにきまっている。責任のある自分が、責任を抛り出して、先へ坑を飛び出してしまったと分る以上は——しかもそれが悪意から出たと明瞭に証拠だてられる以

上は、こいつは親方に対して済ましちゃいられない。となると後できつと敵かたきを打つだろう。無責任が露ば見るのは痛快だが——自分はけっして寛大の念に制せられたなんて耶蘇教流ヤソきようりゆうの嘘うそはつかない。——そこまでは痛快だが、敵打かたきうちは大に迷惑おおいする。実のところ自分はこの迷惑の念に制せられた。それで、

「ええ、いろいろ路を聞いて出て来ました」

とおとなしい返事をして置いた。

初さんは半分失望したような、半分安心したような顔つきをしたが、やがて石から腰を上げて、

「親方の所へ行こう」

とまた歩き出した。自分は黙って尾いて行つた。昨日親方に逢つたのは飯場だが、親方の住んでる所は別にある。長屋の横を半丁ほど上ると、石垣で二方の角を取って平した地面の上に二階建がある。家はさほど見苦しくもないが、家のほかには木も庭もない。相変らず二階の窓から悪魔が首を出している。入口まで来て、初さんが外から声を掛けると、窓をがらりと開けて、飯場頭が顔を出した。米利安の襯衣の上へどてらを着たままである。「帰ったか。御苦労だった。まああっちへ行つて休みねえ」と云うが早いか初さんは消えてなくなった。後は二人になる。親方は窓の中から、自分は表に立ったまま、談話をした。

「どうです」

「大概見て来ました」

「どこまで降りました」

「八番坑まで降りました」

「八番坑まで。そりゃ大変だ。随分ひどかったでしょう。それで

……」

と心持首を前の方へ出した。

「それで——やっぱりいるつもりです」

「やっぱり」

と繰り返したなり、飯場頭はじつと自分の顔を見ていた。自分も

黙って立っていた。二階からは依然として首が出ている。おまけに二つばかり殖ふえた。この顔を見ると、厭いやで厭いやでたまらない。飯場へ帰ってから、この顔に取り巻かれる事を思い出すと、ぞっとする。それでもいる気である。どんな辛抱をしてもいる気である。しかし「やっぱりいるつもりです」と断然答えて置いて、二階の顔を不意に見上げた時には、さすがに情なかった。こんな奴といっしょに置いてくれと、手を合せて拝まなければ始末がつかないようになり下がったのかと思うと、身体からだも魂も塩かを懸なまけた海鼠このようにたわいなくなつた。その時飯場頭はようやく口を利きいた。奇麗きれいさっぱりと利いた。

「じゃ置く事にしよう。だが規則だから、医者に一遍見て貰ってね。健康の証明書を持って来なくっちゃいけない。——今日と——今日は、もう遅いから、明日あしたの朝、行つて見て貰ったらよかるう。——診察場かい。診察場はこれから南の方だ。上がつて来る時、見えたらう。あの青いペンキ塗りの家うちだ。じゃ今日は疲れたろうから、飯場へ歸つて緩ゆっくり御休み」

と云つて窓を閉たてた。窓を閉てる前に自分はちよつと頭を下げ、飯場へ引返した。緩ゆっくり御休と云つてくれた飯場頭はんばがしらの親切はありがたいが、緩ゆっくり寝られるくらいなら、こんなに苦しみはしない。起きていれば癡どろ猛組もうぐみ、寝れば南京虫ナンキンむしに責められるばかり

だ。たまたま飯の蓋ふたを取れば咽喉のどへ通らない壁土が出て来る。――しかしいる。いるときめた以上は、どうしてもいて見せる。少くとも安さんが生きてるうちにはいる。シキの人間がみんな南京虫になっても、安さんさえ生きて働いてるうちは、自分も生きて働く考えである。こう考えながら半丁ほどの路を降りて飯場はんばへ帰って、二階へ上がった。上がると案のじよう大勢囲炉裏いろりの傍そばに待ち構えている。自分はくさくさしたが、できるだけ何喰わぬ顔をして、邪魔にならないような所へ坐った。すると始まった。皮肉だが、冷評だか、罵詈ばりだか、滑稽こっけいだか、のべつに始まった。

――々覚えている。生涯しやうがい忘れられないほどに、自分の柔らかい頭

を刺激したから、よく覚えている。しかし一々繰返す必要はない。まず大体昨日きのうと同じ事と思えば好い。自分は急に安さんに逢あいたくなつた。例の夕食ゆうめしを我慢して二杯食つて、みんなの眼につかないようにそつと飯場を抜け出した。

山中組はジャンボのぼーの通つた石垣の間を抜けて、だらだら坂の降り際ぎわを、右へ上ると斜はすに頭の上に被かぶさっている大きな槐えんじゅの奥にある。夕暮の門口かどぐちを覗のぞいたら、一人の掘子ほりこがカンテラの灯ひで筒服つつぽうの掃除をしていた。中は存外静かである。

「安さんは、もうお帰りになりましたか」

と叮嚀ていねいに聞くと、掘子は顔を上げてちよいと自分を見たまま、奥

を向いて、

「おい、安さん、誰か尋ねて来たよ」

と呼び出しにかかるや否や、安さんは待ってたと云わんばかりに足音をさせて出て来た。

「やあ来たな。さあ^{あが}上れ」

見ると安さんは唐^{とう}棧^{ざん}の着物に豆^{まめ}絞^{しほり}か何^なにかの三尺を締めて立っている。まるで東京の馬^べ丁^{っとう}のような服^な装^りである。これには少し驚いた。安さんも自分の様子を眺^{なが}めて首を傾^{かし}げて、

「なるほど東京を走ったまんまの服^な装^りだね。おれも昔はそう云う着物を着たこともあったつけ。今じゃこれだ」

と両袖りょうそでの衿ゆきを引っ張って見せる。

「何と見える。車引かな」

と云うから、自分は遠慮してにやにや笑っていた。安さんは、

「ハハハ根性こんじょうはこれよりまだ墮落しているんだ。驚いちゃいけない」

自分は何と答えていいか分らないから、やはりにやにや笑って立っていた。この時分は手持無沙汰てもちぶさたでさえあればにやにやして済みましたもんだ。そこへ行くと安さんは自分より遙はるか世馴よなれている。この体ていを見て、

「さっきから来るだろうと思って待っていた。さあ上あがれ」

と向うから始末をつけてくれた。この人は世馴れた知識を応用して、世馴れない人を救^{たす}ける方の側^{がわ}だと感心した。こいつを逆にして馬鹿にされつけていたから特別に感心したんだろう。そこで安さんの云う通り長屋へ上って見た。部屋はやっぱ広いが、自分の泊った所ほどでもない。電気灯は点いている。囲^い炉^ろ裏^りもある。ただ人数^{にんず}が少い、しめて五六人しかない。しかも、それが向うに塊^{かたま}ってるから、こっちはたった二人である。そこでまた話を始めた。

「いつ帰る」

「帰らない事にしました」

安さんは馬鹿だなあと云わないばかりの顔をして呆あきれている。

「あなたのおっしゃった事は、よく分っています。しかし僕だつて、酔興すいきようにここまで来た訳じゃないんですから、帰るったって帰る所はありません」

「じゃやっぱり世の中へ顔が出せないような事でもしたのか」と安さんは鋭い口調で聞いた。何だか向うの方がぎよっとしたらしい。

「そうでもないんですが——世の中へ顔が出したくないんです」と答えると、自分の態度と、自分の顔つきと、自分の語勢を注意していた安さんが急に噴ふき出した。

「冗談云っちゃいけねえ。そんな酔狂があるもんか。世の中へ顔が出したくないた何の事だ。贅沢^{ぜいたく}じゃねえか。そんな身分に一日でも好いからなつて見てえくらいだ」

「代れば代って上げたいと思います」

と至極^{しごく}真面目に云うと、安さんは、また噴き出した。

「どうも手のつけようがないね。考えて御覧な。世の中へ顔が出したくないものがさ、このシキへ顔が出したくなれるかい」

「ちつとも出したくはありません。仕方がないから——仕方がないんです。昨夕^{ゆうべ}も今日も散々^{いじめ}苛責^{いじめ}られました」

安さんはまた笑い出した。

「太え野郎だ。誰が苛責た。年の若いものつらまえて。よしよしおれが今に敵を打ってやるから。その代り帰るんだぜ」

自分はこの時大変心丈夫になった。なおなお留まる気になつた。あんな獰猛もこっちさえ強くなりやちつとも恐ろしくないんだ、十把一束に罵倒するくらいの勇氣がだんだん出てくるんだと思つた。そこで安さんに敵は取ってくれないでも好いから、どうか帰さずに当分置いて貰えまいかと頼んだ。安さんは、あまりの馬鹿らしさに、気の毒そうな顔をして、呆れ返っていたが、

「それじゃ、いるさ。——何も頼むの頼まないのって、そりや君の勝手だあね。相談するがものはないや」

「でも、あなたが承知して下さらないと、いにくいですから」

「せっかくそう云うんなら、当分にするがいい。長くいちゃいけない」

自分は謹つつしんで安さんの旨むねを領りようした。実際自分もその考えでいたんだから、これはけっして御交際おつきあいの挨拶あいさつではなかった。それからいろいろな話をしたがシキの中の述懐と大した変りはなかった。ただ安さんの兄あにさんが高等官になって長崎にいと云う事を聞いて、大いに感動した。安さんの身になっても、兄さんの身になっても、定めし苦しいだろうと思うにつけ、自分と自分の親と結びつけて考え出したら何となく悲しくなった。帰る時に安さんが出

口まで送って来て、相談でもあるならいつでも来るが好いと云つてくれた。

表へ出ると、いつの間にか曇った空が晴れて、細い月が出ている。路は存外明るい、その代り大変寒い。袷あわせを通して、襦シヤツ衣を通して、蒲鉾かまぼこ形の月の光が肌まで浸しみ込んで来るようだ。両袖を胸の前へ合せて、その中へ鼻から下を突込んで肩をできるだけ聳そびやかして歩あ行き出した。身体からだはいじけているが腹の中はさつきよりだいぶん豊かになった。何の当分のうちだ。馴なれればそう苦にする事はない。何しろ一万余人もかたまつて、毎日毎日いっしょに働いて、いっしょに飯を食つて、いっしょに寝ているんだから、

自分だって七日も練習すれば、一人前に墮落する事はできるに違
ない。——この時自分の頭の中には、墮落の二字がこの通りに出
て来た。しかただこの場合に都合のいい文字として湧いて出た
までで、墮落の内容を明かに代表していなかったから、別に恐ろ
しいとも思わなかった。それで、比較的元気づいて飯場へ帰って
来た。五六間手前まで来ると、何だかわいおい云っている。外は
淋しい月である。自分は家の騒ぎを聞いて、淋しい月を見上げ
て、しばらく立っていた。そうしたら、どうも這入るのが厭に
なった。月を浴びて外に立っているのも、つらくなった。安さん
の所へ行って泊めてもらいたくなった。一歩引き返して見たが、

あんまりだと気を取り直して、のそのそ長屋へ這入った。横手に
広い間^まがあつて、上り口からは障子^{しょうじ}で立て切つてある。電気灯が
頭の上にあるから影は一つも差さないが、騒ぎはまさにこの中^{うち}か
ら出る。自分は下駄^{げた}を脱いで、足音のしないように、障子の傍^{そば}を
通つて、二階へ上がった。段々を登り切つて、大きな部屋を見渡
した時、ほっと一息ついた。部屋には誰もいない。

ただ金^{きん}さんが平たく煎餅^{せんべい}のようになって寝ている。それから例
の帆木綿^{ほもめん}にくるまつて、ぶら下がつてゐる男もいる。しかし両方と
も極めて静^{きわ}かだ。いてもいないと同じく、部屋は漠然^{ばくぜん}としてただ
広いものだ。自分は部屋の真中まで来て立ちながら考えた。床を

敷いて寝たものだろうか、ただしは着のみ着のまままで、ごろりと横になるか、または昨夕ゆうべの通り柱へ倚もたれて夜を明そうか。ごろ寝は寒い、柱へ倚より懸かるのは苦しい。どうかして布団ふとんを敷きたい。ことによれば今日は疲れ果てているから、南京虫ナンキンむしがいても寝られるかも知れない。それに蒲団ふとんの奇麗きれいなのを選よったらよかろう。こ
とさら日によつて、南京虫の数が違わないとも限るまい。といろ
いろな理窟りくつをつけて布団を出して、そうつと潜もぐり込んだ。

この晩の、経験を記憶のまま、ここに書きつけては、自分がお話ふししにならない馬鹿だと吹聴ふいちやうする事になるばかりで、ほかに何の利益も興味もないからやめる。一口ひとくちに云うと、昨夜ゆうべと同じような

苦しみを、昨夜以上に受けて、寝るが早いかな、すぐ飛び起きちゃった。起きた後で、あれほど南京虫に螫さされながら、なぜ性懲しやうちやうりもなくまた布団ふとんを引っ張り出して寝たもんだろうと後悔した。考えると、全くの自業自得じごうじとくで、しかも常識のあるものなら誰でも避けられる、また避けなければならぬ自業自得だから、我れながら浅ましい馬鹿だと、つくづく自分が厭いやになって、布団の上へ胡坐あぐをかいたまま、考え込んでいると、また猛烈にちくりと螫さされた。臀しりと股ももと膝頭ひざがしが一時に飛び上がった。自分は五位鷺ごいさぎのように布団の上に立った。そうして、四囲あたりを見廻した。そうして泣き出した。仕方がないから、紺こんの兵児帯へこおびを解いて、四つに折って、裸

の身体中所嫌わず、ぴしゃぴしゃたた敲き始めた。それから着物を着た。そうして昨夜の柱の所へ行つた。柱に寄りかかった。家が恋しくなつた。父よりも母よりも、艶子さんよりも澄江さんよりも、家の六畳の間が恋しくなつた。戸棚に這入はいつてゐる更紗さらさの布団と、黒天鵲絨くろびろうどの半襟はんえりの掛かつた中形の搔捲かいまきが恋しくなつた。十分でも好いから、あの布団を敷いて、あの搔捲を懸かけて、暖あつたかにして楽々寝て見たい、今頃は誰があの部屋へ寝ているだろうか。それとも自分がいなくなつてから後のちは、机を据すえたまんま、空がらん胴どうにしてあるかしらん。そうすると、あの布団も搔捲も、畳んだなり戸棚にしまつてあるに違ない。もったいないもんだ。父

も母も澄江さんも艶子さんも南京虫に食われないで仕合せだ。今頃は熟睡しているだろう。羨ましい。——それとも寝られないで、のつそつしているかしらん。父は寝られないと疳癪を起して、夜中に灰吹をぽんぽん敲くのが癖だ。煙草を呑むんだと云うが、煙草は仮託で、実は、腹立紛れに敲きつけるんじゃないかと思う。今頃はしきりに敲いてるかも知れない。苦々しい倅だと思つて敲いてるか、どうなつたらうと心配の余り眼を覚まして敲いてるか。どっちにしても氣の毒だ。しかしこつちじゃそれほどにも思っていないから、先方でもそう苦にしちやまい。母は寝られないと手水に起きる。中庭の小窓を明けて、手を洗つて、棧

をおろすのを忘れて、翌朝よく父に叱あくるあそられている。昨夜も今夜もきつと叱られるに違ない。澄江さんはぐうぐう寝ている——どうしても寝ている。自分のいる前では、丸くなったり、四角になつたりいろいろな芸をして、人を釣つてゐるが、いなくなれば、すぐに忘れて、平生へいぜいの通り御膳ごぜんをたべて、よく寝る女だから、是非に及ばない。あんな女は、今まで見た新聞小説にはけっして出て来ないから、始めは不思議に思ったが、ちゃんと証拠があるんだから確かである。こう云う女に恋着しなければならぬのは、よっぽどの因果いんがだ。随分憎らしいと思うが、憎らしいと思ひながらもやッぱり惚ほれ込んでゐるらしい。不都合な事だ。今でも、あの色

の白い顔が眼前めさきにちらちらする。怪けしからない顔だ。艶子さんは起きてる。そうして泣いてるだろう。はなはだ気の毒だ。しかしこっちで惚れた覚おぼえもなければ、また惚れられるような悪戯いたづらをした事がないんだから、いくら起きていても、泣いてくれても仕方がない。気の毒がる事は、いくらでも気の毒がるが仕方がない。構わない事にする。——そこで最後には、ほかの事はどうともするから、ただ安々と楽寝がさせて貰いたい。不断の白い飯も虫唾むしずが走るように食いたいが、それよりか南京虫ナンキンむしのいない床とこへ這入はいりたい。三十分でも好いからぐっすり寝て見たい。その後あとでなら腹でも切る。……

こう考えているとまた夜が明けた。考えている途中でいつか寝たものと見えて、眼が覚めた時は、何にも考えていなかった。それからあとは、のそのそ下へ降りて行って、顔を洗って、南京米を食う。万事昨日の通りだから、省いてしまう。九時の例刻を待ちかねて病院へ出掛ける。病院は一昨日山を登って来る時に見た、青いペンキ塗の建物と聞いているから道も家も間違えようがない。飯場を出て二丁ばかり行くと、すぐ道端にある。木造ではあるがなかなか立派な建築で、広さもかなりだけに、寧猛組とはまるで不釣合である。野蛮人が病気をするんでさえすでに不思議なくらいなのに、病気に罹ったものを治療してやるための器械と

薬品と医者と建物を具えつけたんだから、世の中は妙だと云う感じがすぐに起る。まるで泥棒が金を出し合つて、小学校を建てて子弟を通学させてるようなもんだ。文明と蒙昧の両極端がこのペンキ塗の青い家の中で出逢つて、一方が一方へ影響を及ぼすと、蒙昧がますますぴんぴん蒙昧になつてくる。下手に食い違つた結果が起るもんだ。と考へながら歩いて来ると、また鬼共が窓から首を出して眺めている。せつかくの考へもこの気味のわるい顔を見上げるとたちまち崩れてしまう。あの顔のなかに安さんのようなのが、たった一つでもあれば、生き返るほど嬉しいだろうに、どれもこれも申し合せたように獰猛の極致を尽している。あれ

じゃ、どうしたって病院の必要があるはずがないとまで思った。

天気だけは好都合にすっかり晴れた。赤土を劈いたような山の壁へ日が当る。昨日、一昨日の雨を吸込んだ土は、東から差す日を受けて、まだ乾かない。その上照る日をいくらでも吸い込んで行く。景色は晴れがましいうちに湿とりと調子づいて、長屋と長屋の間から、下の方の山を見ると、真蒼な色が笑み割れそうに濃く重なっている。風は全く落ちた。昨夕と今朝とではほとんど十度以上も違うようである。道傍に、たった一つ蒲公英が咲いている。もったいないほど奇麗な色だ。これも獰猛とはまるで釣り合ない。

病院へ着いた。和土^{たたき}の廊下が地面と擦れ^す擦れに五六間続いている突き当りに、診察室と云う札が懸^かつて、手前の右手に控所と書いてある。今云った一間幅の廊下を横切つて、控所へ這^{はい}入ると、下はやはり和土で、ベンチが二脚ほど並べてある。小さい硝子^{ガラス}窓には受附と楷書で貼^はりつけてある。自分はこの窓口へ行つて、自分の姓名を書いた紙片^{かみきれ}を出すと、窓の中に腰を掛けていた二十三分の若い男が、その紙片を受取つて、ありもしない眉^{まみえ}へ八の字を寄せて、むずかしそうにとくと眺^{なが}めた上、

「こりや御前か」

と、さも横風^{おっふう}に云った。あまり好い心持ではなかった。何の必要

があつて、こう自分を軽蔑けいべつするんだか不平に堪たえない。それで単に、

「ええ」

と出来るだけ愛嬌あいぎょうのない返事をした。受附は、それじゃ、まだ挨あい拶さつが足りないと言わんばかりに、しばらくは自分を睨にらめていたが、こつちもそれっ切り口を結んで立っていたもんだから、

「少し待っている」

と、ぴしゃりと硝子戸ガラスどを締めて出て行つた。草履ぞうりの音がする。あんなにばたばた云わせなくつても好きそうなもんだと思つた。

自分はベンチへ腰を掛けた。受附はなかなか帰つて来ない。ぼ

んやりしていると、眼の前にジャン・ボーが出て来た。金^{きん}さんがよっしよいよっしよいと担^{かつ}がれて来るところが見える。あれでも病院が必要なのかと思った。何のために薬を盛^{てい}つて、患者を施^{せり}療^{りょう}するのか、ほとんど意義をなさない。こんな体裁^{ていさい}のいい偽善^{ぎぜん}はない。病人はいじめるだけいじめる。ジャン・ボーは嘸^{はや}したいだけ嘸^{はや}す。その代り医者にかけてやると云^いうのか。鄭重^{ていちょう}の至^{いた}りである。「おいあっちへ廻^{まわ}れ」

と突然受附^{うけつけ}の声がした。見ると受附は硝子窓の中に威丈高^{いたけだか}に突立^{つたて}って、自分を眼下^{がんげ}に睥睨^{へいげい}している。自分は控所^{こうじょ}を出た。右へ折れて、廊下伝いに診察場へ上がった。薬^{くすり}の臭^{におい}がふんとした。こ

の臭を嗅ぐと等しく、自分も、もうやがて死ぬんだなと思い出した。死んでこの土になったら不思議なものだ。こう云うのを運命というんだろう。運命の二字は昔から知ってたが、ただ字を知ってるだけで意味は分らなかった。意味は分っても、納得がむずかしかった。西洋人が筭を想像するように定義だけを心得て満足していた。けれども人間の一大事たる死と云う実際と、人間の獣類たる坑夫の住んでいるシキとを結びつけて、二三日前まで不足なく生い立った坊っちゃんを突然宙に釣るして、この二つの間に置いたとすると、坊っちゃんは始めてなるほどと首肯する。運命は不可思議な魔力で可憐な青年を弄ぶもんだと云う事が分る。

すると今までただの山であつたものが、ただの山でなくなる。ただの土であつたものがただの土でなくなる。青いばかりと思つた空が、青いだけでは済まなくなる。この病院の、この診察場の、この薬品の、この臭いまでが夢のような不思議になる。元来この椅子に腰を掛けている本人からしてが、何物だかほとんど要領を得ない。本人以外の世界は明瞭に見えるだけで、どんな意味のある世界かさっぱり見当がつかない。自分は、診察場と薬局とをかねたこの一室の椅子に倚つて、敷物と、洋卓と、薬瓶と、窓と、窓の外の山とを見廻した。もつとも明瞭な視覚で見廻したが、すべてがただ一幅の画と見えるだけで、その他には何物をも認める

事ができなかつた。

そこへ戸を開けて、医者があらわれた。その顔を見ると、やっぱり坑夫の類型タイプである。黒のモーニングに縞しまの洋袴ズボンを着て、襟えりの外へ顎あごを突き出して、

「御前か、健康診断をして貰うのは」

と云った。この語勢には、馬に対しても、犬に対しても、是非腹の内なかで云うべきほどの敬意が籠こもっていた。

「ええ」

と自分は椅子を離れた。

「職業は何だ」

「職業って別に何にもないんです」

「職業がない。じゃ、今まで何をして生きていたのか」

「ただ親の厄介やっかいになっていました」

「親の厄介になっていた。親の厄介になって、ごろごろしていたのか」

「まあ、そうです」

「じゃ、ごろつきだな」

自分は答をしなかった。

「裸になれ」

自分は裸になった。医者は聴診器で胸と背中をちよつと視^みた上、いきなり自分の鼻を撮^{つま}んだ。

「息をして見ろ」

息が口から出る。医者は口の所へ手をあてがった。

「今^{こん}度^だ口^{くち}を塞^{ふさ}ぐんだ」

医者は鼻の下へ手をあてた。

「どうでしょう。坑夫になれますか」

「駄目だ」

「どこが悪いですか」

「今書いてやる」

医者は四角な紙片^{かみきれ}へ、何か書いて抛^{ほう}り出すように自分に渡した。見ると気管支炎とある。

気管支炎と云えば肺病の下地^{したじ}である。肺病になれば助かりようがない。なるほどさつき薬の臭^{におい}を嗅^かいで死ぬんだなと虫が知らせたのも無理はない。今度はいよいよ死ぬ事になりそうだ。これから先二三週間もしたら、金^{きん}さんのようによっしよいでジャンボ^{ジャンボ}を見せられて、そのあげくには自分がとうとうジャンボ^{ジャンボ}になって、それから思う存分^{はや}嘸^はし立てられて、敲^{たた}き立てられて、——もつとも新参だから嘸^はしてくれるものも、敲^{たた}いてくれるものも、ないかも知れないが——とどの詰りは、——どうなる事

か自分にも分らない。それは分らなくってもよろしい。生きて動いている今ですら分らない。ただ世界がのべつ、のっぺらぼうに続いているうちに、あざやかな色が幾通りも並んでるばかりである。坑夫は世の中で、もっとも穢きたないものと感じていたが、かように万物を色の変化と見ると、穢ないも穢なくないもある段じゃない。どうしても構わないから、どうとも勝手にするがいい、自分がくつしゅで懐手をしていたら運命が何とか始末をつけてくれるだろう。死んでもいい、生きてもいい。華嚴けごんの瀑たきなどへ行くのは面倒になつた。東京へ帰る？ 何の必要があつて帰る。どうせ二三度咳せきをせくうちの命だ。ここまで運命が吹きつけてくれたもんだから、運

命に吹き払われるまでは、ここにいるのが、一番骨が折れなくつて、一番便利で、一番順当な訳だ。ここにいて、ただ墮落の修業さえすれば、死ぬまでは持てるだろう。肺病患者にほかの修業はむずかしいかも知れないが、墮落の修業なら——ふと往きに眼についた蒲公英たんぽぽに出逢であった。さっきはもったいないほど美しい色だと思ったが、今見ると何ともない。なぜこれが美しかったんだろうと、しばらく立ち留まって、見ていたが、やっぱり美しくない。それからまたあるき出した。だらだら坂を登ると、自然と顔が仰向あおもむきになる。すると例の通り長屋から、坑夫が頬杖ほおづえを突いて、自分を見下みおろしている。さっきまではあれほど厭いやに見えた顔がまる

で土細工つちざいくの人形の首のように思われる。醜みにくくも、怖こわくも、憎らし
くもない。ただの顔である。日本一の美人の顔がただの顔である
ごとく、坑夫の顔もただの顔である。そう云う自分も骨と肉で出
来ただの人間である。意味も何もない。

自分はこう云う状態で、無人むにんの境さかいに行くような心持で、親方の
家うちまでやって来た。案内を頼むと、うちから十五六の娘が、がら
りと障子しょうじをあけて出た。こう云う娘がこんな所にいようはずがな
いんだから、平生へいせいならはっと驚く訳だが、この時はまるで何の感
じもなかった。ただ器械のように挨拶あいさつをすると、娘は片手を障子
へ掛けたまま、奥を振り向いて、

「御父^{おとっ}さん。御客」

と云った。自分はこの時、これが飯場頭^{はんばがしら}の娘だ^{なと}と合点^{がてん}したが、ただ合点したまでで、娘がまだそこに立っているのに、娘の事は忘れてしまった。ところへ親方が出て来た。

「どうしたい」

「行って来ました」

「健康診断を貰って来たかい。どれ」

自分は右の手に握っていた診断書を、つい忘れて、おやどこへやっatarouかと、始めて気がついた。

「持ってるじゃないか」

と親方が云う。なるほど持っていたから、皺しわを伸のして親方に渡した。

「気管支炎。病氣じゃないか」

「ええ駄目です」

「そりゃ困ったな。どうするい」

「やっぱり置いて下さい」

「そいつあ、無理じゃないか」

「ですが、もう帰れないんだから、どうか置いて下さい。小使でも、掃除番でもいいですから。何でもしますから」

「何でもするったって、病氣じゃ仕方がないじゃないか。困った

な。しかしせつかくだから、まあ考えてみよう。明日までには大概様子が分るだろうからまた来て見るがいい」

自分は石のようになって、飯場^{はんば}へ帰って来た。

その晩は平気で囲炉裏^{いろり}の側^{そば}に胡坐^{あぐら}をかいていた。坑夫共が何と云っても相手にしなかった。相手にする料簡^{りょうけん}も出なかった。いくら騒いでも、愚弄^{からか}っても、よしんば踏んだり蹴^けたりしても、彼らは自分と共に一枚の板に彫りつけられた一団の像のように思われた。寝るときは布団^{ふとん}は敷かなかった。やはり囲炉裏^{いろり}の傍^{そば}に胡坐をかいていた。みんな寝着いてから、自分もその場へ仮寝^{うたたね}をした。囲炉裏へ炭を継^つぐものがないので、火の気^けがだんだん弱くなっ

て、寒さがしだいに増して来たら、眼が覚めた。襟えりの所がぞくぞくする。それから起きて表へ出て空を見たら、星がいっぱいあった。あの星は何しに、あんなに光ってるのだろうと思って、また内へ這はい入った。金きんさんは相変わらず平たくなって寝ている。金さんはいつジ・ヤン・ボーになるんだろう。自分と金さんとどっちが早く死ぬだろう。安さんは六年このシ・キに這入っていると聞いたが、この先何年鉦あらがねを敲たたくだろう。やっぱりしまいには金さんのように平たくなって、飯場の片隅かたすみに寝るんだろう。そうして死ぬだろう。――自分は火のない囲炉裏はたの傍はたに坐って、夜明まで考えつつ書いていた。その考えはあとから、あとから、仕切りしきりなしに出て来た

が、いずれも干^ひ枯^{から}びていた。涙も、情^{なさけ}も、色も香^かもなかった。怖^{こわ}い事も、恐ろしい事も、未練も、心残りもなかった。

夜が明けてから例のごとく飯を済まして、親方の所へ行った。

親方は元気のいい声をして、

「来たか、ちょうど好い口が出来た。実はあれからいろいろ探したがどうも思わしいところがないんでね、——少し困ったんだが。とうとう旨^{うま}い口を見附^めけた。飯場の帳^{ちよう}附^{つけ}だがね。こりや無ければ、なくつても済む。現に今までは婆さんがやってたくらいだが、せっかくの御頼みだから。どうだねそれならどうか、おれの方で周旋ができようと思うが」

「はあありがたいです。何でもやります。帳附と云うと、どんな事をするんですか」

「なあに訳はない。ただ帳面をつけるだけさ。飯場にああ多勢いる奴が、やや草鞋^{わらじ}だ、やや豆だ、ヒジキだって、毎日いろいろなものを買うからね。そいつを一々帳面へ書き込んで貰やあ好いんだ。なに品物は婆さんが渡すから、ただ誰が何をいくら取ったと云う事が分るようにして置いてくれればそれで結構だ。そうするとこっちでその帳面を見て勘定日に差し引いて給金を渡すようにする。――なに力業^{ちからわざ}じゃないから、誰でもできる仕事だが、知っての通りみんな無筆^{よりあい}の寄合だからね。君がやってくれと

こつちも大変便利だが、どうだい帳附は」

「結構です、やりましょう」

「給金は少くって、まことに御気の毒だ。月に四円だが。――食料を別にして」

「それでたくさんです」

と答えた。しかし別段に嬉しいとも思わなかった。ようやく安心したとまでは固^{もつこ}り行かなかった。自分の鉱山における地位はこれでやっときまつた。

翌^{あくるひ}日から自分は台所の片隅に陣取って、かたのごとく帳^{ちやうつけ}附を始めた。すると今まであのくらい人を軽^{けい}蔑^{べつ}していた坑夫の態度がが

らりと變つて、かえつて向うから御世辞を取るようになった。自分もさつそく墮落の稽古けいこを始めた。南京米ナンキンまいも食つた。南京虫ナンキンむしにも食われた。町からは毎日毎日ポン引びきが椋鳥むくどりを引張つて来る。子供も毎日連れられてくる。自分は四円の月給のうちで、菓子を買つては子供にやつた。しかしその後東京のちへ帰ろうと思つてからは断然やめにした。自分はこの帳附を五箇月間無事に勤めた。そうして東京へ歸つた。——自分が坑夫についての経験はこれだけである。そうしてみんなな事実である。その証拠には小説になつていないでも分る。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
